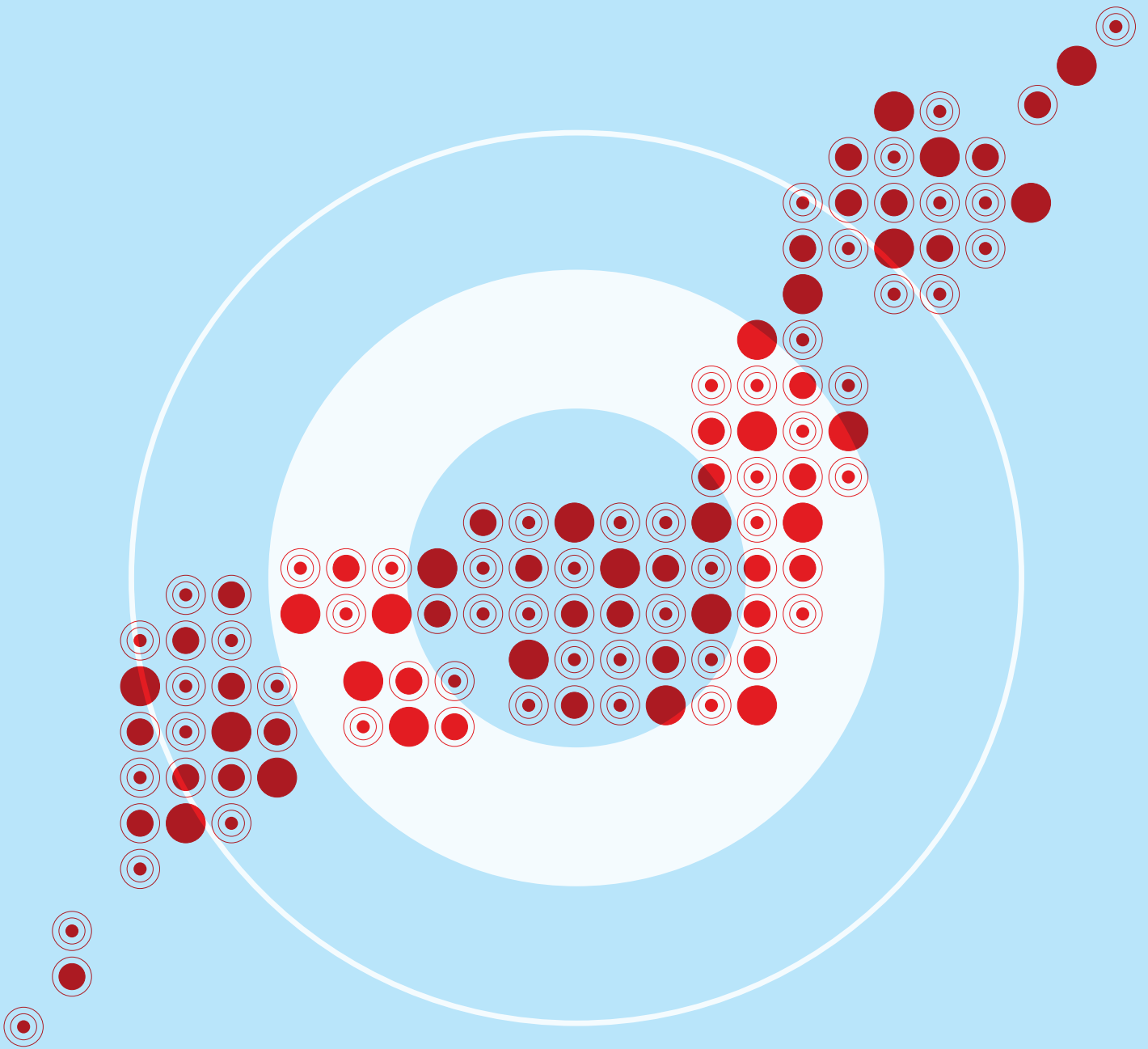


2019年度

# 文化芸術創造都市推進事業

## 成果報告書



# 目次

---

<b>第1章 創造都市ネットワーク日本（CCNJ）の活動報告</b>	
(1) 幹事団体会議の開催	… 2
(2) 創造都市ネットワーク会議（総会）	… 3
<b>第2章 CCNJおよびユネスコ創造都市ネットワークに関する調査・情報収集</b>	
(1) 加盟自治体拡大に向けた意向調査	… 4
(2) 第13回ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会	… 7
<b>第3章 会議、研修の実施</b>	
(1) 創造農村ワークショップ in 豊岡市	…10
(2) 創造都市政策セミナー in 豊島区	…11
(3) 現代芸術の国際展部会 in 宇部市	…12
(4) 分科会	…13
<b>第4章 活動促進、交流促進、CCNJウェブサイトの運営、その他</b>	
(1) 活動促進、交流促進	…14
(2) ウェブサイト等情報発信力の充実	…16
(3) その他	…17
<b>添付資料</b>	
(1) 創造農村ワークショップ in 豊岡市	…19
(2) 創造都市政策セミナー in 豊島区	…30
(3) 現代芸術の国際展部会 in 宇部市	…48
(4) 創造都市ネットワーク会議（総会）	…63

## 第1章 創造都市ネットワーク日本（以下、CCNJ）の活動報告

### (1) 幹事団体会議の開催

#### 1) 平成31年度第1回幹事団体会議

日 時 平成31年4月24日（水）14：00～

会 場 文化庁 地域文化創生本部3階 大会議室

参加者 札幌市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、高岡市、金沢市、可見市、浜松市、京都市、神戸市、篠山市、宇部市、高松市、北九州市、大分市  
文化庁、顧問、事務局

〈報告事項・意見交換〉

参加登録状況について

令和元年度 事業計画と役割分担について

令和2年度 事業計画（案）について

次期幹事団体都市について

#### 2) 令和元年度第2回幹事団体会議

日 時 令和元年9月6日（金）13：00～

会 場 豊岡稽古堂3階 交流室3-1

参加者 札幌市、八戸市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、金沢市、可見市、浜松市、京都市、神戸市、丹波篠山市、宇部市、高松市、北九州市、大分市  
文化庁、顧問、事務局

〈報告および承認事項・意見交換〉

参加登録状況について

令和元年度 事業の進捗確認について

令和2年度 事業計画（案）について

次期幹事団体および代表幹事都市について

#### 3) 令和元年度第3回幹事団体会議

日 時 令和2年2月5日（水）10：30～

会 場 アクトシティ浜松コンgresセンター 43会議室

参加者 札幌市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、高岡市、金沢市、可見市、浜松市、京都市、神戸市、丹波篠山市、宇部市、高松市、北九州市、大分市  
文化庁、顧問、事務局

〈審議・報告・意見交換事項〉

参加登録状況について

令和元年度総会の議案について

令和元年度総会の進行について

## (2) 創造都市ネットワーク会議（総会）



日 時 令和2年2月5日（水）13：30～

会 場 アクトシティ浜松コンgresセンター 41会議室

主 催 文化庁、創造都市ネットワーク日本

共 催 浜松市

出席団体 自治体36、団体8、個人会員1名 議決にかかる定員45

〈次第〉

鈴木 康友 浜松市長挨拶

中岡 司 文化庁次長挨拶

### 議案審議

第1号議案 令和元年度事業報告について→賛成多数により承認

第2号議案 令和2年度事業計画（案）について→賛成多数により承認

第3号議案 次期幹事団体の改選（案）について→賛成多数により承認

### CCNJ新規参加団体の紹介

### CCNJ顧問による総括

青木 保 創造都市ネットワーク日本顧問

佐々木 雅幸 創造都市ネットワーク日本顧問

### 事務局からの連絡

## 第2章 CCNJおよびユネスコ創造都市ネットワークに関する調査・情報収集

### (1) 加盟自治体拡大に向けた意向調査

#### 1) 調査の概要及び結果

CCNJは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会における文化プログラムの“レガシー”と捉えられ、1年以内の延期が決定したとはいえ、2020年以降も引き続き文化政策に取り組む自治体のネットワーク組織として一層の拡大、発展が期待されている。しかしながら、ネットワーク組織としては新規加盟の増加も鈍化し、各取り組みに参加する自治体が固定化する傾向にあることは否めない。

こうした課題に対応し、新規加盟につながるインセンティブ及び加盟自治体にとってメリットを感じる取り組みを把握し、より一層の加盟自治体の拡大に資するため、令和元年度においては、以下の調査を実施した。

- ①都道府県庁所在地の非加盟自治体の意向調査
- ②参加が少ない加盟自治体の意向調査

#### ①都道府県庁所在地の非加盟自治体の意向調査

##### 1) 調査の概要

- ・期 間：令和元年11月上旬から11月下旬
- ・対 象：CCNJに加盟していない県庁所在地の自治体。計22自治体

青森市、秋田市、福島市、水戸市、宇都宮市、千葉市、富山市、福井市、甲府市、長野市、岐阜市、津市、大津市、和歌山市、鳥取市、松江市、徳島市、福岡市、佐賀市、長崎市、宮崎市、鹿児島市

- ・回収率：100%
- ・手 法：ファクシミリによるアンケート調査

##### 2) 調査結果

- ・CCNJの認知及び加盟の状況については、「知っている／加入を検討したことがある」が4自治体、「知っている／加入を検討したことはない」が6自治体、「知らない」が11自治体、「その他」が1自治体であった。
- ・「知っている」と回答した10自治体のうち、7自治体は理由として「加盟のメリットが分からなかったから」としており、「加盟してもメリットを感じられないと考えたから」の回答は1自治体のみであり、CCNJに加盟するメリットについてのPRが不足していることがわかった。
- ・なお、1自治体は現在加盟を「検討中」と回答しており、「その他」の1自治体は市内の大学や産業界からなる組織の構成員であることから単独での加盟は予定していないとの回答であった。
- ・一方、「知らない」という回答は11自治体であり、そのうち10自治体についてはCCNJについて「知りたい」と回答しており、非加盟自治体への情報提供のニーズがあることがわかった。

## ②参加が少ない加盟自治体の意向調査

### 1) 調査の概要

- ・ 期 間：令和元年12月上旬から令和2年2月中旬
- ・ 対 象：過去2年間、CCNJで実施した各事業に参加していない加盟自治体。計14自治体
- ・ 回収率：92.9%（未回答1自治体）
- ・ 手 法：ヒアリング調査（8自治体）及びファクシミリによるアンケート調査（6自治体）

### 2) 調査結果

#### 〈創造都市政策の取り組み状況〉

- ・ 創造都市の取り組みについては、全ての自治体で継続して積極的に取り組まれており、首長の交代等の影響により政策が転換したなどの回答はヒアリングにおいてもなかった。
- ・ 別府市では、地域アーツカウンシルである「アーツ・コンソーシアム大分」や特定非営利活動法人 BEPPU PROJECTと連携しており、また、出雲市では文化芸術の有識者をアドバイザーとして迎えるなど、専門家を活用した取り組みの推進の事例がみられた。別府市及び竹田市では、地場産業と積極的に連携した取り組みも進められており、創造都市として先進的な自治体であると言える。
- ・ 加えて、堺市（フェニーチェ堺（堺市民芸術文化ホール）、2019年10月開館）及び久留米市（久留米シティプラザ、2016年4月開館）では複合文化施設が近年整備され、また、岡山市（岡山芸術創造劇場（仮称））では2022年秋にオープンが予定されるなど、新たな文化拠点の形成も進められている。

#### 〈他市町村との連携〉

- ・ 他市町村との連携については、4自治体で近隣の自治体との連携の取り組みが行われている。久留米市においては、筑後川流域圏での取り組みが挙げられた。
- ・ 一方、北海道では（公財）北海道文化財団が毎年公演プログラムを紹介し、道内の複数の自治体で費用を分担して巡回公演を開催するなど、遠隔地であるが故の連携の仕組みができています。また、尾道市では広島県と連携した文化事業が開催されるなど、道府県との連携の事例が挙げられた。道府県によっては、年度当初に市町村を対象とした文化行政に関する説明会が開催されており、その場が他自治体との意見交換の場となっているという意見も挙げられた。

#### 〈CCNJ加盟の経緯〉

- ・ CCNJ加盟の経緯は、他の加盟自治体からの情報提供を契機とした加盟が2自治体、佐々木顧問をはじめとする有識者からの情報提供を契機とした加盟が6自治体であった。
- ・ しかし、6自治体においては未回答あるいはヒアリングでは経緯はわからないという回答が挙げられ、また、加盟自体を知らない職員もいるなど、加盟当時の担当者が異動したことにより、そもそのメリットが引き継がれていないことが各事業に参加しない理由となっていることが想定される。

#### 〈CCNJのための予算の有無〉

- ・ 先述のCCNJ加盟のメリットの引継ぎの不足とともに、CCNJの各事業に参加するための予算を確保していると回答した自治体は1自治体のみであり、2自治体はテーマによっては他予算を流

用しており、旅費等の予算の確保が困難となっている。

- ・また、遠隔地で開催される各事業に参加するためのメリットを部署内で説明することが困難という意見もヒアリングでは挙げられており、近隣での開催あるいは各地域の拠点都市での開催を希望する意見がヒアリングを実施した8自治体全てで挙げられている。

〈取り上げてほしいテーマ等〉

- ・今後の参加意向及び取り上げてほしいテーマについては、全国の自治体における地方文化芸術推進基本計画の策定状況及び内容や文化財の活用方策、観光との連携、にぎわい創出といった、近年国が重点的に実施している施策と関連した取り組みについての回答があり、それに伴う国の助成金情報についての情報提供が期待されていることがわかった。
- ・また、各地の創造都市関連の取り組みの紹介は有益であると認識されており、一層の情報提供が期待されている。
- ・各事業の参加についても関心のあるテーマであれば参加したいとする回答がヒアリングで2自治体、アンケートで1自治体の回答となっている。

## 2) 2020年度以降に向けての取り組み（提案）

### ①CCNJ加盟のメリットの整理及び多様な情報提供内容の充実

CCNJ自体の認知度の向上を図り、また、担当者の異動等により加盟当初に感じられたメリットが引き継がれていないケースもあることから、パンフレットやホームページ、SNS等の内容の再検討を行い、CCNJ加盟のメリットを整理し、加盟促進を重点的にPRすることのできるコンテンツに再編集することが求められる。

加えて、文化芸術と観光との連携や文化財の活用等、複数の自治体で期待されている国の施策の最新動向の紹介、国及び独立行政法人日本芸術文化振興会の助成金情報など、迅速かつ丁寧な情報提供内容の充実が期待される。

### ②各事業のテーマの早期の設定及び情報提供

現在実施されている総会、政策セミナー、国際展部会及び創造農村ワークショップで取り上げられるテーマについて、可能な限り早期に設定し、加盟自治体に情報提供されることが望まれる。可能であれば、前年度の開催地の決定に合わせて、ある程度のテーマを示すことで、予算の確保あるいは流用を含めた旅費及びスケジュールの確保が容易になり、参加を促すことが期待される。

### ③道府県の文化行政の説明会の活用

先述の通り、各道府県では年度当初に、市町村に向けて当該年度の文化行政の説明会が開催されている。文化庁では、毎年、地方における文化行政の状況についての調査を実施しており、担当部署を把握している。調査と合わせて、各道府県の協力により当該の説明会で文化庁の施策を説明するとともに、CCNJの加盟のメリットを説明することで認知度の向上が対されるとともに、文化庁地域文化創生本部の全国的なネットワークの形成に寄与することが期待される。

### ④各地で開催される部会の重点開催

各道府県の文化行政の説明会の活用とともに、各地で開催される地域ブロックでの部会の開催を拡充していくことが期待される。ゲストを招へいた部会を開催する必要はなく、文化庁による施策及び助成

金の説明や開催される地域ブロックでの先進的な取り組みの事例紹介などを実施するとともに、取り組みの現場の視察を行うことで、開催が容易になるとともに、参加自治体にとって有効な連携ネットワークの形成に資するものとなる。

## (2) 第13回ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会

### 1) 概要

『ユネスコ創造都市の市長ら 持続可能な開発のため文化へ力を注ぐ』

日 程 2019年6月10日（月）～6月15日（土）

2019年6月10日～15日にかけて、イタリアのファブリアーノにおいて第13回ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会が開かれ、50人の市長を含め、世界の約145都市から480人が参加した。

市長らは文化に重点を置いた政策を通して、国連の「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を達成することを誓った。また、「理想の都市」のテーマで、革新的かつ包括的な都市計画を実施するために、文化と創造性を活かすことによって各都市がどのように地域社会のニーズに取り組んでいるかという実施例を共有した。

6月12日、イタリアのセルジョ・マッタレラ大統領、ユネスコのアーネスト・オットーネ・R文化担当事務局長補、ファブリアーノのカプリエーレ・サンタレリ市長、ユネスコの MARIA・フランチェスカ・メルローニ創造都市親善大使が会談し、人と地域社会を結び、対話を促し、社会・経済・環境への建設的な変化をもたらす文化の力について強調した。マッタレラ大統領は、「文化はすべての境界を越える」と述べた。

#### ①持続可能な開発のために 文化の横断的な力

参加者たちは教育・包括・環境・経済成長を含めた開発範囲への文化の役割に注目し、またSDGs（持続可能な開発目標）を達成するための文化の横断的な貢献に主眼を置いて、都市の未来について考察した。都市計画担当者や市長らは、持続可能でより良い都市にするため、非常に文化へ力を注いでいる。創造都市は新しい試みが実施されるにつれ、持続可能な開発の革新的な成功例をもたらす実験の中心地として頭角を現している。

例えば、文学の認定都市は、すべての人へ表現の自由と読み書きの能力を保証するとともに、多言語の環境を促進している。【SDG 4：質の高い教育をみんなに】食文化の都市は、責任ある生産と消費行動に向けて道を開拓する。【SDG 8：働きがいも経済成長も／SDG12：つくる責任つかう責任】映画と音楽の都市は、人権・平等・連帯を促す機会を提供する。【SDG 6：安全な水とトイレを世界中に／SDG10：人や国の不平等をなくそう／SDG16：平和と公正をすべての人に】デザインの都市は、ソーシャル・イノベーションや地球市民という考え方を推し進めるだけでなく、住宅や公共空間、アクセスや動きやすさについて再考する。【SDG 4／SDG11：住み続けられるまちづくりを】クラフト&フォークアートの都市は、世代間の対話と、地域社会の慣例の保護を保証するとともに、文化的な表現や伝統の多様性を活かす。【SDG11】メディアアートの都市は、新しい技術を用いて現代の都市の物語と空間を発展させ、文化的な表現を行う。【SDG11】



## ②LAB. 2030—革新的なアイデアを生み出す

会議では、創造都市が地方政策に文化を導入している様々な方法を説明した「都市の声：ユネスコ創造都市 持続可能な開発のための2030アジェンダへ向けて」と題した、「UCCN LAB. 2030 イニシアティブ」の発行を発表した。

例えば、使われていないインフラへの試験的な対策を含め、経済発展への新しい方針を調査するために、産業都市から将来を見据えた都市へ移行する戦略がフランスのサンテティエンヌで実施された。

ブラジルのサントスでは、主流から外されているコミュニティ出身の人々のために、技能開発を奨励し、エンプロイアビリティ（雇用されうる能力）を高めるクリエイティブ・ファクトリーが設立された。他にも、エジプトのカイロでは伝統と地方経済を結びつける新しい方法が出てきたり、オーストラリアのシドニーでは、地方行政が性別による偏見に立ち向かうことを誓い、女性作家の数が2015年から2018年の3年間で32%から53%に増加した。

現在、72か国に180の創造都市がある。地理・人口・経済によって異なるが、それらの都市はすべて創造的な産業を促進し、文化的な生活への参加を促し、文化を持続可能な都市開発政策に組み込むために、革新的な最善の方法を実施し、都市間で情報を交換している。ネットワークはまた、芸術的交流、認定都市間および公共部門と民間部門間の提携、そして調査をサポートしている。

2020年の年次総会はブラジルのサントスで「創造性、平等への道」というテーマで開催する。

## 2) 結論

日 程 2019年6月14日（金）

我々、ユネスコ創造都市ネットワークの加盟都市は、イタリアのファブリアーノにおいて第13回年次総会を開催した。開催都市のファブリアーノの寛大さと親切なもてなしに対し、感謝申し上げる。われわれは、国際協力を促すユネスコの方針と権限のために尽力する決意を新たにす。第13回年次総会は、協議により以下の項目について合意に達した。

ユネスコ創造都市ネットワークは、協働とイノベーションに向けたユネスコの国際的プラットフォームとしての立場から、

1. 「国連グローバルアジェンダ2030」に明記されている持続可能な開発に向けて、文化と創造性を活かすというネットワークのミッションの重要性を強調する。
2. 多様性と開発の基本的価値観を維持する。
3. 世界の都市レベルでの開発方向の多様性、および文化の多様性へ寄与し続けることを目的とするネットワークに必要不可欠なものとして、地域ごとに代表都市を置くことを復活させる。
4. SDG11に従って持続可能な都市やコミュニティを育成するため、文化・創造性・協働・イノベーションの効果を活かし、新たに指導を行っていく。
5. 創造性の効果に基づいてエビデンスを確立するマルチステークホルダー・パートナーシップにより、経験・知識・ベストプラクティス（最優良事例）の共有に大いに寄与し、社会的・経済的発展を支援する。とりわけ創造経済と地方機関の強化により、都市化の課題や機会に対応するため、コミュニ

ティにおける社会的関与や参加を拡大していく。

6. アジェンダ2030の精神に則って、地域・国・国際レベルにおいて持続可能な開発への影響と成果を証明・評価することに重点を置き、ユネスコ創造都市ネットワークの運営と持続性に対して長期的戦略を展開していくことを推奨する。
7. さらに、国や国際レベルにおいてネットワークの重要性や影響を拡大するために、特にユネスコ国内委員会、ユネスコチェア&インスティテュートの支援を得て、優先・強化された共通のコミュニケーションプランを通じ、クリエイティブクラスターだけでなく都市内や都市間の横断的な視点から、支援活動と共同事業に対する戦略を展開していくことを推奨する。
8. 研究と実践の関連性に基づいた政策設計や立案の情報提供をするネットワークの役割を広げるため、資源調査と経過測定を通して、この関連性をより明確に述べる必要性を強調する。
9. 調整委員会の現在の構成メンバーを支持する。任期は2年毎に更新される。また、ネットワークの戦略実施に向けて、各クラスター内におけるリーダーシップを確保するコーディネーターの責任を再度主張する。
10. 第14回年次総会がラテンアメリカで初めてとなるブラジルのサントスで開催されることを嬉しく思う。これはネットワークの活動が世界的に広がっていることを示している。

---

## (2) 第13回ユネスコ創造都市ネットワーク年次総会

### 1) 概要

ユネスコ創造都市ネットワークHP “UNESCO Creative Cities Mayors Invest in Culture for Sustainable Development” を和訳したもの

<https://en.unesco.org/creative-cities/events/unesco-creative-cities-mayors-invest-culture-sustainable-development> (最終確認：令和2年3月24日)

### 2) 結論

ユネスコ創造都市ネットワークHP “CONCLUSIONS OF THE XIIIITH ANNUAL CONFERENCE OF THE UNESCO CREATIVE CITIES NETWORK 14 June 2019” を和訳したもの

[https://en.unesco.org/creative-cities/sites/creative-cities/files/xiiiic\\_uccn\\_conclusions\\_eng.pdf](https://en.unesco.org/creative-cities/sites/creative-cities/files/xiiiic_uccn_conclusions_eng.pdf) (最終確認：令和2年3月24日)

## 第3章 会議、研修の実施

### (1) 創造農村ワークショップ in 豊岡市



日 程 令和元年9月6日（金）、7日（土）

場 所 豊岡市役所 大会議室 ほか

共 催 豊岡市

内 容 9月6日（金）

「地域の持つ“創造性”と“多様性”」

・主催者挨拶 石飛 英人氏（文化庁地域文化創生本部 上席調査役）

・開催地挨拶と豊岡市取組紹介「豊岡の挑戦」

中貝 宗治氏（豊岡市長）

・基調講演「この街で世界と出会う」

平田 オリザ氏（劇作家、演出家、劇団青年団主宰）

・パネルディスカッション「創造農村の創造性と多様性」

パネリスト 田口 幹也氏（城崎国際アートセンター 館長）

松本 美子氏（旅館「富士見屋」 若女将）

モデレーター 杉浦 幹男（アーツカウンシル新潟／アーツカウンシルみやぎ

プログラムディレクター）

・総括 佐々木 雅幸氏（創造都市ネットワーク日本顧問、文化庁地域文化創生本部主任研究官、同志社大学特別客員教授）

・エクスカージョン

豊岡市中心市街地視察（豊岡復興建築群、カバンストリート他）

第0回豊岡演劇祭 青年団公演「東京ノート・インターナショナルバージョン」鑑賞

9月7日（土）

城崎温泉街自由見学

参加人数 59人

(2) 創造都市政策セミナー in 豊島区



日 程 令和元年10月15日（火）、16日（水）

場 所 豊島区役所 1階 としまセンタースクエア ほか

共 催 豊島区

内 容 10月15日（火）

- ・主催者挨拶 森 孝之氏（文化庁 審議官）
- ・基調講演 「財政再建から文化政策への軌跡」  
高野 之夫氏（豊島区長）
- ・コメント 佐々木 雅幸氏
- ・パネルディスカッション「民間の力を活用した文化によるまちづくり」  
パネリスト 城所 信英氏（豊島区国際アート・カルチャー特命大使）  
上村 昌弘氏（池袋マルイ 店長）  
平田 直司氏（サンシャインシティプリンスホテル 事業戦略チーフマネージャー）  
金子 智雄氏（豊島区政策経営部長）  
原島 克典氏（豊島区土木担当部長）
- ファシリテーター 綿江 彰禪氏（一般社団法人芸術と創造 代表理事）
- ・東アジア文化都市2019豊島の紹介  
小澤 弘一氏（豊島区国際文化プロジェクト推進担当部長）
- ・エクスカージョン  
庁舎まるとミュージアム視察

10月16日（水）

- ・エクスカージョン  
東京建物 Brillia HALL（豊島区立芸術文化劇場）、IKEBUS（イケバス）、  
Oeshiki Project 《BEAT》 見学

参加人数 62人

(3) 現代芸術の国際展部会 in 宇部市



日 程 令和元年10月17日（木）、18日（金）

場 所 宇部市文化会館 ほか

共 催 宇部市

内 容 10月17日（木）

- ・開催地挨拶 久保田 后子氏（宇部市長）
- ・主催者挨拶 後藤 幸宏氏（文化庁地域文化創生本部 調査役）
- ・CCNJ顧問挨拶 佐々木 雅幸氏
- ・事例紹介「UBEビエンナーレについて」  
庄賀 美和子氏（宇部市観光・シティプロモーション推進部 部長）
- ・基調講演「地域に受け入れられる アートフェスティバル」  
建畠 哲氏（多摩美術大学 学長）
- ・担当者ミーティング  
「長期的なフェスティバル開催手法と日常のメンテナンス」  
山本 容資氏（宇部市UBEビエンナーレ推進課 学芸員）  
「都市・公園政策との関係（景観を含む）」  
白井 幸雄氏（宇部市ときわ公園課 課長）  
「宇部市の現代アートの取組（民間団体の取組を中心として）」  
原井 輝明氏（宇部フロンティア大学短期大学部 准教授）
- ・宇部市渡辺翁記念会館視察

10月18日（金）

- ・オプションルツアー  
第28回UBEビエンナーレ・山口情報芸術センター視察

参加人数 基調講演 254人

担当者ミーティング 52人

#### (4) 分科会

##### ■中国・四国ブロック

日 程 令和元年10月17日（木）

場 所 宇部市文化会館

内 容 ・講演「最近の国の文化行政の動向について」

後藤 幸宏氏

・講演「指定管理者制度下における近年の劇場・音楽堂の動向と今後の課題」

柴田 英杞氏（（独）日本芸術文化振興会 プログラムディレクター（演劇・劇場）、（公社）全国公立文化施設協会 アドバイザー）

・ディスカッション

参加人数 23人（うち非会員 5人）

## 第4章 活動促進、交流促進、CCNJウェブサイトの運営、その他

### (1) 活動促進、交流促進

- 全国の自治体および文化団体・文化関係者に対してCCNJ加盟の呼びかけ、および、分科会・創造農村ワークショップ、創造都市政策セミナー等の告知を行った結果、5自治体2団体1個人が新たに加盟することとなった。

令和2年3月24日時点での加盟自治体・加盟団体は、以下の通り。

#### 新規加盟自治体 (5)

旭川市、金山町、水戸市、茅ヶ崎市、鎌倉市

#### 新規加盟団体 (2)

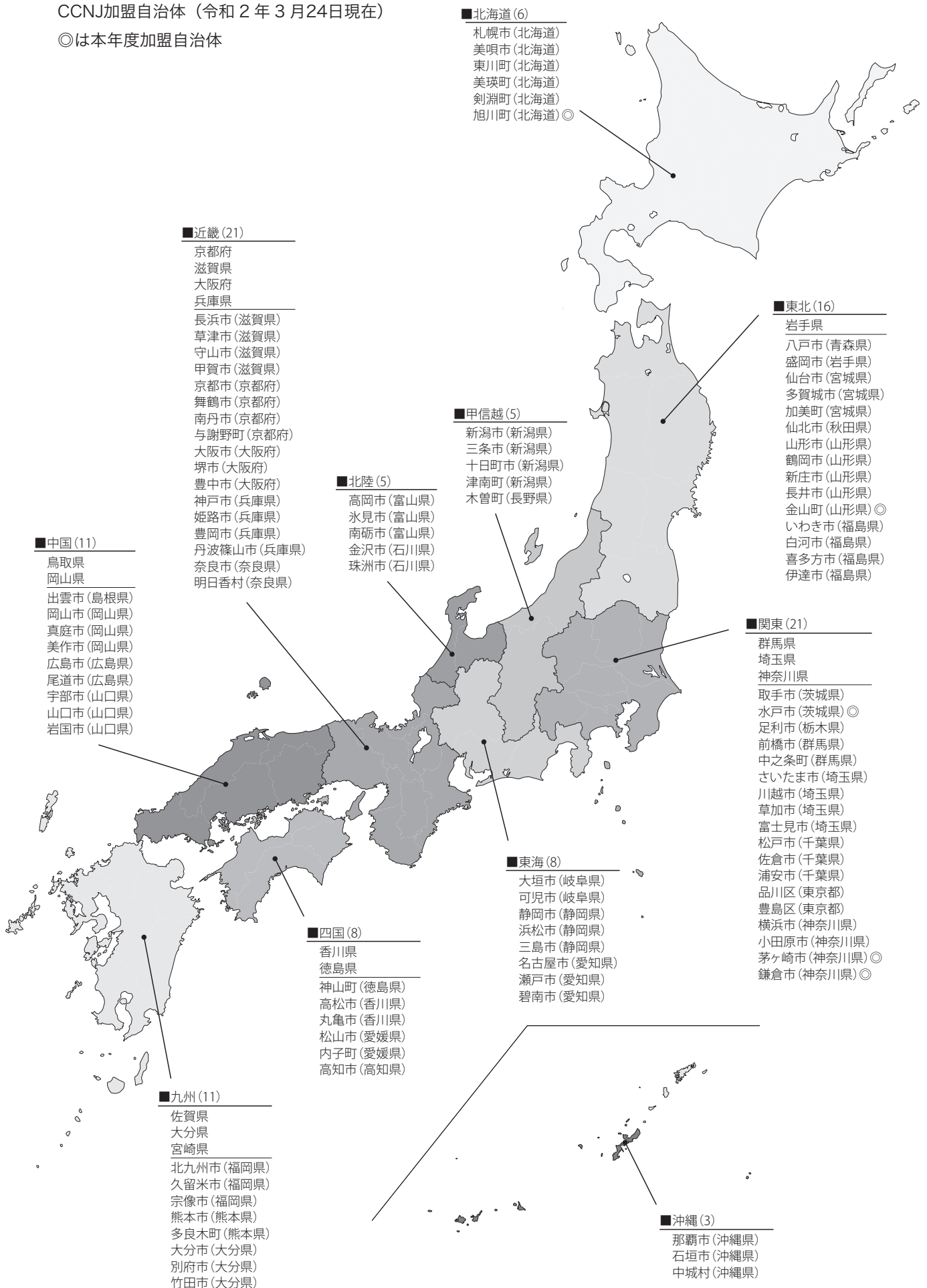
一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン、株式会社ダン計画研究所

#### 新規加盟個人会員 (1)

- 分科会、部会等の開催後には意見交換会を開催し、参加自治体・団体の交流の場を設けた。登壇者、参加者、関係者が出席し、意見・情報の交換が行われた。

CCNJ加盟自治体（令和2年3月24日現在）

◎は本年度加盟自治体





## (2) ウェブサイト情報発信力の充実

CCNJの情報発信力強化のため、ウェブサイト (<http://ccn-j.net/>) およびCCNJ公式Facebookページ (<https://www.facebook.com/CreativeCityNetworkofJapan/>) の運営を行った。

文化芸術創造都市推進事業として実施した、創造農村ワークショップ（9月・兵庫県豊岡市）、創造都市政策セミナー（10月・東京都豊島区）、現代芸術の国際展部会（10月・山口県宇部市）、令和元年度創造都市ネットワーク会議（令和2年2月・静岡県浜松市）およびCCNJ分科会（10月・山口県宇部市）について、公式ウェブサイトおよび公式Facebookページにて告知・広報を実施し、各セミナーへの集客へつなげた。

ウェブサイトには、昨年度に引き続きCCNJに加盟している自治体の一覧、加盟団体の概要や創造都市に関する取り組み内容を紹介できる団体プロフィールページ、各団体それぞれによる情報発信機能（ブログ機能）が設けられている。今年度新規に加盟した団体のプロフィールページを作成したほか、すでに掲載されている団体プロフィールページの情報を更新するために加盟団体へ自らのページ内容の再確認を求め、適宜最新の情報に修正、更新をおこなった。

### ■新規作成自治体（自治体名掲載団体も含む）5件

旭川市、金山町、水戸市、茅ヶ崎市、鎌倉市

### ■新規作成団体（団体名掲載団体も含む）2件

一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン、株式会社ダン計画研究所

### ■団体プロフィール 更新団体28件（令和2年3月24日現在）

松戸市、品川区、横浜市、小田原市、三条市、南砺市、大垣市、可児市、三島市、瀬戸市、舞鶴市、神戸市、丹波篠山市、奈良市、岡山市、広島市、宇部市、久留米市、那覇市  
埼玉県、滋賀県、京都府

公益社団法人岡山県文化連盟、公益財団法人京都市芸術文化協会、大道芸ワールドカップ実行委員会、公益社団法人日本オーケストラ連盟、公益財団法人兵庫県芸術文化協会、福岡県文化団体連合会

平成31年4月1日から令和2年3月24日までに、事務局からは10件、自治体等からの情報発信は13件の投稿があった。


(3) その他

創造農村ワークショップおよび総会の様子が地元紙、ニュース等で報道された。

**文化芸術生かし町の発展を 豊岡市でワークショップ/兵庫県**

9/6(金) 21:14配信

**サンテレビ**



「文化芸術創造都市」を目指す豊岡市で9月6日、地域振興や観光などについて考えるイベントが開かれました。

「創造農村ワークショップ」は文化芸術の創造性を地域振興や観光などに生かして課題解決に取り組むと、文化庁と自治体などが加盟する「創造都市ネットワーク日本」が合同で開催したもので、全国の自治体や芸術関係者などおよそ60人が参加しました。

豊岡市は「小さな世界都市—Local & Global City—」を基本構想に掲げ、城崎国際アートセンターの活動などで注目を集めていて、6日は中貝宗治市長が城崎温泉の現状やコウノトリの歴史など町の課題や取り組みを紹介。

その後、劇作家の平田オリザ氏が演劇を中心とした文化芸術の展開や人材育成のあり方などについて報告し、参加者は真剣な表情で聞き入っていました。

サンテレビ令和元年9月6日

時事通信社 UAMP  
IJAMP記事

**◎中貝市長、平田オリザ氏が講演＝「創造農村」テーマに—兵庫県豊岡市**

19/09/10 11:10 NG042



兵庫県豊岡市で6日、創造都市ネットワーク日本と文化庁主催の「創造農村」をテーマとした講演会が開かれた。中貝宗治市長と市文化政策担当の劇作家、平田オリザ氏が「深さを持った演劇のまち」といった市の目指す方向性について、自治体職員約80人を前に講演した。

創造農村は、コミュニティに根差した創造活動や経済システムで、ローカル・グローバルな課題の創造的解決を目指す地域を示す概念。

市には城崎温泉といった観光資源に加え、国内外のアーティストが滞在制作や発表を行う「城崎国際アートセンター」が立地する。2021年4月には観光と演劇を学ぶ「国際観光芸術専門学校」が開学し、平田氏が学長に就任予定。世界を見据えた文化・観光政策を進め、特色ある教育の展開や環境問題解決につなげている。

中貝市長は「地方で暮らす価値を創造するのが地方創生の意義」と強調した上で、「生半かな地方に暮らす価値は取れない。突き抜けた価値を豊岡で作り上げるといって非常に強い危機感と決意を持っている」と語った。伝統ある景観を維持するだけでなく時間をかけながら積極的に元に戻すといった施策や、コウノトリの野生復帰に取り組み中で進めた無農薬農業法に世界から注目が集まり、輸出が広がり始めていることなどを紹介した。

また平田氏は「人間の顔を失ったスマートシティ」との概念を紹介。6日から8日まで開催した演劇祭では、リストバンド型電子チケットの実証実験をした。将来的には地域経済の循環を目的に、市全体での電子地域通貨の導入も検討する。周囲に気付かれにくい形でひとり親世帯への給付といった行政施策にもつながると説明しながら、「地方は便利になって疲弊した。何のために便利にするのかという理念がなければスマートシティは実現しない」と訴えた。(了)

『IJAMP』令和元年9月10日

**「創造農村」で地域活性化を—兵庫県豊岡市**

中貝市長、平田オリザ氏ら講演

兵庫県豊岡市で6日、創造都市ネットワーク日本と文化庁主催の「創造農村」をテーマとした講演会が開かれた。中貝宗治市長と劇作家、平田オリザ氏が「深さを持った演劇のまち」といった市の目指す方向性について、自治体職員約80人を前に講演した。

創造農村は、コミュニティに根差した創造活動や経済システムで、ローカル・グローバルな課題の創造的解決を目指す地域を示す概念。

市には、志賀直成から文筆ゆかりの城崎温泉といった観光資源に加え、城崎国際アートセンターが立地する。2021年4月には観光と演劇を学ぶ「国際観光芸術専門学校」が開学し、平田氏が学長に就任予定。世界を見据えた文化・観光政策を進め、特色ある教育の展開や環境問題解決につなげている。

中貝市長は「地方で暮らす価値を創造するのが地方創生の意義」と強調した上で、「生半かな地方に暮らす価値は取れない。突き抜けた価値を豊岡で作り上げるといって非常に強い危機感と決意を持っている」と語った。伝統ある景観を維持するだけでなく時間をかけながら積極的に元に戻すといった施策や、コウノトリの野生復帰に取り組み中で進めた無農薬農業法に世界から注目が集まり、輸出が広がり始めていることなどを紹介した。

また平田氏は「人間の顔を失ったスマートシティ」との概念を紹介。6日から8日まで開催した演劇祭では、リストバンド型電子チケットの実証実験をした。将来的には地域経済の循環を目的に、市全体での電子地域通貨の導入も検討する。周囲に気付かれにくい形でひとり親世帯への給付といった行政施策にもつながると説明しながら、「地方は便利になって疲弊した。何のために便利にするのかという理念がなければスマートシティは実現しない」と訴えた。

『地方行政』第10921号 令和元年10月7日

**「創造都市」連携深める 浜松でネットワーク会議**

創造都市間の連携などを確認したネットワーク会議 = 5日午後、浜松市中区

全国14自治体や民間団体などをつくる創造都市ネットワーク日本(CCNJ)の2019年度ネットワーク会議(総会)が5日、浜松市中区で開かれた。20年度事業計画案を承認し、文化芸術を地域振興に生かす創造都市の間で連携や交流を深める方針を確認した。

創造都市の活動を支援する文化庁の中司次長は、東京五輪・パラリンピックを機に全国各地で日本文化発信する日本文化を発信する日本文化を「CCNJの加盟団体には全国各地で日本博の推進役を担ってほしい」と呼び掛けた。

今期の代表幹事を務める浜松市の鈴木康友市長は「地方創生で創造都市の取り組みは似ている。活動の輪を広げたい」と語った。

20年度事業計画として9月下旬ごろに横浜市で現代芸術の国際展覧会、11月ごろに北九州市で創造都市政策セミナーを開催することなどを承認した。

『静岡新聞』令和2年2月6日

添付資料

## 創造農村ワークショップ in 豊岡市 「地域の持つ“創造性”と“多様性”」

日時：令和元年9月6日（金）

会場：豊岡市役所大会議室

### ○主催者あいさつ 文化庁地域文化創生本部 上席調査役 石飛英人氏

皆様、こんにちは。

ただいまご紹介にあずかりました文化庁地域文化創生本部の石飛と申します。よろしくお願いたします。本日は事務局長の三木が出席の予定でしたが公務が重なりましたため、急遽私が出席させていただきます。本日の「創造農村ワークショップ in 豊岡市」ということで、主催者を代表しまして一言ご挨拶をさせていただきます。開催にあたりましては、CCNJ顧問であります佐々木雅幸先生、開催地であります豊岡市の中貝市長、そして市役所の皆様、そしてこの後基調講演をされる劇作家の平田オリザ先生、そしてシンポジウムでお世話になりますアーツカウンシル新潟の杉浦幹男さん、城崎国際アートセンターの田口幹也館長、富士屋の若女将の松本美子さん、大変お世話になります。また、今回の開催にあたりまして関係機関の皆様にご多大なご尽力をいただいております。改めて御礼を申し上げます。

文化庁は、28年3月に政府関係機関の移転募集に京都として手を挙げまして、京都への全面移転が決まりました。その先行移転組織として29年4月に地域文化創生本部が京都市内に設置されて現在43名が働いています。遅くとも2021年度中に現在の京都府警本部本館のところ全面的に移転してくるということで、現在の体制の7割が250名体制で移転してくることになります。また、それに伴いまして、文化庁の方の役割というものも、文化振興基本計画の成功、あるいは文科省の設置法の改正などによりまして、京都の移転に向けた取り組みが進んでいます。また、単に東京にあるものを京都に持ってくるということだけではなく、これまでの文化財に偏りがちだった文化行政というものを、もう少し新しい形で取り組んでいく、今までになかった機能を盛り込んでいく、ということで観光や産業、まちづくり、国際交流や教育福祉などの関係する分野と融合を図りながら新しい取り組みとして展開をしていく、そのための移転に向けての準備と事業に向けての着手について創生本部の方で取り組んでいるということでもあります。

また、先般のニュースにありましたように、国の概算要望の方が発表されまして、6年連続で100兆円を超えるというようなことがありました。文化庁といたしましても、昨年度比で約200億円増の1,275億円で概算要求しているところでございます。これにつきましても今後の予算編成の中でしっかりと取り組んで予算を確保してまいりたいなと思っております。また、皆様におかれましては常日頃から様々な事業の取り組み等に於きまして全国各地でお世話になっておりますので、また予算につきましてもしっ

かりとご説明できるようにしていきたいと思っております。

この後でございますけれども、今回のワークショップのテーマが「地域の持つ創造性と多様性」ということで、市長様の方から「豊岡の挑戦」ということでお話をいただきまして、そのあと、控室でお伺いしましたら、もう少しで豊岡市民になれるという平田オリザ先生の基調講演もでございます。そのあとに3名の方によるパネルディスカッションということになっておりますので、私も貴重な経験を持って帰りたいと思っております。多様性と創造性、こういったものをはぐくみながら、文化芸術の先進都市としてまたそういう創造都市としての取り組みを進めていってほしい自治体とか関係団体の皆様方がいろいろなことを考えるためのヒントになれば本日の開催の意義があるのかな、と思っております。ぜひとも皆さまにもいろんな意味で持ち帰って参考にさせていただければと思っております。

最後になりますが、本日の開催が次につながることを期待しますとともに、関係者の皆様のご多幸を祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いたします。ありがとうございます。

### ○「豊岡の挑戦」 豊岡市長 中貝宗治氏

**中貝市長** 皆さん、こんにちは。命の危険にかかわるような暑さの中、ご無事に豊岡へお越しくださいました。大歓迎申し上げます。今から、文化についてお話しするのですが、豊岡市が市政の中にそれをどう位置づけているかという視点を持ちながら、皆さんにお話をさせていただきたいと思っております。

この数字をご覧ください。東京都の合計特殊出生率の直近の数字が1.21です。豊岡のような小さなまちはちょっとしたことで変動しますので、ベイズ推定値という特殊な推定値を使います。今、公表されている最新のものは古いのですけれども、1.82人です。この差0.61。これはどういう数字かと。東京にいる若い女性100万人が、例えば10年かけてでもいいし、20年かけてでもいいのですけれども、日本中にある豊岡のようなまちに移り住むと、それだけで日本の子どもが61万人増えるという数字です。要するに、1.82のまちへ入ってくると、その人がよほど固い意志で、絶対子どもは産まないとならない限りは、その地に馴染んで、それなりに子どもを持つだろうと。逆に、豊岡のようなまちから100万人が10年かけてでもいいし、20年かけてでもいいのですけれども、東京へ移ると、それだけで、得べかりし子どもの数が61万人減るという話です。

さて、事態はどちらに向かっているのか。実は、2000年から東京で子どもの数が増えています。あの日本最低の出生率の東京で子どもの数が増えている。さらに、都道府県ごとの数字ですけれども、2005年から2015年で増えているのは東京だけです。最も出生率の高い沖縄県ですら子どもの数を減らしています。東京だけが増えています。なぜか。東京は一度、社会減の時期がありましたけれども、1996年を境に社会増になっています。しかも、女性の流入が多い。つまり、地方から圧倒的に人が東京に吸い取られ

ている。しかも女性が吸い取られていて、一組当たりが持つ子どもの数が日本の中でおそらく最低なのですけれども、そもそも絶対数が増えるので、東京だけが人口を増やしている。私たちは、この現状と地方創生という旗印のもとで戦っているわけです。これは生半可なことでは勝てません。

なぜこのようなことが起きるのか。つまり、地方で暮らす価値が選ばれていないから。あるいは地方で暮らすことの価値が否定されているから。それに対して、東京で暮らすことの価値が肯定されている。選ばれている。この厳しい現実があります。人口減少問題に関してだけの話だと思えますけれども、私たちは生半可な地方に暮らす価値では、この戦いは闘えないのです。ですので、豊岡が出した答えは、圧倒的に突き抜けた豊岡で暮らす価値を作ろうと。そうでなければ、これは闘えないということです。つまり、地方で暮らす価値を創造する。これが地方創生の意味なのだとは私は思っています。豊かな自然があって、人情豊かで、食べ物おいしいという価値では勝てていないわけです。圧倒的に負け続けている。ですので、突き抜けた価値を豊岡で作上げていこうという、非常に強い危機感と決意を持って、今からお話するようなことを進めています。

この豊岡で暮らす圧倒的な価値を作ることの旗印に掲げたのが、小さな世界都市です。人口規模は小さくても、世界の人々から尊敬され、尊重されるまちのことです。私たちは、この小さなをスモールではなく、ローカルと訳しています。豊岡という地域に深く根ざして世界に輝く。そのことを通じて、小さくてもいいのだという堂々とした態度のまちを作ろうといった考え方です。残念ながら、私たちの国において大東京や大都市は偉くて、人口規模の小さなまちは偉くない、大企業は偉くて、中小零細企業は偉くない。その価値の序列は非常に強いものとして私たちの心に浸み込んでいます。これは壊さなければいけないのですが、なかなか壊れない。東京を飛び越えて、いきなり世界で輝く。そのことを通じて、自分たちの誇りにつなげ、エネルギーにつなげていこうという考え方です。

グローバル化の進展によって、世界は急速に同じ顔になりつつあります。同じ商品、同じショップ、同じ景観が広がって、顔が同じになっている。ということは逆に、地域固有であること、ローカルであることが世界で輝くチャンスにつながります。グローバル化の進展で世界は急速に小さくなっています。しかも、ネットの発達を伴っていますので、豊岡のような小さなまちでも、大きなメディアの力を借りなくてもダイレクトに世界の人々と結びつくことが出来る。これはチャンスです。同時に、私たちは絶えず世界を意識して、世界に通用するローカルをPRすることを進めていくほかはないというのが、私たちの考え方です。そのための具体的な戦略を幾つか持っているのですけれども、今日は主な三つについてお話いたします。

一つは、受け継いできた大切なものを守り、育て、引き継ぐ。東京のような大都市は、少し古くなると壊して、新

しいものを作り、その収益で人々を呼び寄せることが出来ます。私たちは出来ません。別の道を考える必要がある。受け継いできたものを守り、自分たちの工夫を付け加えて、そして引き渡していく。具体例がいくつかあります。豊岡には出石という城下町があります。江戸時代のような顔をしておりまして、国の重要伝統的建造物群保存地区の指定も受けています。1万人ほどのまちにそば屋が37軒もありまして、そばだけで年間60万人、70万人の観光客を引きつけているまちです。しかし、このまちは古いものを守っているだけではありません。積極的に元に戻そうとしています。これはある陶磁器店ですけれども、実は明治に出来たころはこういった外観ではありませんでした。調査がなされて、昔の景観に戻りました。これは改修前、改修後ですけれども、10年間で約50軒、黙々と地道な努力を続けて、まさに出石が出石である所以。そういった趣をまちを挙げて取り戻してきています。

豊岡には城崎温泉もあります。まちのど真ん中です。1925年(大正14年)、豊岡は北但大震災に襲われます。城崎もペしゃんこになりました。火が出て、城崎は完全に灰になりました。ここから城崎の復興が始まります。川幅を広げ、道路幅を広げ、広い防火帯を作りました。鉄筋コンクリートの建物を配置し、将来、火が出て必ずここで食い止める、火伏(ひぶせ)壁の機能を持たせました。そのように、当時としては最先端の防災対策を施したうえで、復興のコンセプトは“元に戻す”。当時、兵庫県は城崎町に対し、洋風な建築物で復興することを提案しました。それを受け入れて、旧豊岡町が造ったのが、この隣の、私たちが稽古堂と呼んでいる建物です。しかし、城崎の人々は猛反対します。城崎に洋風はあわない、城崎は和風なのだと、兵庫県に撤回させて、木造三階建ての旅館街へ復活しました。木造三階建てで、浴衣を着て、下駄をならしてからんころんと歩くのが、いわば城崎のルールです。

3,500人ほどの地区なのですけれども、2017年の実績で63万人の宿泊客があります。この日本的情緒にひかれて、近年、インバウンドが急増しています。昨年1年間、4万4,000人、絶対数ははれていますけれども、6年間で40倍に増えています。ほとんど個人客、世界各国からまんべんなくお越しになっています。こういう光景が普通に見られるようになりました。この方々は何を求めて豊岡、城崎にお越しになるのか。アメリカを見たいわけではありません、ヨーロッパを見たいわけではありません、日本を見たい。日本の文化を楽しみたい。ですので、わざわざ時間とお金をかけて、豊岡、城崎までお越しになります。城崎を含む豊岡市全体のインバウンドも順調に伸びておりまして、昨年は5万4,000人、今年上半期で対前年19パーセント増ということで、着実に増えてきています。

二つ目の柱は環境問題です。地球規模の大問題です。この環境問題の取組みをないがしろにしているようなまちが世界で輝くはずがない。逆に、ここで突き抜けた貢献をすることによって、世界で輝こうという戦略です。豊岡のシンボルはコウノトリです。羽を広げると2メートルもある

白い大きな鳥で、完全肉食の大型の鳥です。環境破壊で絶滅しました。その絶滅と復活の物語を映像でご覧ください。

(映像視聴)

今、豊岡市内で飼育で92羽、野外で128羽います。日本全体では飼育で193羽。豊岡以外でも繁殖あるいは放鳥がなされて、178羽のコウノトリが再び自由に空を飛び回っています。コウノトリに最後のとどめをさしたのは農業でした。

そこで、農業に頼らない「コウノトリ育む農法」を豊岡で開発、確立し、増やしてきました。この「コウノトリ育む農法」という不思議な日本語です。助詞が入っていません。これは、コウノトリを育む農法であり、コウノトリが育む農法、二つの意味を込めています。「を」のほうですけども、コウノトリをシンボルとした生き物とし、コウノトリは生態系の頂点の鳥ですから、コウノトリがいるということは、その下に膨大な生き物がいるということになります。その生き物を増やすためのシンボルがコウノトリだと。もう一つは、そのことによって生まれた生き物が、お米を育ててくれる。こういったコンセプトであり、農法です。

実際、無農薬が通常より80パーセント減らしたものです。特に殺虫剤は一切使っていません。化学肥料は一切使っていません。生き物は増えたのか。農業を使う慣行農法と、80パーセント農業を減らした減農薬、無農薬で、10アール当たりのイトミミズの数を兵庫県が調査しました。慣行のほうは33万匹、減農薬では238万匹、無農薬では589万匹ということで、圧倒的な生物量の差です。これに代表されるように、増えた生き物がどのようにしてお米を育てるのか。カエルがカメムシなどの害虫を食べてくれています。この写真は、害虫を食べにツバメがやってくる写真です。あるいは、朝早く、育む農法の田んぼに行くとこういう光景を見ることが出来ます。田んぼ中がクモの巣だらけです。クモが害虫を食べてくれる。そういったことによって、殺虫剤がいらない。生き物の力を信頼する農法です。

しかし、最も農業の重要な役割は草を殺す除草剤です。これが大変なのです。農業を使わずに、冬の間水を張りますと、春のうちに大量にイトミミズが発生します。イトミミズは田んぼの中に頭を突っ込んで、有機物を食べながら、ずっとフンを出し続けます。このフンがトロトロ層という層を作ります。粒子が非常に細かい層で、水ようかんやプリンのような層だとお考えください。そこに草の種が入ってきます。その中で、一度、田んぼの土を掻きます。そうすると、トロトロ層が水の中に広がります。沈んでいくのですが、種のほうが重いので、種が先に沈んで、その上にトロトロ層が出来ます。草というのは実は、土の中で何センチか以上埋もれると発芽しない性格があります。つまりこれは、草の種はあるのだけれども、冬眠をさせてしまって、草が生えてこない。だから除草剤はいらないという論理です。もちろん、これが効く草もあれば、こ

れではだめな草もあるので、いろいろな技術を組み合わせているのですけれども、要するに、生き物を増やす、その生き物がお返しに除草剤や殺虫剤を使わなくても、お米をきちんと育ててくれる農法です。

私たちは安全安心なお米を作りたいわけではありません。もちろん、それもあるのですけれども、一番のねらいは、生き物がいっぱい田んぼを作る。その象徴として、コウノトリが飛んでいる。それを果たすような米づくりというのが豊岡のコウノトリ育む農法のコンセプトです。このコンセプトは世界中の人々に受け入れられていると確信しています。このように、作付面積が去年は428ヘクタールまでに増えて、国内では、沖縄で年間291トン食べていただき、アメリカ、香港、シンガポール、ドバイ、オーストラリアに輸出が始まっていて、輸出は昨年度トータルで17トンとわずかなのですけれども、急激に伸びていっています。これを買う人たちは、コウノトリ育む農法のコンセプト、あるいはコウノトリの絶滅と復活という物語に深い共感を持って売っていただき、買っていただいているということです。

コウノトリの野生復帰の取組みのおさらいです。1965年に人口飼育が始まってから2019年までにコウノトリはこんなに増えていきました。環境創造型農業が広がり、湿地再生が広がり、人材育成、環境経済、これは環境に貢献しながら儲けるという考え方ですけれども、それが広がり、その他諸々の運動も拡大。この時間と分野にまたがった、このまるごとがコウノトリの野生復帰です。コウノトリも住めるような豊かな環境を再び作り上げる。それが野生復帰の最大のねらいです。

小さな世界都市を実現するための三つ目の柱です。芸術・文化を創造し発信するということです。豊岡の出石に近畿に現存する最古の芝居小屋、永楽館があります。1901年に個人が造られた芝居小屋です。長らく閉館になっていましたけれども、豊岡市が譲り受けて、2008年に芝居小屋として復活しました。片岡愛之助さんを座頭として、今年で12回目になりますけれども、毎年、約1週間、歌舞伎をやっています。連日超満員で、最近はこちらは、海外からもお客様がお越しになるようになりました。客席数は約350。圧倒的な舞台と客席との距離の近さ、一体感が永楽館歌舞伎の大きな魅力になっています。

さらに、城崎の一番奥に県立大会議館という、当時、築30年の古いホールがありました。事情があって、これを豊岡市が引き受けることになりました。引き受けたものの、正直、使い道に考えあぐね、最後はやけのやんばち、劇団にただで貸そうと。劇団にただで貸すと、これは永遠に赤字です。しかし、城崎のまちのブランド価値が上がって、宿泊客が増えれば、まちとして黒字になる。ここでの赤字をまち全体の黒字がカバーすれば、それでいいのではないかとということで、滞在制作の場所にしました。このときに、平田オリザさんにアドバイザーになっていただいて、コンセプトをまとめたわけですけども、日本最大のパフォーマンス、演劇とダンスに特化したアーツ

ト・イン・レジデンス、滞在制作の拠点です。

2年目から、平田オリザさんに芸術監督になっていただきました。今、世界中から一流アーティストが続々と滞在制作にやってきました。これは、平田さんの作品制作のときの写真ですけれども、イレーヌ・ジャコブさんです。1991年にカンヌ国際映画祭女優賞という最高の賞をとったフランス人の俳優がひと月滞在しておりました。日本人では、森山未来さん。非常に優れたダンサーであり俳優ですけれども、滞在しておりました。村田沙耶香さん。「コンビニ人間」という小説で芥川賞をとった作家ですけれども、劇作家や俳優とともに滞在しておりました。今、進行中ですけれども、世界20か国68のカンパニーから応募があり、審査によって8か国20団体にお貸ししています。

この成功があったものですから、そこに、専門職大学という新しい制度が出来ました。豊岡の強みを生かした4年生の専門職大学を作って欲しいと県に訴えました。強みというのは何か。一つは観光です。城崎の成功があります。もう一つはパフォーミングアーツです。演劇とダンスと観光が出来る専門職大学を作って欲しいと県に提案したところ受け入れられました。これは完成予想図ですけれども、2021年4月の開学を目指して、文部科学省への認可申請の準備を県が行っています。(仮称)国際観光芸術専門職大学、2021年4月開学目標。アートと観光を学ぶと。入学定員1学年80人。無事に出来た暁には、平田オリザさんが学長に就任されることになっています。

さらに、この動きを受けて、平田オリザさんが豊岡へ移住することを表明されました。ちょうど今、平田さんの家が建っている最中でありまして、9月末には豊岡に家族とともに引っ越してこられます。ご自宅は江原地区区なのですけれども、その近くに古い商工会館の建物がありました。商工会の皆さんには豊岡の日高地域の市の建物の中へ移っていただき、空いた所を平田さんにお見せしたところ、ここに劇場を作りたいとおっしゃるものですから、建物は差し上げて、土地を利用して、平田さんの劇場が今年度出来ます。中小企業庁の補助が採択になりましたので、今年度出来て、さらに来年度から平田さんの劇団「青年団」が活動の本拠をここに移されることになります。この場所のすぐ裏が円山川です。とても素敵なおとこです。この辺はカヌーを漕いでいる人もいますので、例えば劇場での演劇と演劇の間に、ここをカヌーでうろうろしたら楽しいだろうと考えています。

ここまでプレーヤーが集まってきましたので、この際、一気に演劇のまちを作ってしまうと考えました。平田さんが演劇祭をやるぞとおっしゃるので、そういうことだったら、ついていきますということで、演劇祭をやることになりました。ただ、国際演劇祭ですので、相当、ねらいを定め、コンセプトを定め、準備しなければいけないと。平田さんは今年もしたいと去年おっしゃっていました。そこで、第0回ということととにかく小さくやってみて、いろいろな課題を洗い出して、その課題を踏まえながら、来年度から本格的にやろうと決めたところでした。

さらに、実は豊岡は、平田さんの力をお借りしているのですけれども、2017年度からローカル&グローバル・コミュニケーション教育を公立の学校で全面展開しています。地域のことをもっと知るといって、英語を幼稚園、保育園から身につけるといって、小学校6年生と中学校1年生全員が演劇のワークショップをやります。自分たちで演劇を作る、演じることを通じてコミュニケーション能力につなげる。そういったことを2017年からやっています。この子どもたちがやがて育ち、このまちを支えます。さらに、先ほどの演劇は小学校6年生、中学校1年生でコミュニケーション能力が目的なのですけれども、非認知能力を演劇のワークショップで高めていこうと考えました。

この9月から二つの小学校をモデル校としてやります。非認知ですので、IQであるとか学力のように数値では表すことが出来ない。しかし、大切な能力で、非認知スキルといわれています。例えばやり抜く力、自分の衝動を抑えて、自分をコントロールする力、生きる力です。これが例えば学力のベースになり、あるいは将来、さまざまな場面で働いたり、事業をやるときベースになるといわれています。この非認知能力は幼児期あるいは小学校低学年のうちに身につけることを始めないと、あとはなかなか伸びないといわれています。早く手をつけなければいけない。非認知能力をどう伸ばすかという、演劇やダンスのようにアウトプット型の活動をするのがいいといわれていますので、平田さんにプログラムを作っていただいて、この秋から2校で実験を始めます。

それで、本当かどうかを、青山学院大学の専門家にチェックをしていただいて、もし、そうだとことになれば、豊岡市内の小学校すべての低学年に非認知スキルを身につけるといって全面展開したいと考えています。さらに、今年4月に『スパーク協会とよおか』というものが出来ました。これは東京を本拠としている組織ですけれども、そのブランチです。ここは何をやっているかという、運動遊びによる発達障がい児の発達支援です。発達障がいという、脳に機能障がいを持った子どもたちでも、幼児期から思いっきり運動すると、脳が発達して、小学校に上がるくらいまでには、うまくするとほとんど変わらなくなるといわれています。ところが、発達障がいを持った子どもたちは、さあ、運動しましょうといっても動きません。そういうことが出来ない子どもたちなのです。演劇の要素、ダンスの素養を持った指導員が思いっきりおかしな格好で思いっきり面白そうに動き回ると、子どもたちはぼかんとして、やがて一緒に動き始めるのです。これも、取組みが始まったばかりで、これも演劇です。

つまり、私たちがやりたいのは深さを持った演劇のまちです。単に、アートセンターがあって、世界中からアーティストがやってきて、それを学ぶような大学があって、平田さんの劇団がきて、演劇祭があって、やってきた人たちが演劇をみて楽しいなど。演劇と演劇の間に、今の時期なら白イカを食べて、ワインを飲んで、おいしいなどだけではなくて、子どもたちのコミュニケーション能力や

非認知能力を向上させる。あるいは発達障がい児の機能訓練になる。まちのさまざまな場面に演劇が機能を果たしていく。そういうまちを作りたいと考えています。そのため大きなエンジンが、0回で始める演劇祭ということになります。

最後に、ローカル&グローバルのプロモーション映像をご覧ください。

(映像視聴)

豊岡で暮らす価値の創造について、私たちがどのような取り組みをしているか、お話しさせていただきました。ご静聴ありがとうございました。

**司会** 中貝市長、ありがとうございました。せっかくの機会ですので、ご質問等を受けさせていただきます。ご質問がある方は挙手をお願いいたします。市長に直接ご質問出来る機会もそうそうないと思いますので、この機会にお願いいたします。

**参加者** 貴重なお話をありがとうございます。お話を伺いまして、これに付随することで伺いたいのが、先日の朝のニュースで、小学校の子どもたちの吹奏楽が非常に優秀で、列車のお迎えなどをする光景を拝見いたしました。演劇はもちろんですが、音楽的なものまでも育みが行われているというのは、歴史的に見ても文化的な背景や土壌があったのでしょうか。

**中貝市長** そこまで見ていただいているようで、ありがとうございます。音楽というのは日本中で同様に、多分、演劇よりも早くから、演劇よりも深く浸透していて、それを応援しようという試みなどがあったのではないかと思います。あの小学校は実はかなりの大所帯で、楽器が足りなかったのです。そこで、豊岡市から、最近、羽振りがよさそうな会社の社長に、ちょっとお願い出来ませんかといっ募集して、それがあの子たちのやる気につながっていきました。もちろん、優れた指導者がいるし、音楽そのものは、豊岡はクラシックも含め市民の皆さん自身が身銭を切ってもやろうということやってきました。例えばこのようなことをやっています。

6回目か7回目になりますけれども、「おんぶの祭典」というものがあります。正式名は「子どもたちが豊岡で世界と出会う音楽祭」です。市民の皆さんと豊岡市が半分ずつお金を出して、年間600万円くらいの予算でしかないのでありますが、一流の音楽家を豊岡に招いて、約1週間、きちんとしたホールで有料のコンサートをやってもらいますけれども、各学校を回ってもらって、目の前で音楽を聴いてもらったり、街角コンサートをやります。この中心的な音楽家は、ウィーンフィルのコンサートマスターのオフアーを蹴って、もっと小さい楽団でやりたいといっているバイオリニストをはじめとする、世界的な音楽家から、

豊岡の子どもたちが音楽を通じて世界と出会うというコンセプトに共鳴していただいて、普通ならファーストクラスで来るような方ですけれども、エコノミークラスで足を折り曲げて来ていただきます。

この寄附をいただいたときに、それまでのコンサートというのは、聴きたい人たちが自分たちでお金を出していたのですが、今回は、それまで音楽には何の関心もなかったような方々でも、豊岡の子どもたちに世界と出わせたいというコンセプトに共感して、続々と寄附をいただいて、10年分は出来るだけのお金がすでに納められています。そういった志があったのです。しかしそれは豊岡に突出したものではないのだろうと思いますけれども、こういった動きや演劇のことであるとかダンスのことがあると、アート全般に対する需要度、あるいは評価する力が高まっていて、文字どおりアートのまちが出来るのではないかと期待しています。

**参加者** 素晴らしい施策だと思っているのですが、リーダーシップのある市長、もしくは幹部職員がいるちはよかったけれども、その人たちがなくなったときにフェードダウンや予算がないとかという話になってくることが多々あると思うのですが、今後、これを続けていくうえでの布石や考え方をどうされるかということを教えていただければと思います。

**中貝市長** 市長が代わった瞬間に、代わった市長が前の人を否定するということはよくありますので、実はいろいろな人に心配されますし、私もそう思わないわけではありません。こう考えています。私の任期中に圧倒的に成功例を作る。それが、非常にまちのためになっていて、まちの人々が圧倒的に支持しているという状況が出来上がってしまうと、次の市長がどのような思想を持っていようと、そのまま踏襲したら得なわけですから、そこまでいこうというのが一つです。

行政というのは、もちろん、市長が代わるたびに変わっていいのですが、しかし、変わってはいけないものもあると思います。だいたい、基本構想という10年くらいの構想を立てます。その中にまず埋め込んでいくことです。コウノトリの野生復帰のことでそうですし、アートのことにしてもそうですし、埋め込んでおくことによって、もちろんバリエーションがいっぱいあるのですが、ただ基本の考え方は変えられない。私の任期はあと1年半ですが、圧倒的な成功例がその間で出来るかどうか分かりませんが、ただ、この道がいいのではないかと、損得勘定だけで考えたと思われぬような方向性は作り上げたいと思っています。

演劇のまちに関しても、プレーヤーは豊岡市役所だけではありません。豊岡市役所はもちろん、市長も職員も頑張っていますけれども、平田オリザさんは市長がだれだろうと、自分の道を行けると思いますが、劇団「青年団」も必死になってやっていかれるだろうと思うし、専門職大学



も豊岡市役所とまったく関係なく動いていこうと思えます。この演劇祭ですが、今年度は実質、スポンサーが豊岡市だけみたいなものなのですけれども、あとは協賛金とチケット代なのですけれども、すでに第0回でも、JAL、KDDI、トヨタグループが最初から一緒にやりたいと。ただお金を出すだけではなくて一緒にやりたいといってくれています。KDDIなどは、来年からのコンセプト作りの委員会の中に、彼らにとって最も適任だと思う部長を委員として送り込んでおられます。この演劇祭も、はじめのうちは市の役割は大きいと思いますけれども、だんだん育っていくと、おそらく市は……。そうしなければいけないと思っています。そのようなことをやりながら、私が朽ち果てようとも、大事な方向は守っていければと思っています。

**司会** ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

**中貝市長** 演劇祭についての夢ですが、平田さんがアヴィニョン演劇祭を目指すとおっしゃるので、身銭を切ってこの7月に3週間行ってきました。9万人ほどのまちに10万人ほどの観客が来るといわれているのですけれども、驚きました。中世の城壁に囲まれた、直径1キロ、1.5キロの閉ざされた空間の中に、演劇だらけなのです。その辺の空き家も劇場になったりしていますし、来ている人たちは演劇と演劇の間にワインを飲んで、ビールを飲んで、料理を食べて、くだを巻いて、さっきの平田さんの演劇はどうだみたいなことを言いながら、楽しんでいます。

豊岡は700平方キロメートルあります。非常に広い。この移動はマイナスになります。アヴィニョンのように物理的に閉じられていると、この空間を演劇一色にするというのは時間がかかるかもしれないけれども、出来そうな気がします。しかし、700キロ平方キロメートルを演劇祭中にどうやって演劇一色にするのかと考えました。あの中世の城壁都市は非常に単調なのです。どこへ行っても同じ中世なのです。しかし豊岡は、例えば平田さんの劇場の裏側は素敵な円山川です。川を楽しむことが出来る。神鍋高原へ行くと、高原で野外劇を楽しむことが出来る。城崎へ行くと、温泉街で浴衣を着て演劇を楽しむことが出来る。出石へ行くと、城下町の中で演劇やダンスを楽しむことが出来る。さらに竹野まで行けば、海をバックに演劇やダンスを楽しむことが出来ます。この圧倒的な多様性は豊岡がアヴィニョンに圧倒的に勝っているところだと思います。

ただ、問題は移動なのです。移動が単なる無駄な時間になると負けてしまうというか、魅力が下がってしまうのです。そうであれば、逆に移動を楽しめるようにすればいいのではないかと。今、私が例えばとして言っているのは、専門職大学が豊岡に出来て、その劇場が会場になります。ここで昼間、演劇やダンスを見る。夜は出石で演劇がある場合、移動しなければなりません。このバスをあえて、途中に六方田んぼという大農村地帯がありますが、その農道を走らせてやる。季節によりますけれども、例えば9月

10日前後だったら、まだ田んぼにお米が残っています。つまり、黄金色の美田が風に吹かれている間をバスが走っていて、もしそのバスにきちんとした設備があれば、少し止まって、私の大好きな岩牡蠣と白イカを食べて、ワインを飲んで、稲穂が揺れる姿を見て、ふと見上げると、そこにコウノトリが飛んでいる。それを楽しんでから城下町へ入っていくとなると、これはけっこう魅力的なのではないかと。移動をいかに楽しみに変えるかということさえクリア出来れば、これは向かうところ敵なしになるのではないかと期待しています。幸いにして、地元の全但バスだけではなくて、トヨタグループからはトヨタ・モビリティ基金、まさにモビリティにかかわるところが、最初に一緒にやりたいといっておっしゃっていますので、これからその課題を解決しながら、演劇祭が出来ればと思っています。皆さんは皆さんでそれぞれの部署で頑張られる必要がありますので、豊岡へはぜひ演劇祭に来て楽しんでいただければと思っています。

○基調講演「この街で世界と出会う」 劇団青年団主宰 平田オリザ氏

**平田氏** 平田です。よろしくお願ひします。

地元の方には復習になりますけれども、但馬というところは兵庫県の4分の1の面積を持っています。人口は16万人、豊岡市で東京都23区くらいの大きさで、人口は8万人ということです。但馬は3市2町で構成されていて、このたび新設される大学自体は豊岡市だけではなく、但馬の3市2町のご協力で設置される大学となります。逆にいうと、兵庫県北部に4年制の大学が今まで一つもなかったわけですから、この大学は悲願だったのです。これがいよいよ出来るということです。

豊岡市自体も1市5町が合併して、大きな市になっています。城崎温泉が非常に有名なわけですが、この一番端っこに城崎大会議館があったわけですが、市長が劇団やダンスカンパニーに貸したらどうかと思いついたそうです。そのときに、私はたまたま、全然関係ない文化講演会で豊岡を訪れていたのですけれども、担当の方から、市長がこういうふうに言っているのだけれども、見てくださいといわれて案内をされた。城崎のまちには初めて来たのですが、本当に素晴らしくてびっくりしました。ただ、その建物は本当にダサイ建物でして、「これはよっぽど頑張ればちょっとはどうかになるかもしれないけれども、相当大変だと思いますよ」と言ったのですが、その担当者は当時、市役所の職員で、自分でも市民ミュージカルなどをやっていらっしゃるくらい演劇が大好きな方で、市長と中・高の同級生だったそうで、市長に、「平田先生が頑張れば大丈夫」と言っていました、と伝えたのです。言ったことは言ったので、再生委員会の座長をお引き受けして、リニューアルしたということです。

具体的には、演台を外して小劇場仕様にし、仮設の客席も持っています。スタジオが六つあります。レジデンス室は22人までのゲストが滞在出来ます。カフェダイニングや

キッチンで自炊して、アーティストは無料で泊まることが出来ます。開館前は20日間しか使われていなかった施設が、初年度から330日の稼働ということで、先ほどご案内があったように、世界中からアーティストがやってきます。レジデンス施設ですから、短期的な成果は問わない。なぜ、こういったことが出来たのか、多分、皆さんもご関心があると思うのですけれども、二つポイントがあると思っています。

一つは、これを作る過程で、再生委員会の座長だったので、城崎温泉の旦那衆、若旦那衆と意見交換をしました。城崎温泉というのは、桂小五郎をかくまった宿や、志賀直哉さんの「城崎にて」などが有名なのですが、それだけではなく、昔から、文人墨客を招いて、一、二か月逗留させて、最後、書を一幅書いたらただみたいなことを江戸時代からずっとやってきたのです。それは、アーティストレジデンスではないかと。もともとやっていたじゃないかという話があって、いまだき、各旅館がばらばらにアーティストを招くのも大変だし、変な人に来られて、大麻とか植えられても困ると。だったら、目利きのプロデューサーにきちんとしたアーティストを選んでもらって、もしかすると、その中から21世紀の「城崎にて」が生まれるかもしれない。城崎温泉というのは「城崎にて」で100年食べてきたまちなのです。「文学と温泉」と書いてありますけれども、志賀直哉は別に城崎の出身でも何でもなくて、ただ、けがをした作家が温泉に来て、蜂の死骸を見つけて、イモリを殺したとか、それで100年食べてきたのです。21世紀の「城崎にて」は、多分、小説ではなくて、コンテンポラリーダンスかもしれないし、ビデオ・アートかもしれない。そこに賭けてみようという気運が育ってきたと思います。

もちろん、行政のやることですから、当然、計画書には行政的な理由も書きます。一つは、2012年に劇場法というものが出て、劇場というのはただ単に上演をするだけではなく、ワークショップや創造機能も持つてはじめて総合的な公共ホールであるということが法律に定められたわけです。ところが、日本の劇場はほとんど、ヨーロッパの劇場が持っているようなレジデンス機能を持っていない。滞在型の劇場になっていないと。

例えば、東京、大阪、横浜等でヨーロッパからアーティストやダンスカンパニーを招いて1か月、2か月の滞在をさせるとすると、20人のカンパニーだったら、滞在だけで1日20万円かかりますよね。1か月で600万円、2か月で1,200万円です。ところが、パリから東京へ来るパリー羽田と、ここは鳥取空港が一番近いのですが、パリでチケットを買うと、パリー羽田ー鳥取と値段は同じなのです。ということは、600万円なり1,200万円のお金が浮くわけです。これは来るだろうという見立てでこの計画を立てました。実際に蓋を開けてみると、今、神奈川芸術劇場KAATや、あるいは上野の東京文化会館などで創造活動をしている作家の作品が実際には城崎国際アートセンターで創られている。創る場所としては、こちらのほうが機能として優れているので、多くのアーティストがここに滞在し

て、発表は東京や大阪や横浜でやる。これは、一応、予想はしていたのですけれども、それが的中し成功した。

一つだけ条件があって、滞在する人は、最後に教育普及活動、アウトリーチ、地域還元事業をしていただきます。多くのカンパニーは公開リハーサルやトークショーなどをやってくださるのですが、ワークショップや下さったり、学校で授業をやって下さったりするカンパニーもあります。城崎、豊岡市民、特に子どもたちは毎月のように世界最高峰のダンスや演劇を無料で楽しむことが出来る環境にあるということです。子どもたちがこのまちで世界と出会えるということになります。

これも市長が紹介したように、豊岡市ではコミュニケーション教育を市内38すべての小中学校で実施しています。面白いのは、これは地方創生の予算で半分くらいを賄っています。人口減少対策なのです。2020年の大学入試改革に向けての備えだということを公言しています。今、豊岡市では豊岡市主催で、東京や大阪で演劇のワークショップを行っています。どういふことかという、こういう話や、市長に来てもらうこともあるのですけれども、先ほどの市長の話などを二、三十分して、豊岡市で行われているコミュニケーション教育の事業を、実際に東京や大阪の子どもたちに受けてもらいます。それを保護者には見せてもらいます。その後、二、三十分をかけて、豊岡市ではこういったことが全部無償で行われるのです。観劇もできるし、授業にも組み込まれているということを紹介して、最後に、コウノトリ米500グラムをお土産に渡します。一番最後に、1ターンのパンフレットを配る。一番最後に移住という一番高いものを売りつける。これが人気があって、東京、大阪では、今、キャンセル待ちなのです。

行政の方はお分かりになると思うのですけれども、今どき、総務省主催で、幕張メッセなどでターンフェスタとかやっても、砂漠に水を撒くようなものでしょう。来る人もパンフレットばかり増えてしまっ、差別化が図れない。ところが、教育と文化に特化して宣伝すれば、広告費なんてほとんどなくて、向こうから来てくれる。この方たちがインフルエンサーとなり、口コミでどんどん広がっていく。これも、地方創生の戦略の一環として教育や文化を使っているということです。

こういった数字もあります。これは、先ほどの非認知スキルの問題なのですけれども、学力テストの上位25パーセントのA層と、下位25パーセントのD層、小学校6年生で比べているのですけれども、一番の違いは、家には本がたくさんあるか。これはA層とD層では25ポイントも違います。子どもが小さいころ絵本の読み聞かせをしたか、17.9ポイント。博物館や美術館に連れていくか、15.9ポイント。こういった公共文化施設に子どものうちから連れていっていると、小学校6年生の時点で16パーセントも成績が違います。面白い数字もあります。ほとんど毎日、子どもに勉強しなさいと言う。マイナス5.7パーセント。お子さんがいる方は気をつけてくださいね。要するに、このD層は、毎日、勉強しろと言っているけれども、自分の子どもを美

術館に連れて行ってない人です。要するに、芸術・文化活動というのは、ただ単に、今までの情操教育とかそういった話ではなくて、そういうものを身につけている子のほうが学ぶ力が高いから自分で学べる。

特に、豊岡では貧困と教育の負の連鎖を断ち切るための対策でもあります。自分で学ぶ力をつけられれば、塾に行かなくても、学力テストの点数は高いという統計が最近出てきています。文化政策と教育政策を連動させて、学力向上につなげていこうというのが、教育委員会と市が行っていることです。あるいは、先ほど言ったように、英語教育にも力を入れています。ただし、豊岡の英語教育は、文部科学省がやっているようなグローバル教育、世界で戦える人材を育成する教育ではないと公言しています。そんなつもりはさらさらないと。豊岡の英語教育は豊岡を国際化するための教育。世界から人々を迎え入れる人材を育成するための教育なのです。少し考えていただければ分かると思います。城崎温泉の子どもたちが、英語でディベートする能力は必要ない、それは邪魔でしょうと。海外から観光客が来て、英語でディベートされても困りますから。もてなす英語をきちんと学ばせるということです。

皆さん今日は、「なぜ？」といういろいろと思われたと思うのです。これは、市長のキャラクターでこうなっているのだろうと。それはそうなのですが、しかし、それだけではないのです。先ほど言ったように、城崎温泉の伝統がある。もう一つ、教育面でなぜこれだけ改革が進んだかというと、東井義雄さんという教育者がいます。この方は昭和30年代に「村を育てる学力」という概念を提唱されました。昭和30年代の高度経済成長の時代に、今のような学力の延長では、頭のいい子、成績のいい子が大阪、東京へ出ていってしまっ、村はどんどん廃れていってしまうと。そうではなくて、村を育て、村を守り、発展させることが出来る教育へと変えるべきではないかということを抑られた教育者がいたのです。この東井義雄先生というのは、初任地から最後、校長先生まですべてをこの但馬地域で過ごされました。ご出身の但東には東井義雄記念館があって、日本中から教育関係者が訪れます。但馬の誇り、豊岡の誇りなのです。実際、この話を豊岡で講演会ですると、終わった後に皆さんが来て、私は教え子だったのですとか、私の母親が同僚だったのですと。今、ちょうど教育長など教育委員会の中核にある方たちが教え子くらいなのです。今、文部科学省がやっているグローバル教育は、国を捨てる学力なのだと。そうではなくて、豊岡、但馬を豊かにする教育に変えていきたいと思います。教育改革と文化政策が連動したというのが豊岡の現状です。

文化政策についても少し細かくご紹介します。小学2年生は私の担当で、現代劇を観ます。6年生は永楽館で狂言を観ます。4年生を中心に生のクラシックを聴く。これはもちろん、学校行事でやりますので、全部無償です。そこで関心を持った子たちは、城崎国際アートセンターに来て、毎月のように無料で世界最先端のダンスや演劇を観る

ことが出来ます。さらに興味を持った子たちは、豊岡駅前にある市民プラザ、ここは交通の便がいいです。中学生くらいだと自分で来られます。地方の方はお分かりになると思うのですが、車社会で親が送り迎えしなければいけないのですが、市民プラザだと自分で来られる。そういったところで、東京、大阪のトップクラスの演出家と一緒に、1週間くらいかけてお芝居を作る体験が出来ます。文化政策というのはこういうふうに裾野を広げて、さらにやりたい子たちがステップアップしていけるピラミッドを作っていくことが大事だと思うのですが、それも豊岡ではだいたい出来てきたかなと思っています。

そのピラミッドの頂点として、今度、大学が出来るということです。これは駅前に出来ます。駅から600メートルという非常にいいところに出来ます。入学定員は80人という小さな大学ですが、今、豊岡市は1年間に生まれる子どもの数が、600人から700人です。600人のところに80人というのはけっこう多いと思われるのですが、そうではなく、豊岡の子どもたちは大学がないので、600人のうち、18歳の時点で7割が1回外に出るのです。残っているのは200人、150人です。19歳の人口というのは200くらいしかないので。そこに80人増える。ものすごいインパクトです。まちの風景が大きく変わると思います。売りは、日本で初めて公立の大学で演劇とダンスの実技を本格的に学べる。私は今、東京芸術大学の教員をしていますけれども、ご承知のように、東京芸大でさえ、美術学部と音楽学部はあるけれども演劇学部がない。こんな先進国はないわけです。やっとな実現します。これが、東京や大阪ではなく、但馬、豊岡で実現するというのは痛恨なことだと思っています。

今日は時間がないので端折りますが、なぜ観光と芸術なのかと。諸外国では、文化スポーツ観光省など一体型の政策で行われるわけですが、日本の観光庁は国土交通省、文化庁は文部科学省というふうになって、ばらばらになっているわけです。ここをつなぐような人材を育成したいということです。観光の授業もアートの授業も全員が1年生では必修になるので、観光政策に通じた舞台人、あるいはパフォーマンス、表現力に長けた観光業者といったものを育成するということです。カルチャー、ナイトアミューズメントがないと観光地というのはやっていけない。実はこれは、豊岡、但馬の観光の課題とも直結していて、つい最近もニュースになりましたが、城崎は海外からの超富裕層を誘致するという観光地に選定されました。この方たちは、家族で来て、一部屋20万円、30万円出して、1週間、2週間滞在してくださるのです。いくらでもお金をかけます。ただし条件として、昼のスポーツと夜のアートが必須条件になる。家族で楽しめるスポーツや家族で楽しめるアートがない限り、国際的なリゾートになれない。城崎を中心とした豊岡あるいは但馬は国際的な観光地域になるために、こういったことが当然必要になってくる。こういったことを企画したり、運営したり出来る学生たちを育てようというのが、新しい大学の構想です。

実際に観光の直接波及だけでも豊岡市全体の宿泊者数を0.5パーセントくらい押し上げるのではないかとわれています。演劇祭でも0.5パーセントくらい最終的に押し上げるので、1パーセントくらい押し上げるのではないかと。GDPでいうと3億円から5億円くらいの直接的な効果があるのではないかと考えられます。もちろん、大学は劇場やスタジオを持つことになります。完全クォーター制の新しい大学になります。1年次は全寮制になります。

もう一つだけご紹介しておきます。豊岡市の文化政策のもう一つの特徴は水平分業です。行政の皆さんの中で市町村合併した自治体は多いかと思うのですが、市町村合併をすると施設が余ってしまうわけです。これは多くの自治体が抱えている悩みです。豊岡にもさまざまな施設がありますから、これを劇場の機能を分化、特化していきましょう。城崎国際アートセンターは創造発信事業しかやらない。劇場ではないという位置づけです。このことによってコストがものすごく下がります。消防法とか保健所の検査がいらなくなりますので、全部をフルスペックでやらなくても済むわけです。それぞれがそれぞれに適したものに分業していくことで、税金の使い道を明確化しコストダウンしていきましょうというのが豊岡の文化政策の一つの大きな特徴です。城崎に城崎国際アートセンターがある、豊岡に市民プラザと市民会館があって、出石に永楽館があるわけですが、人口が2番目に多い日高地区に何もなかったの、これも市長からご紹介いただいたように、旧商工会館を建て替えて、そこを小劇場にして、私たちの劇団が入るということです。そして国際演劇祭も開催する。

先ほど市長からご紹介があったアヴィニオンですがプロヴァンス地方にあります。映画祭で有名なカンヌ、モナコ、近隣にはオリンピックが開かれたグルノーブル。アヴィニオン演劇祭の特徴は、期間中に正式招待演目は30から40くらいしかないのですが、1か月近い会期中で、世界中からアーティストが集まり1,500から2,000の演目が行われます。先ほど言ったように、朝の9時から夜の12時くらいまで、3時間交代くらいで行われます。そこに、観客が集まってきて、ブログを書き、さらにそこに評判がよいと、新聞記者が新聞記事にする。これは、私の作品「ソウル市民」が紹介されたときの写真ですけれども、私の作品の初日の翌日に、「ソウル市民」はル・モンドの文化面ではなく一面に載りました。その日はイスラエル軍のガザ地区侵攻のすぐ下に載りました。そのくらい社会的影響力があるのです。世界中からプロデューサーが集まってきているので、その人たちに気に入られると、翌日にはカフェで商談が始まって、世界中に数百あるといわれているフェスティバルに買い取られていきます。

こういった見本市的な機能を持ったフリンジ型のフェスティバルというのは、日本どころかアジアでも成功したものがないので、これを目指そうと思います。成功の要因は三つあると考えています。一つは、招待演目が出るような劇場がたくさんあること。これは先ほど言ったように、市町村合併したおかげで余っています。もう一つは、宿泊

施設があるということです。私は来週、利賀村に行くのですが、利賀村は素晴らしい演劇祭があって、素晴らしい施設があります。ただし、宿泊施設がないのです。人口500人の村で、民宿もどんどん廃業しています。豊岡は人口が8万人しかないのですが、神鍋高原というのがスポーツ合宿のメッカで、若い劇団員が雑魚寝出来るような民宿や体育館があるような民宿がたくさんあります。城崎にはVIPが泊まれる超高級旅館があります。ビジネスホテルもあります。人口8万人のまちなのですけれども、あらゆる階層に応えられる宿泊施設がそろっています。非常に希有です。これも地元の方はほとんど気がついていなかったのですが、全部そろっています。最後はネットワークです。これは城崎国際アートセンターで培ってきたネットワークと私の個人的なネットワークもあって、海外からいくらでもカンパニーが来てくれる。成功の要件はそろっていると考えています。

もう一つがKDDIとの連携です。今回から使いますが、KDDIがノウハウを持っているので、リストバンドで入退場を管理出来ます。来年からは、地域通貨も入れます。9月の演劇祭が大学の実習期間になるので、学生はインターンで入って単位がもらえます。もちろん今どきですからやりがい搾取は出来ないで、当然、有償ボランティアです。この有償ボランティアも全部リストバンドで、加盟している食堂などはこれでキャッシュレスで食べられます。そうすると行政もお金を出しやすいわけです。地域通貨だと、全部地元にしがお金が落ちないですから。そういったシステムを作ります。これもKDDIと開発していきます。最終的には豊岡市が数年で地域通貨で使うようにしたいと。そうすると、行政としても、政策と結びつけやすいわけです。例えば一人親世帯には低価格、無償で来られるようにする。商品券を配るよりも効率がいいし、隠せますから。貧困層にしか商品券を配らないとなると、商品券を使うことは貧困層だと分かってしまうわけです。リストバンドだったらそういう誘導がしやすいということです。

このことによって、観客の動線と消費の動向がすべて集められます。私はコンパクトなビッグデータと呼んでいますけれども、そのデータをトヨタ・モビリティ基金に使っていただいて、最終的には自動運転ということになるのですけれども、車の配置、運行等をAIに予測させて、最適なモビリティを開発してもらうということです。自動運転というのは、どこに配車しておくかが問題です。このことによって待機時間と移動のコストを削減し環境にも優しいものが出来るということです。今回からすでに一人乗りの電気自動車を15台、トヨタが提供してくださっています。なぜ、こういったことになったかということ、行政の方はお分かりになると思いますが、こんなことをいきなり地方自治体がやろうとしたら、リスクもコストもものすごくかかります。しかし、2週間、3週間の演劇祭で個人情報も限定しやすければ、非常に有益なビッグデータが得られて、それでいろいろな実験が出来るということで、第0回から興味を持って参加して下さって、来年には本格稼働します。

目指しているのは「人間の顔をしたスマートシティ」です。先月、経団連の関連団体主催のスマートシティのシンポジウムに呼ばれたのですけれども、各企業がきれいなパワポを使って素晴らしいプレゼンをするのです。私の番が最後だったので、「本当に水を掛けるようで申し訳ないけれども、今までのプレゼンは全部、地方都市は受け入れないと思います」と言いました。なぜなら、地方は便利になって疲弊してしまったから。規制緩和などで疲弊してしまったと。便利になったから幸せになるわけではないのです。幸せになるために便利になるのです。東京の企業は、そこをはき違えてしまっているのだと思うのです。何のために便利にするかという理念がなければ、多分、スマートシティは実現しないと思う。なぜ、第0回からこんな超一流企業が参加して下さるかということ、その理念に共鳴して参加して下さっているということなのです。アートのために便利にする。演劇を少しでもたくさん観られるように便利にする。そこがはっきりしているから、多くの企業から協賛していただいているのではないかとことです。

空き店舗の活用の中にもあります。来年度に向けて、市内のどういふところが劇場空間として利用出来るかを、地域おこし協力隊の方をお願いして、全戸調査をかけています。私がこのたび引っ越してくるにあたって、空き家もいろいろご紹介いただいたのですけれども、貸してもいいけれども、仏壇だけ残しておいてとか、そういう方が多くて、リフォームが出来なかったり、みんな保守的なわけです。ところが、調査をしていくと、演劇祭の二、三か月くらいだったら貸してもいいという方がたくさんいらっしゃるということも分かってきました。まず、そこで使わせてもらって、やはり使ったほうが楽しいでしょうか、やはり若い人が来たほうが活気が出るよねということで、マインドを変えていこうと。5年、10年かけて、空き家、空き店舗を開いていってもらおうと。これも演劇祭をテコにしてまちの空気を変えていこうという戦略です。

5年でアジア最大、10年で世界有数の国際演劇祭を目指します。こちらはプロバンスです。右側が但馬地方です。先ほど話があった、竹野から浜坂までの海岸線が日本のコート・ダジュールになります。城崎が日本のカンヌになります。私が住む江原が日本のアヴィニョンになって、神鍋が日本のアルプスになります。早めに土地を買うことをお勧めします。ちなみに、城崎は昨年からの路線価が上昇に転じています。兵庫県北で唯一です。出店ラッシュで土地がない。私たちのおかげではないのですけれども、たまたま、まちの発展のシンボルとして国際アートセンターが位置づけられて、大好評をいただいているということです。決して、夢物語を言っているわけではないのです。アヴィニョンが9万人、映画祭で有名なカンヌは7万人です。豊岡は8万人ですから、決して夢物語ではないということです。

大学が出来て、リサーチセンターを作って、今まで豊岡やほかの市がシンクタンクやコンサルとか広告代理店にいろいろなことを発注してこなければいけなかったわけです

けれども、これを請け負う、新しい市民会館の運営などにも積極的に入っていて、指定管理者も大学でとってほしいと考えています。私たちは、地域の観光政策、文化政策、教育政策にかかわる大学ではなく、地域の観光政策、文化政策、教育政策に責任を持つ大学を作りたいと考えています。皆さんはこれを不思議に思われるかもしれませんが、医療について考えてみてください。大きな医学部の大学は、地域の医療政策に責任を持たなくてはなりません。パンデミックなどが行ったら、それを止める拠点となるのが大学病院の役割です。これからの大学は、地域の運営にも責任を持つべきだと考えています。そういう大学を作りたいと。

コウノトリで有名なまちですけれども、私が移り住む江原、旧日高町は植村直己さんの出身地でもあります。ご存じの方も多いかと思いますが、私は劇作家をやる前は冒険家をちょっとやっていたので、私にとって、植村直己さんというのは最も尊敬する日本人なのです。私は、人生の後半を植村さんの出身地で過ごせることを何よりも光栄に思っています。今日は豊岡の方も多いかと思いますが。あと3週間ほどで引っ越してまいります。よろしく願いいたします。

○総括 創造都市ネットワーク日本顧問、文化庁地域創生本部主任研究官、同志社大学特別客員教授 佐々木雅幸氏

中貝市長と初めてお会いした時に、「小さな世界都市」という言葉を使われました。グローバル化が進んでいく最初の段階で、グローバル・シティという言葉が登場します。ニューヨークやロンドン、東京、パリがそれにあたります。一国を超える、非常に大きな経済力と金融の力、国際金融市場です。このシステムを動かしているのは世界都市のネットワークと言ってもいいです。そのような巨大な世界都市はいずれ破綻すると私は考えています。例えば2008年のリーマン・ショックで流れが変わり、世の中に大きな変化が訪れました。ニューヨーク、ロンドン、東京のファイナンスの世界で生きていた人たちの生き方の選択がかわってきました。

2年前に神山町で創造農村ワークショップを開催しました。神山町は20年前からアーティスト・イン・レジデンスを実施していました。その流れの中で、リーマン・ショックを境にして、急に神山町が世界のアーティストやICTワーカーなどに注目されることになりました。それは、巨大都市で働いていても、創造性が枯渇してしまう。むしろ、自然が豊かな神山町のサテライトオフィスの方がクリエイティブな仕事ができる。ネットワークにさえ繋がってれば、様々な仕事ができるということでした。

オリザさんの転身もそのように考えると、巨大な世界都市のネットワークが崩れていったときに、各地域にある小さな世界都市が光を持ち始めていると考えられます。

その小さな世界都市に共通していることは、自然の豊かさとアートです。神山町は大自然の中にあります。豊岡市はコウノトリがいるという自然生態系を大切にしている。

コウノトリが住める街というのは、生物多様性に富んでいるということです。アーティストが住める街は文化多様性に富んでいます。「生物文化多様性に富んだ小さな地域」という言葉を私は使っており、それがまさに豊岡市の「小さな世界都市」ということで、おそらくそれが「創造農村」です。

豊岡市や神山町が「創造農村」の期待の星です。こういったことが広がっていく、このスピードが速くなければ、東京再集中の波に飲み込まれ、日本社会の創造性を失い、他の国に飲み込まれてしまいます。逆に、東京集中に飲み込まれずに各地域が個性を発揮して、生物文化多様性に富んだ地域を作っていくスピードが上回れば、日本は再生する可能性があると考えています。

## 創造都市政策セミナー in 豊島区

日時：令和元年10月15日（火）

会場：豊島区役所1階

### ○開会あいさつ

**森審議官** 文化庁審議官の森と申します。開会にあたりまして、主催者を代表いたしましてあいさつを申し上げます。

まず、このたびの台風19号によりまして被災されました地域の皆様方に対しましてお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

今日は、創造都市政策セミナーということで開催させていただきましたところ、大変お忙しい中、全国各地から多くの皆様にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

また、本セミナーの開催にあたりまして、多大なるご尽力を賜りました、このセミナーの開催地でございます高野之夫豊島区長様をはじめ、豊島区の皆様方、そして本日参加くださる皆様方、そして創造都市ネットワーク日本の顧問でございます佐々木雅幸先生、そして関係する多くの皆様方に感謝申し上げたいと思っています。

今回の政策セミナーのテーマは「民間の力を活用した文化によるまちづくり」でございます。政府におきましては、文化芸術基本法、そして文化芸術推進基本計画に基づきまして、団体や企業など民間の方々と協働しながら観光、まちづくり、国際交流など、関連分野における施策を展開しながら、文化芸術によって生み出されるいろいろな価値を文化芸術の継承の発展、創造へと進めながら施策を実施しているところでございます。

本日のセミナーも、文化庁の文化芸術創造都市推進事業の一環として開催をさせていただくものでございますけれども、本日、セミナーを通じて、文化芸術創造都市に取り組まれる各地域の皆様方が、それぞれの地域の成功事例や課題を共有し、地域間の人的資本を形成していただくことによって創造都市相互に寄与するというのを大いに期待しています。

また、文化庁では、東京オリンピック・パラリンピック競技大会がいよいよ来年に開催されることを契機として、日本文化の魅力を世界に発信するために、国を挙げた一大プロジェクトとして日本博を全国各地で開催しているところです。この日本博は地域固有の文化資源を最大限に活用し、観光、まちづくりといった分野と連携をしながら地域の活性化にもつなげるための絶好の機会であろうかと思っています。文化庁におきましても、2020年以降も見据えながら、日本博をはじめとするさまざまな施策を通じ、文化の一層の推進を図りたいと思います。

ご出席の皆様方におかれましても、我が国の豊かな文化芸術の創造、そして発展のために引き続きご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、本日のセミナーが皆様方にとりまし

て、実りの多いものとなり、それぞれの文化芸術都市、文化創造都市の取組みが一層充実するものとなることを祈念いたしまして、開会のごあいさつとさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

### ○基調講演「財政再建から文化政策への軌跡」 豊島区長 高野之夫氏

**高野区長** 皆様こんにちは。ご紹介賜りました豊島区長の高野之夫でございます。今日は30自治体80名を超える方々よりご参加を賜ったということで、残念ながら今回災害にあわれた都市の方が出席できなかったことについて、心からお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興を願っております。私たちが友好都市がたくさんございますので、逐次情報をいただきながら我々にできることは最大限したいと思っております。

私は、区長になってなんと6期目でございます。23区の中では一番期数が古いのです。そして年齢もナンバー2であります。けれども長く区長をやらせていただいているお陰で、財政が厳しい中、文化を中心とした、まさに文化というのはまちを元気にして、そして人の心を豊かにし、未来に向けて取り組むことではないかということを終始一貫21年間歩んできました。この足跡を皆様にお話しして、少しでもお役に立てばと、そんな思いであります。

早速、「民間の力を活用した文化によるまちづくり」ということで、財政再建から文化政策への歩み、軌跡ということに関してお話をさせていただきます。本日ご出席の皆様は文化芸術で地域を盛り上げたいという第一線でご活躍の方々を中心とお聞きしております。今日のテーマは、文化振興には行政と企業、団体、地域の住民など民間との連携が不可欠なのだということです。公共サービス、連携においても地方自治体を担うべき役割を改めて考えることが求められているのではないかと考えております。今日も後ほどパネルディスカッションがございます。豊島区の民間の方々のご登壇もありまして、いかにこの豊島区が民間の方々との行政と連携を取りながらまちづくりを進めているのかご紹介いたします。またファシリテーターとしては東アジア文化都市中心に取り組んでおります中で、全体アドバイザーの綿江さんに今日はお願いをしております。現在、東アジア文化都市が開催中であります。来月いよいよクロージングということで、豊島区のたった29万都市が日本を代表して中国、韓国のそれぞれの大都市と文化交流を取り入れることについて、最後に担当の部長からご説明をさせていただきたいと思っております。

早速、本題に入らせていただきたいと思います。豊島区は今、お話ししたように山もない川もない、人口密度日本一のところです。この豊島区は中心は池袋になりまして、乗降客数はまさに267万人で、新宿に次いで大ターミナルでございます。

まず、財政再建をどのように乗り越えて文化都市を作ってきたかということについてお話しいたします。私が21年前に区長になったときは借金が872億円、貯金がたったの

36億円という最悪の状況でした。この12年、財政再建ということでハコモノなんて一つもできませんでした。これは平成12年度と平成29年度の比較ですが、約3,000人いる職員も現在は1,970人と、約1,000人の削減。これはまさに人件費の削減でもって一般会計費の割合で当時は32.6パーセント。現在は19.0パーセントまで抑えることができました。けれども、人口は24万8,000人が今は29万人ということでありまして、当時、一人当たりの借金がやっと33万6,000円、現在は貯金が5万7,000円になりました。皆様も自治体経営をなさっている中でお分かりと思いますけれども、経常収支比率はなんと99.5パーセント、ほぼ100パーセントが経常収支でございます。何もできないわけでありまして、国と都の与えられた仕事をやるだけと、こういってまさに破綻寸前の状況でございました。それが今は経常収支比率も70パーセント台で大変財政が健全の証拠であります。79.8パーセント。公債費比率、借金は下がって14パーセントから現在は3.6パーセントとまで下げることができました。

このように、豊島区が民間の力を借りながら資産活用をどうしていくか。初めてこの庁舎にお越しになった方もいらっしゃると思います。もしお時間があればぜひ見てみてください。建物の1階、2階は区のものではありません。3階から9階までが庁舎部分で、10階には『豊島の森』という屋上庭園があります。11階から49階が分譲マンションになって、このマンションを売却することによって一緒に組合を作り、市街地再開発事業を進めたのであります。お陰様でマンションの権利者の方々には倍以上の資産価値が生まれたので、115名全員が判子を押してくれました。東京都では、このような市街地再開発事業で100パーセントの資産設定をするのはかつてないことです。旧小学校、児童館の中で、民間の方と一緒に権利変換をして、うちは約1万平米もらったけれども、庁舎つくるには約2万5,000平米必要だということで、今まで使っていた本庁舎、公会堂などを合わせて定期借地権を設定・地代をいただくという形で再開発をします。これにはさまざまな条件を付けました。文化によるまちづくりをしていくには文化に関する拠点をつくる、ということで、三つの建物の中で、八つの劇場をつくる。この中には再開発で飲食店等はつくりません。すべてが人を呼び込むような建物です。もちろんこの中にも自然光が広場に入ります。このうち庁舎をつくるには136億円必要でこの定期借地権を191億円でお貸ししました。もちろん区民の財産を活用しておりますけれども、決して借金をしてつくった庁舎ではありません。借金ゼロ、逆に諸々を含めると55億円を貯金することができたということで、まさに資産活用によって税金を使わずに建てた日本初の事例だということがお分かりいただけると思います。

2014年、日本創生会議の「消滅可能性都市—日本全体の地方都市のうち半分がなくなる—」という発表の中に、23区では豊島区だけがいったわけでありまして。豊島区の人口は自然減ですけれども、流入人口によって人口を増やして

いるので、地方が疲弊すれば当然のことながら豊島区に入ってくる方が少なくなる。特に若い女性の方が少なくなるというデータによる発表がありました。大変なショックですけれども、逆にピンチをチャンスに変えていくときだと思ひまして、早速対策を作りました。女性にやさしいまちづくり、高齢化への対応、地方との共生、そして一番は日本の推進力。どういう都市を目指していくか。都市の将来像を持たなければこれからの競争に勝っていけない。そういう中で、地の利などすべての条件の中で、私はこの魅力を中心とした豊島区で世界を視野に置いたまちづくりを展開し、それを「国際アート・カルチャー都市としま」と名付けました。大変厳しい財政の中、あらゆる行財政改革を断行し、ただただ予算を切っていけば区民も元気がなくなるし職員はやる気がなくなるわけでありましたので、私は文化によって新しいまちづくりを進めていこうと思ひました。当初は文化でパンが食べられるかというような厳しいご指摘もございましたけれども、この20年間ぶれることなく文化都市を目指して進めてきているわけでありまして。国際アート・カルチャー都市、文化を基調にしたまちづくりとは、国内外から人が集まり交流する文化都市であり、豊島区が明確に打ち出したのが「まち全体が舞台の誰もが主役になれる劇場都市」というスローガンです。文化戦略、空間戦略、国際戦略、三つの実現戦略を3本の柱で進めてまいりました。アート・カルチャー都市プロデューサーには、各界で大活躍をして最前線で活躍する11名をお迎えして、行政にはない豊かな発想やアドバイスをもらっています。さらには元文化庁長官の近藤誠一先生にご指導を賜り、アート・カルチャー都市懇話会として文化芸術トップリーダーをはじめとする、委員にもご提言をいただいています。また、都市構想に賛同し国際アート・カルチャー都市構想の裾野を広げる担い手である特命大使制度を創設いたしました。今では総勢で1,478人となり、毎年のように増えています。ただし、この特命大使にはご意見を聞くだけではなくて、会費を年間5,000円頂戴いたしております。この会費納入なくしては特命大使の肩書きがなくなるわけございまして、毎年厳しく、そのかわり名刺も作らせていただいて、その方々にご活躍をお願いしているわけでありまして。このように様々な立場の方が集まり「オールとしま」を創り上げています。

「国際アート・カルチャー都市としま」について、お話をいたします。国際アート・カルチャー都市のメインステージは池袋になります。池袋駅を中心に、本庁舎、駅からグリーン大通り。サンシャインは開館してから40年経過していますが、今でも年間3,000万人を超える来館者を集めております。旧庁舎は先ほどお話した東池袋で、この辺はもうできあがりました。また、南池袋公園は大変評判がよくて、地方の自治体の方は庁舎見学のととは必ずこの南池袋公園を見学にいらっしやいます。そして今、工事をしているサンシャインの裏の防災公園が、豊島区では一番大きな公園になります。さらに中池袋公園というのはHareza池袋（ハレザ）にある八つの劇場の前の公園です。



そして池袋駅西口には、東京芸術劇場がございまして、その隣の池袋西口公園には野外劇場が来月には完成いたします。ここには音響も照明も含めて野外ではとても考えられないような、フルオーケストラが野外で演奏できるような舞台をつくりつつあります。このように四つの公園を中心にしながらまちづくりをしているわけなのですが、この四つの公園を回る真っ赤な電気バスを10台つくる予定で進めています。

今お話ししたように、国際アート・カルチャー都市を目指して23のビッグプロジェクトが進んでいます。2020年オリンピック・パラリンピックの開催までに、この事業をすべて完成したいと思っています。このプロジェクトは、なんと454億円という、豊島区ではかつてない予算を組ませていただきました。いわば都市復旧の工事といってもおかしくないくらいのスケールです。23のビッグプロジェクトがようやく3つできあがりしましたが、残りあと20のプロジェクトが今年と来年、すべて完成します。オリンピック以降はほとんど計画を立てておりませんが、豊島区全体の大改造を進めているところであります。

私は池袋のまちづくりに思い切ってお金を投資いたしました。再開発でつくったものを豊島区が買い取りました。市民ホールは1,300席のキャパシティを持ち、興行が成り立つホールです。こけら落としは宝塚の定期公演20公演、他にも歌舞伎やミュージカルと、名だたるプロダクションがぜひ使いたいということで、3年先まで予約が埋まっています。

区民センターは、区民が利用するには一番手頃な500席のホールと160席のホールと、さらには会議室が15室、1階は外国対応ができるようなインフォメーションセンターです。2階、3階は思い切って35基の女子トイレを作りました。公衆トイレでこのように多くのトイレをつくったのは初めてでしょうし、大変注目されておりまして、花王さんと連携してパウダールーム、フィッティングルーム等を完備しておりまして、さらには『パパママ☆すぽっと』という、お子さんが遊べるお部屋もつくっています。これはまさに区民のためのトイレです。

今お話ししたように、公園がまちを変えていく。すべての中心に文化を据えて街づくりをしており、池袋を憩えるまちにしていきたいと思っています。

南池袋公園は、駅から近い繁華街のど真ん中にあり、暗く、ジメジメした公園だったのですが、これを思い切って芝生を中心にリニューアルしました。今日私も午前中、取材に行きまわりましたが、大変な方々で賑わってありました。ここにも女子トイレを10基つくっていかうと思っております。

東京芸術劇場の隣の西口公園にはステージをつくります。3メートル、11メートルの大きなメインビジョンがあり、オリンピック・パラリンピックのときのライブサイトにもなります。そしてカフェレストランもあり、夜が楽しいまちづくりを進めております。

防災公園は南池袋公園をはるかに超える、一番大きな公

園でございます。170メートルのいちよう並木があり、芝生で憩えるような公園を整備中であります。その隣にはキッズパークという公園を作っています。豊島区は今、保育園をどんどんつくっていて、待機児童ゼロを3年続けておりますけれども、その8割が園庭のない園です。近所の小さな公園でお遊び、お散歩という形ではあまりにも夢がないということで、保育園の園児のための公園を作っています。ここにはミニトレインも造ります。また、これについては先ほどのIKEBUS（イケバス）が園児たちを送り迎えるという計画を進めております。

電気バスのIKEBUSは後ほど担当の部長からも説明があらうと思います。大変な大人気でありまして、これがまちを走っておりますと、皆さんが全員注目して、いろんな人が携帯で写真を撮っておられます。デザインは九州の「ななつ星」に携った工業デザイナーの水戸岡鋭治先生にお願いしました。池袋レッドと言いますか、赤一色のバスです。ただ、時速19キロでしか走りません。また、座席も14席で小さいのですけれども、立ちも入れますと21人でございますが、このバスがいよいよ来月から走り始めます。

また、東西を結ぶウイロード、唯一の乳母車・自転車が通れる77メートルの歩行者用トンネルには、美術作家の植田志保先生が約1年かけて絵を描いておりまして、現在、完成しつつあります。完成したらまさに天井から壁までの雰囲気が一変します。私はこれこそ池袋の豊島区のアートの顔になると思っております。

こちらはご存じのトキワ荘です。アニメの原点はマンガであり、マンガの原点はまさにこのトキワ荘にあります。今、世界の中心の文化はアニメ、マンガであります。中国の西安や韓国の仁川にお邪魔したときに、必ず「今、日本の文化の中心はアニメですよ、マンガですよ」と言われます。その原点が池袋にあるというお話をすると、皆さん、ぜひ行きたいと仰います。

池袋ではハロウィンコスプレや、アニメアワードフェスティバルなどさまざまなアニメの催しが年間を通じて行われています。11月2日・3日、各イベントと連携して総力を挙げて池袋アニメタウンフェスティバルを開催いたします。アニメイトさん、ドワンゴさん、ポニーキャニオンさん、フジテレビさんをはじめ、トップを走っているアニメの企業が池袋に集結し、国内だけではなく世界に向けて発信していこうということでもあります。

また、すぐお隣の大塚も、南口のほうはきれいに整備が終わりました。北口は駅前を中心に、アフター・ザ・シアターのモデルが立ち上がろうとしております。これもオリンピック前までにはだいたいの構想ができ上がります。

これら現代のまちづくりについていろいろお話をしてみました。次に、文化によるまちづくりがどういう成果があったかということについてのお話をさせていただきます。まず、平成26年からの5年間ですが区民税は38億円増加しました。

納税者が増え、納税額が増えることによって、納税義務者一人当たり課税対象所得額が約10万円上昇しました。さ

らには待機児童ゼロに向けて調整をしております。待機児童ゼロを続ける中で整備率は60.5パーセントと23区で第1位、利用児童数の比率等は23区中2位となりました。

池袋だけではありません。池袋が光り輝くことによって周辺の高田、北大塚、巣鴨や千川の住宅の価値が上がったということです。さらにわずかでありますけれども生活保護の方も減ってきております。特養ホームの入居待機者も減ってきておりますし、就学援助も2パーセント減ってきてまして、中学校の就学援助認定率は1.3パーセントの減少です。それから倒産率も微々たる数字かもしれませんが効果も上がってきています。

これからのまちづくりについてお話をいたします。庁舎をつくるにあたって、55億円貯金することができました。そして南池袋公園の下は東京電力の変電所として地下6階までをお貸ししております。地下1階に広大な自転車置き場を東京電力が無償でつくってくれました。これまでの地道な取り組みやこのような自転車置き場の整備によって池袋東口は放置自転車ゼロであります。さらには公園のカフェも大繁盛です。儲かった利益は折半になりますが、開店以来一度もマイナスになることなく大変儲かっています。これによってこの南池袋公園はすべて運営もできますし、逆に年間1,000万円の黒字です。これこそ稼げる自治体だということがお分かりいただけるかと思えます。

それから新ホールのお話がありました。新ホールの名前は『東京建物 Brilia HALL (ブリリアホール)』です。ネーミングライツは10年間で5億6,000万円。まだ運営費は入りませんが、これらを含めながら稼げる自治体をつくっていくというものを行っております。さらには先ほどお話したIKEBUSを回遊させますが、ランニングコスト等を含めながら運賃・広告費等を検討して、絶対に黒字経営をしていくという思いで進めております。トキワ荘は補助金も何もありません。約10億円かかるトキワ荘をつくるにあたって、3億5,000万円のふるさと納税や寄付をいただきました。本当に今、豊島区が文化を中心にしながら新しいまちづくりを進めております。

まとめに入りたいと思います。大変、困難な時期もありましたが、民間の力を活用した文化によるまちづくりが今、豊島区の進めているまちづくりの方向性であります。これまでに先ほどお話したように就任当初、財政赤字寸前です。あのままでは夕張の前に豊島区は破綻したかもしれません。この苦しいときにピンチをチャンスに変えて、挑戦に次ぐ挑戦で思い切ったことができるわけがあります。文化というものには、未来がある、将来がある、夢がある。それによって経済効果も現れてくる。文化が皆さんに浸透し、文化を機軸にまちをデザインし、そして世界を視野に選ばれるまちとして豊島区の将来像を区民の皆さんに示して、区民の皆さんの夢、目標を掲げてまいったわけです。こうした戦略の実現のために持てる力を十分に発揮してまいりたいと思います。有形無形の価値を伝えるレガシーとして、池袋西口公園を含む四つの公園を新たな池袋、あるいはさまざまなプロジェクトを連動し、

文化によってダイナミックにエキサイティングにまちが生まれ変わるわけであります。

私が区民の皆さんにお送りしたメッセージを申し上げます。「私の文化によるまちづくりは夢が大きな力になっています。いま、その夢が少しずつ姿をあらわしてまいりました。その姿が区民の皆様にとって未来への希望となり、明日を創り出す『としまの地域力』へ繋がっていきます。」政治は争いをつくります。今、韓国と日本とはあまりいい関係ではございませんけれども、今回、東アジア文化都市を開催したことで、私も韓国の仁川広域市にお邪魔しました。文化というのは大小がありませんし、未来があるというのは、本当にいい交流だなというわけであります。

政治は争いをつくります。経済は格差をつくります。これは当然です。けれども文化は未来を創り平和を創るのです。苦しいときでも歯を食いしばって未来に向けて頑張ろう、輝く賑わいのあるまちをつくらう。そうすれば経済があとからついてくる。そういう強い信念を持ってここまでやってまいったわけであります。いくら夢を持ってもなかなか夢をつかまえるのは難しいと思いますけれども、大切なのは常に追いつけることではないかと、そんなところでちょうど時間になりました。

拙いお話でありましたけれども、ご静聴を賜り心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

#### ○CCNJ顧問コメント 佐々木雅幸氏

**佐々木顧問** 皆さんこんにちは。創造都市ネットワーク日本は、111の都市によって形成されています。また、ユネスコ創造都市ネットワークには世界180都市入っていて、アジアでも中国、韓国で日本を凌ぐような勢いになっているようなのですけれども、約20年前、高野区長が就任されたときとほぼ同時期でございます。それを改めて今思い起こしております。

ジョン・ラスキンというイギリスの文化経済学の始祖が『ヴェネツィアの石』という本を書かれました。その中で、「ヴェネツィアの建物の中でも、特に職人の創造的な仕事の精神に宿っているものが素晴らしい。しかしどんどん壊れていくため保存しなければいけない」と言われました。この本が出たため、ヴェネツィアは残ったのです。彼のその思想はその後、ナショナル・トラストというイギリスの自然を保存する運動にも広がりました。

さらに、ラスキンの思想はウィリアム・モリスというデザイナーに引き継がれ、その思想は日本では宮沢賢治がそれを引き継いで、「これからは農村でも芸術で農民オーケストラをつくる」という理想を掲げた羅須地人協会をつくりました。その宮沢賢治の思想を賀川豊彦さんという人が翻訳した『ヴェネツィアの石』という本の中で、文化芸術都市の原点を遺したということとをずっと整理をしております。そのことを今思い出したのです。また、アメリカの歴史批評家ルイス・マンフォードの著書『都市の文化』の中に極めて印象深いフレーズがあるのですが、「都市は芸

術を育てるとともに芸術であり、都市は劇場をつくるとともに劇場である」とあります。劇場都市という言葉が生まれたのは、そのマンフォードからでございますが、今日の高野区長のお話を聞いておりまして、劇場都市のマンフォードの思想をきちんと受け継がれているなど。文化創造の器を整え、劇場と広場を組み合わせることで都心の力を高め、夢を語り、区民を引っ張っていく。こういう形を提案なさったわけです。

豊島区はそもそもの出発点が財政危機にあったと。あるいは消滅可能性都市。どっちも有り難くないことです。でもそれが一つの転換点のバネになった。このときにやはり将来を見据えて夢を語る、そういう主張のトップが出てきたから転換できるのです。しかし、その夢が語れないと地域がどんどん衰退していくということを改めて思いました。いわば地域の存亡の危機のときに遠くを見つめて夢を語る、そういうトップを迎えた豊島区は大変幸せだったなと思えました。

21世紀にいくつかの都市で創造都市についての社会実験のようなことが始まりました。例えば金沢市は2001年から金沢創造都市会議を始めました。2004年にその拠点施設となる21世紀美術館がオープンしました。この2004年に首都圏では横浜市が文化芸術創造都市を目標にして、クリエイティブシティ・ヨコハマ構想を打ち出しました。横浜、金沢が二つのリーダーになって創造都市ネットワークを創ろうということになるのですが、この豊島区は2005年に文化創造都市という提案をされ、そしてそれを引き継ぐ形で2015年に国際アート・カルチャー都市が生まれた訳です。これが日本の創造都市の流れを力強く応援してくれたと、改めて思いました。

創造都市ネットワーク日本を創るときに、基礎的自治体を中心的な構成団体にしよう。県はそれをバックアップする立場に立っています。東京都は23区、特別区、これを基礎自治体としてきちんと位置づけて東京都がバックアップするという形がいいのではないかと議論をしたことを覚えています。それは豊島区という区が存在があったので、こういった了解が得られたと思います。ですから、創造都市ネットワーク日本というものまで発展して行くことによって、この豊島区が存在というのは高野区長のリーダーシップがとても大きなインパクトがあると思っております。

さて、特に財政危機の中で財政再建をされてくるということで、1,000人くらいの職員の方を減らしてきたと。普通はそういったときに文化関係の中から先に削られるのです。皆様も経験があると思います。ところが豊島区は反対なのです。区長に就任されたときはわずか2名の担当者。ところが平成15年に33名になり、平成20年に94名になり、なんと平成31年は100名。非常勤を含めると200名以上で、さらに財団職員が400名です。これはすごいことですよね。最初に財政削減の被害を受けるようなところこそ増やしていくと。文化を軸にまちづくりを考えるといったときに、マンパワーと財政をどのくらい文化関係に回しているかと

いうところがポイントなのです。29万の自治体からすればオリンピック・パラリンピックを前にして23の文化事業をやるのは大変なことだと思います。さらに2014年から始まった東アジア文化都市。最初、この事業を豊島区さんが手を挙げるとは想定外でした。横浜、新潟、奈良、京都、金沢と名だたる創造都市のリーダーが出てきて、いきなりオリンピックの前年に豊島区が手を挙げるのは間違っているのではないかなと私は最初思ったのです。ところが豊島区にはやはり戦略があって、オリンピックの前年にきちんとした体制をとってやるからこそ、オリンピック文化プログラムにつながるのだということで、こちらのほうも見事にやっています。さぞかし現場は大変だろうなと。皆さん、健康に気をつけて、と思っています。創造都市という動きは日本の国内だけの動きではなく、世界全体で進んでいきます。21世紀になって、どんどんこれが広がっていく。皆さん方の都市でもぜひユネスコ創造都市にチャレンジして欲しいと思います。

日本全体がクリエイティブに再生していくには、自治体が頑張っ、そしてそこで市民が文化を軸にして未来を見て動く流れが出てこないとなかなか進みません。日本は消費税も大変だし、台風はくるし地震もあるし津波もある。みんな疲れちゃいますよね。やはり文化芸術を軸にした夢を持って将来構想をもってしっかりと進むということ、ぜひ一緒にやっていたら、今日は本当に参考になる話を伺い、ありがとうございました。

#### ○パネルディスカッション「民間の力を活用した文化によるまちづくり」

##### ・パネリスト

豊島区国際アート・カルチャー特命大使 城所信英氏

池袋マルイ 店長 上村昌弘氏

サンシャインシティプリンスホテル 事業戦略チーフマネージャー 平田直司氏

豊島区政策経営部長 金子智雄氏

豊島区土木担当部長 原島克典氏

##### ・ファシリテーター

一般社団法人芸術と創造 代表理事 綿江彰禅氏

綿江氏 綿江と申します。改めて、よろしく申し上げます。

今日のテーマは「民間の力を活用した文化によるまちづくり」ということで、はじめ、区長に概要をご説明いただきました。本日は自治体関係者に多くお集まりいただいていると思いますので、政策のスキーム等を、まず豊島区の職員の方々、そして民間の企業、もしくは地域の中で活躍されている方に、プレゼンテーションをしていただきます。それをお聞きいただいた後にディスカッションに入りたいと思います。

では、はじめに原島さん、お願いします。

原島氏 改めまして、皆さんこんにちは。ただいま紹介い

ただきました、豊島区で土木担当部長をしております原島でございます。私からは「官民連携で文化施設の開発」ということで、まちづくりを重点的にお話しさせていただきたいと思っております。

まず、豊島区でございますけれども、先ほど、日本一高密度都市というお話がありましたけれども、5社11線が区内を走っておりまして、16の駅があると。ほとんど10分も歩けばどこかの駅に行くという、非常に利便性がよくアクセスの容易な区です。池袋駅を中心としたまちづくりは、平成27年に特定都市再生緊急整備地域という国の指定をいただきました。だからというわけではないのですが、現在、池袋のまちづくりが非常に進んでいます。

まず、昔を振り返っていただきたいと思っております。これが昭和30年代、40年代からずっと言われ続けてきたことですが、池袋は駅が非常に混んでいます。また池袋駅は駅をばさんで東武百貨店と西武百貨店があり、4社8線をコンパクトに乗り換えができます。これは利用者にとってはいいのかもしれませんが、駅の中で買い物をして、そのまま乗り換えていくということで、人が外に出ない時代が長くあったわけですね。行政としては、どうやって人をまちに出すかということを考えてきたこと何十年です。

その起爆剤になったのがサンシャインです。サンシャインは昭和53年にできて本年で41歳ですけれども、駅から人が出てこなかった。それが、このサンシャインの入口に向かって今17万人、一日に歩いております。これが、池袋駅から人が出てくる一つの原動力になっております。ただ、ここ一点に人が集中しておりまして、そのほかについてはなかなか出てこない。これを、面的に人を出してまちの活性化をやっていく、これがまちづくりの原点ということで進めてきております。サンシャインができて以降、西口につきましては、東京芸術劇場が平成2年、メトロポリタンプラザが平成4年、このメトロポリタンプラザ、唯一池袋の駅の地下から階段ですとかエレベーター、エスカレーターだったものが、ここにサンクンガーデンというものができました。非常に出やすくなった、そういった構造が初めてできたのが、この平成4年にメトロポリタンプラザにより実現したのです。

平成27年まで話が飛びますが、この庁舎は平成27年5月に開庁いたしました。区長からもありましたとおり、官民連携再開発事業でこの建物が出来上がったわけですね。6割の区有地と4割の民有地で再開発事業によって区役所を建てたのがまちづくりの始まりです。ここにはHareza池袋、区役所、公会堂があります。池袋駅を中心として面的にまちを広げるためにここに一つの拠点をつくりました。先ほど言いましたとおり、学校の敷地で権利変換したものと、旧庁舎地を定期借地で貸して地代を充当することで一般財源なしでこの庁舎を造ったというスキームです。

それではどうやって面的なまちを広げていくかということについてお話しします。まず、人に回遊してもらうためにということで考えたのが、四つの公園でございます。池袋駅を中心に、それなりの位置に公園の敷地があったと

いったところですね。まず、南池袋公園は2016年にオープンしてから非常に人気の公園です。実は、先ほど東電の変電所が地下にあると言いましたが、5年ほど休止しておりました。休止前は、ブルーシートや段ボールのハウスがたくさんありまして、一般の人はなかなか入りづらい公園だったのです。そして5年間の休止を経て、そうではない公園を造っていかうということで、周りの地域の皆様方とともにいろいろと議論を重ねて造ったのがこの南池袋公園です。また、西口にはグローバルリング、西口公園、旧庁舎、Hareza池袋、その前の前庭として中池袋公園。それから、防災公園にはもともと造幣局がありました。つまり国有地だったわけですが、造幣局はさいたま新都心に移転しまして、その跡地を市街地整備するということで3.2ヘクタールの土地に公園を作り、官民連携ということで大学を誘致し、東京国際大学ができます。池袋にはこれら四つの公園、そしてサンシャインがあり、駅もあります。これらを回遊するというコンセプトが、まちづくりの今の基本になっているのです。

南池袋公園は平成28年4月にオープンしました。再開発の庁舎の前庭になっております。ここにラシーヌというカフェがあるので、非常に賑わっておりまして、地下埋設物の復旧費と建物の占用料等で維持管理費がプラスになっている事例の一つです。

旧庁舎地のHareza池袋は、先ほどありましたとおり、パークプラザやシネマコンプレックスがありますが、先ほど区長が説明したとおりでございますので、飛ばさせていただきます。

中池袋公園は9月オープンいたしました。11月1日のホールのオープンに合わせて、前庭として整備しました。西口にはグローバルリングができます。東京芸術劇場とグローバルリングの二つが相乗効果で東アジア文化都市、そして国際アート・カルチャー都市の一つの拠点としての位置づけを担います。野外劇場が11月16日にオープンします。ここにもカフェを用意しました。観光案内とカフェで来街者への対応をする施設です。

造幣局跡地に造る防災公園は、1.7ヘクタールと豊島区では一番大きい公園です。豊島区は23区中で唯一ヘリポートがなかったのですが、この公園ができることによって災害時のヘリポートもやっと区内に一つできることになりました。また、防災公園としていろいろな機能を有しています。特にこのヘリポートの特色は都立の大塚病院に近いことです。災害時には救急医療にヘリポートが活用できます。また、中には幅員6メートル銀杏並木がございます。日々の使い方、そして災害時の使い方ということで、2面性をもった公園として整備しています。防災公園の隣にはキッズパークができます。ミニトレインを配して未就学の子どもたちを対象としたパークを造ります。小学生の高学年と未就学の子どもと一緒にいますとケガの可能性もありますので、未就学の子どもが安全に遊べる空間を造っていくと。保健所と一体となって、保健所に来た未就学のお子様たちに、帰りに遊んでいただけるように整備

をしているというところでございます。

また、後で城所さんから詳しいお話があると思いますけれども、大塚駅につきましたは平成5年から地元の方々といろいろと議論をしてきました。そして、平成20年には自由通路、そして駅ができました。それまでは、エレベーターもなく階段も狭い、大変苦労されたと聞いております。自由通路や駅ビルもできて、地元の方々の要望を入れながら南口の駅前広場ができました。今、いよいよ北口の駅前広場を整備しています。その他にも星野リゾートOMO5ができて、アフター・ザ・シアター、夜に楽しむまちにしていこうということで、一風変わった他にはない光景が令和3年には出来上がる予定となっております。

このバスは11月から運行を開始いたします。明日、展示をいたしますのでHareza池袋にお越しになる方は、実物が見られます。これは、電気のバスで、環境にやさしく、ゆっくりと。どちらかというA地点からB地点に人を送るのではなくて、まちを見ていただくものです。ルートは2系統、台数は10台用意いたします。

最後になりますが、Hareza池袋、池袋周辺のまち、それから東アジア文化都市、四つの公園の整備を行って、来年、オリンピック・パラリンピックを迎えます。これらのまちの集大成を電気のバスが回ってまちの価値を上げる、回遊の装置です。それによって国際アート・カルチャー都市、劇場都市をつくっていくというのが今のまちづくりの方向です。人口減少社会から新時代を切り開くということで、これからもずっと発展し続けるために、さまざまな課題に取り組んで参ります。ありがとうございました。

**綿江氏** ありがとうございます。原島さんには先ほどの区長のまちづくりの話を補足していただいた形になるのですが、豊島区は行政主導という部分だけではなくて、行政と民間の連携が強く、民間発の動きも盛んです。分野としては舞台芸術とマンガ・アニメと祭事・芸能の三つに力を入れています。特にマンガ・アニメを強く推し進めていて、今日はこの分野において民間側からいろいろ取り組みをされているマルイさんとプリンスホテルさんにお越しいただきました。簡単に、それぞれの取組をご紹介いただければと思います。では、まずマルイの上村さんお願いできますでしょうか。

**上村氏** 池袋マルイの上村と申します。簡単ではございますが、よろしく願いたします。

この場をお借りしまして、先日の台風19号で被害に遭われた地域の方々にお見舞い申し上げますとともに、いち早い復興を心よりお祈りしております。

弊社には、○|○|というロゴがあるのですが、それは別にマルイノアニメというロゴがございまして、これをマルイ全店でアニメを推奨するという主旨で使っております。

池袋マルイのことで簡単にお話しさせていただきます。マルイは今42年です。うちのマルイの裏側は昔から住んで

いる住民の方が非常に多くて、地域密着型で商売をさせていただきました。ただ、最近、1年前くらいなのですが、マルイでもアニメというところにすごく力を入れはじめまして、一番上の7階はイベントスペースを利用してアニメのキャラクターとかフィギュアの展開しております。

7階にはアニメがとかジャングルとか、ヴィレッジヴァンガードとかザッキャラなどのショップが入っております。弊社が自主で運営しているマルイノアニメというエリアもあります。ここはアニメ、サブカルチャー、音楽のイベントなどで、今、非常に賑わっているフロアになりました。このフロアが2018年度に正式にオープンしてから、お店全体の入店も実は2桁増すほど新しいお客様が来ておまして、今年度はこのフロアだけでご利用いただけるお客様が2倍になるくらいの入店に予測ができるくらいまでになっています。

代表的な直近のイベントが『ナポリテン〜ナポリの男たち展示会〜』という催し物です。ユーチューブのゲーム実況プレイヤーの4人組で「ナポリの男たち」というグループがいるのですが、彼らの初のイベントということで6月に約2週間やらせていただきました。全国で約6万人のお客様から応募をいただきました。残念ながらキャパの都合で1万5,000人くらいしかご招待することができなかったのですが、そのくらい人気があって、アニメとかゲームは、全国からお客様がその地域に来ていただけたところがすごい強みです。また、この情報を近隣のコーヒー屋さんとかいろいろなところに事前に知らせていたのですが、ナポリの男たちをよく知っていた有名なコーヒー屋さんには、そこで『ナポリテン〜ナポリの男たち展示会〜』専用のコーヒーを作って来場している人に「店に寄ってね」とツイートで流すことで渋滞するほど繁盛するとか、地域全体にもお客様が増えてくるということが起こりました。

もう一つ、先ほどからよく東京芸術劇場のお話が出てきたと思うのですが、東京芸術劇場とのコラボレーションイベントを2018年度から開催しています。東京芸術劇場でコンサートをしていただき、池袋マルイでグッズの販売等を連携してやらせてもらうという連携イベントです。2018年度でいうと、皆さんも知っている『美少女戦士セーラームーン』とか『この素晴らしい世界に祝福を！』など。今年度もう2回やっているのが『フェイト/グランダー オーケストラ』という、フェイトオーダー、FGOという、ゲームアプリのイベントとして、ドールズフロントラインというものもゲームのアプリのイベントです。芸術劇場などで体験をしっかりともらって、それと同時にここでしか手に入らないものを買っていただくということで、お客様に非常に喜んでいただいています。

先ほどお話ししたように、『ナポリテン〜ナポリの男たち展示会〜』というのも、ただグッズを販売しているわけではなく、ある大きな企画の人たちが展示する会場を用意してそれプラス、グッズ販売という形です。いろいろな

のを体験して楽しんでもらった後にそこにしかないものも買っていただくとというスキームを非常に喜んでいただいています。アニメやサブカルに集中的に力を入れてまだ1年と少しで、まだまだなのですけれども、この二つはしっかり成果を出したいと思っています。

一つは、先ほどからお話がある野外劇場が私たちの目の前にありがたいことに出来上がりますので、先ほどお話ししたように劇場とのコラボをさらに強めていきたいと思えます。この野外劇場のオープンが11月16日ということで、これは私の誕生日です、これは何か縁があるということで、しっかり頑張らせていただきたいと思います。

それからもう一つ、IKEBUSも先ほどから話題に出ていますけれども、今まではアニメと言うと東口のほうが強いと言われていました。西口でアニメとかをやってもだめなのではないと言われていたのですけれども、実は池袋というのは、西口でアニメをやってもすごい規模でお客さんが来るのです。事前に西口と東口でいろいろな運動を組んで、例えばアニメイトカフェと私どもで、お互いのイベントのところをお互いのイベント会場で告知し合うとか、サンシャインでは大きなアニメのイベントがよくあるのですけれども、その袋を肩からかけてうちのイベント会場に来るといってお客さんも多数います。これをもっと進めると(駅の)西と東の交流がもっと膨れてくると思っていますので、ぜひ下半期も進めていきたいと思っています。駆け出しでございますけれども、どんどん盛り上げていきたいと思えますので、よろしく願いいたします。

**綿江氏** ありがとうございます。では、続きましてプリンスホテル平田さん、お願いできますでしょうか。

**平田氏** 皆さん、こんにちは。プリンスホテルの平田と申します。サンシャインシティプリンスホテルという名前です、サンシャインシティと同じ経営なのかと思われる方もいらっしゃると思うのですが、私どもは、サンシャイン60ビルに隣にあります白い建物、三十七階建てのホテルです。そちらを株式会社プリンスホテルが運営していますので、私は株式会社プリンスホテルでサンシャインシティプリンスホテルに勤務している者ということになります。今日は、こちらにありますように、マンガ・アニメコンテンツとのタイアップ展開事例ということで、ご説明をさせていただきます。

まず、弊社の説明です。1980年にホテルが開業いたしまして、来年の4月で満40年という形になっております。先ほど申し上げたように、サンシャインシティの中にございますホテルです。もともと宴会場等ももっていたホテルだったのですが、10年ほど前に宴会場は閉鎖いたしまして、現状におきましては6階から37階まで、宿泊、客室を営業しています。全部で1,091室並びに4レストランを営業している、どちらかと言うと宿泊特化型のホテルということで運営しております。

今日は、コンセプトフロアのご紹介をさせていただきます

す。もともと2015年から約4年間かけましてホテル全館の改装計画を実施いたしました。順次改装していったのですが、4年目の最後でコンセプトフロアというものを持ち上げたというのが、今日のお題という形になっております。

コンセプトフロアとは何ぞやというところなのですが、簡単に言いますと、ワンフロアをアニメやゲームの一作品としっかりコラボレーションした空間です。ホテルというと、泊まるだけ、泊まってチェックアウトして終わりという形になるのですけれども、そうではなくて、チェックインしてからチェックアウトするまでの間を目いっぱい楽しんでもらいたい。池袋にあるこのホテルを、目いっぱい楽しんでもらいたいということでつくり上げたフロアです。このように25階にあるフロアということですので、IKEPRI25という名前も決め、ロゴも作りました。ホテルというとコンシェルジュが頭に浮かぶと思うのですが、架空ではありますけれども、イケメンのコンシェルジュも作りました。名前はないのですけれども、こういった方々が情報を発信するというので、やはり腐女子のまち池袋ということで、女性をターゲットにして女性のそういったものが好きな方にとことん喜んでもらえるような仕組みづくりを行ったのです。このワンフロアは、三、四か月ごとにタイアップするマンガやアニメを変えながら、作品の世界観をその場で表現しております。また先ほど申し上げたように、泊まるだけではなくて、客室以外の共有空間というものをつくっておりますので、同じものが好きというお客様同士が交流したり、体験をするといったコミュニケーションスペースをつくることによって、過ごす場所としてのつくり込みをしていきました。

全体としては、20部屋の客室と四つの共有空間をつくりました。イベントスペースについては、今回改装するにあたって、この三つの壁を抜きました。壁を抜いて、それぞれ約17平米のお部屋をつけて、90平米のスペースをつくり上げたというような改装工事を並行して行ったところなんです。通常の場合においても販売ができるような形でのつくり込みをしています。ただ、デザインですとか、いろいろな面においては、やはり少しほかのフロアとは違った形でご案内やご用意をしています。今年の4月にこけら落としとしてやらせていただいた作品が、先ほどマルイにもございましたけれども、フェイトランドオーダーという作品です。期間は92日間、先ほどの客室20室、一日20室かける92ですので、1,840くらいでしょうか、そのうちの約1,800室を販売ということで、98パーセントくらいの稼働率がとれたということで、非常に作品としても人気のあるものだったのですけれども、やはりほかにはないという希少価値もありまして、全国並びに海外からもお客様にいただいたという結果になりました。

通常の客室からの模様替えでは壁紙を張り替えたり、ベッドの周りもカバーをそれ専用のものに替え、ベッドローを作ったり、このようなキャラクターの等身大パネルを配置しました。これは黄金の間といってこの二人のキャ

ラクターがいる設定をつくり上げたというコンセプトです。そういった部屋を作って、お客様には、このような我々のホテルのために書き下ろしていただいた絵柄を使ったアイテムを使ったノベルティグッズを渡したり、4種類のお部屋をつくりましたので、4つの部屋を連想するようなドリンクをラウンジでお飲みいただくサービスも提供しました。お泊りいただいて、共有空間も楽しめて、持って帰れて、飲めて。これがお支払いいただく金額の代金の対価ということで設定をいたしました。それ以外の三つも、それぞれベーカー街のシャーロックホームズのキャラクターをモチーフにしたものとか、坂本龍馬とかですね、それからキャメロット、アーサー王といったものをテーマにした、まったく違うお部屋をデザインしました。これは、20部屋ありますので、それぞれ5部屋ずつ用意させていただいています。これは、あくまで今回初めてやったFGOのときにやった内容なのですけれども、例えば過去に描いたイラストが見れるようなミュージアムをつくったり、同じく映像を見られるシアタールームをつくったり、このブリーフィングルーム、ミュージックルームにおいては、ラウンジ形態になっていますので、そこで分かりやすく言うと宿帳みたいな形でお客様が今日はここに泊まってどうだったというようなものを書いて、後から泊まれた方は前に泊まった方のそういった宿帳を見て楽しんだり。大きいこのようなスクリーンのようなものを用意するのですけれども、今回はゲーム素材だったので、ガチャを大画面でできて、かつ皆が見られて、当たったとかだめだったとかと大騒ぎをして楽しむ、という空間をご用意しました。今、ちょうど第二弾として7月から10月19日まで行っているのが、「キングオブプリズム」と「DREAMling」という、アニメやゲームとタイアップしています。11月からにおいては「グランブルーファンタジー」というように、先ほど申し上げたように、3か月ずつくらいで衣替えをしながらご案内しています。

なぜ我々がこういうことをやったかということ、全国、全世界に同じようにあるホテルにおいて、どれだけ特徴づけることができるかということ考えた結果です。キーワードとして、「池袋ならではの」というものを考えました。「ならではの感」をどのように出すのかということにおいて、高野区長等がご説明になったように、このエリアで何を今注目しているのかとか、どのようなお客さんが集まっているのかということマーケティングしたうえで、先ほど腐女子とかと申し上げましたけれども、そういったお客様が本当に楽しんで過ごしていただけるようなものをつくれば、ほかとは違いができるのではないかと。あとは、どのくらいつくり込むか。キャパであったり、1部屋しかやらないとか、ワンフロアやるのか、2フロアやるのかということの違いなのかなと、我々は考えています。

我々としては、これを当然常に100パーセント稼働して収益を上げていくということが、ビジネスとしてはベストなのなのですが、一方で海外のお客様に目を少し向けていました。弊社は約60パーセントが海外のお客様にご宿泊

いただいております。東アジアを中心に、団体のお客様が中心なのですけれども、皆様ご存じのように、今、個人旅行にどんどんシフトして、また、全世界の方が旅行される中で、どれだけ弊社にお泊りいただくかということが課題です。私どもはホテルでございます。いくら宣伝をしてもどのホテルもやっていることですし、同じなのです。その中で、ではどうやって選ばれるかと言ったら、料金が安いところが選ばれるのか、アクセスがいいところが選ばれるのか、そういった違いで勝負するよりは、やはり日本のアニメ、サブカルチャーは、全世界で非常に好きな方が多いということがリサーチできていますので、そういった方々に何か変なことをやっているホテルがあるのだなという刷り込みをすることでサンシャインシティプリンスホテルの知名度というものを広げていく一つのきっかけになるのではないかとということで、ここに至っているということです。

ですから、費用としてはこれだけかかっているというお話ではあるのですけれども、マーケティングを実施している立場においては、まちと一緒にした色付けをいかに発信するか、キーワードとして、ツールとして使えるかどうかを考えてた上でのビジネスです。弊社としての今後を申し上げますと、海外発信については、まだ力不足の部分がございますので、まちとして豊島区と一緒に発信していきたいと思っております。簡単ですけれども、以上です。ありがとうございました。

**綿江氏** ありがとうございます。今回のテーマでは民間ということ強調して使っているわけですが、これは二つの意味で使っておりまして、一つ目の意味合いとしては、企業とのコラボレーション、取組です。もう一つは、実は、民間というのは区民であったり、NPOであったりするわけです。ここの密な連携ということも豊島区が力を入れているところですね。豊島区には先ほどご説明にもありましたアート・カルチャー大使という仕組みがございますけれども、その大使もされていて、大塚で様々な取組をされています城所さんから次にご説明をいただければと思います。

**城所氏** 皆様、こんにちは。大塚の城所と申します。豊島区国際アート・カルチャー特命大使というすごい名前をいただいておりますが、1,478名もいるうちの一人として今日は登壇させていただきます。ひと時よろしくお付き合いください。

今日は「民間の力を使った」というお題になっているわけですが、民間には、企業の皆さんもいらっしゃいますけれども、地域というものも欠かせないものだと思います。今日は、その地域の方でボトムアップしてきた公民連携の実例を、大塚からの事例報告として二つお話しさせていただきます。

一つは、駅前広場づくり、そしてもう一つは、都電が走っているまちです。ほとんど池袋のお話ばかりでございます。

ましたけれども、大塚というのはどこにあるの。豊島区の真ん中に池袋、東に有名な巣鴨がございます。その真ん中が大塚。大塚は埋没したまちで、どのくらい埋没しているかと言うと、山手線ゲームをやっても、皆さんなかなか大塚という名前は出ません。それから、何と言ってもマクドナルドがありません。マクドナルドはないけれども、星野リゾートはあるよという、非常に変わったまちで、下町人情溢れるまちでございます。大昔は大変栄えました。大正時代から昭和の始め、池袋にまだデパートや映画館がない時代に、大塚はすでに繁華街でした。しかし、その後埋没しておりまして、なんとかしなければというようなことで、皆さん、いろいろなキーワードは出てきたのです。こういう中で、まちのことをずっと考えてきました。

では、事例報告をさせていただきます。駅前広場の問題。10年ほど前まで、山手線の駅前ののにひなびた駅でございまして、ここに早稲田から都電が来ます。ご多分に漏れずタクシーのたまり場、バスの待機所があります。そして、なにしろ明治時代に造られた駅で構造が変わっていませんので、大変不便な駅で、バリアフリーなどは夢のまた夢、そして何しろ問題は駅前2,200台の放置自転車でした。これは全国ワースト2でございます。では、ワースト1はどこかと言うと、これがまたお恥ずかしいことに、池袋でございました。大塚の自転車をどうやって片づけていったかと言うと、平成4年に大塚駅周辺を考える会というものが発足いたします。大塚駅を中心として、近くの町会、商店街が団体として皆で参加しました。そして、豊島区と連携しながら、まちの人々の意見を集約する仕組みです。変える会ならよかったですけれども、考える会なので、お金もなければ力もないので、考え続けるしかない。まちの夢を語り続けたのです。先ほど区長もおっしゃっていましたが、夢が大事なのです。さまざまなワークショップ等を多数開催しておりました。

しかし、この考える会も、ついに変える会になるときがきました。これは国の施策で、公共空間をバリアフリーにするという法律がありました。これの適用第一号で大塚駅のバリアフリー工事が始まりまして、それをきっかけにさまざまな大塚駅周辺の改良、改善が進みます。これも、地域の皆さんと行政とが一緒になって考えていきました。最後の問題が、先ほどの自転車は全部地下の駐輪場に入れることは決まったけれども、その上の地上部分をどうしようかと。つまり駅前広場空間の再整備です。しかし、もう夢をずっと語ってましたから、広場に関してコンセンサスを得たコンセプトができていました。もう車を追い出したのです。車は駅前にいらない、人中心で人間性と多様性に満ちた、賑わいに満ちたイベント広場にしたいのだということ。

そのようなわけで、住民側でこういうゾーンにするのだよとか、夜はこのように、というパース図を作りました。普通の自治体、皆さんのところだと、コンサル会社や設計会社をお願いして、A案、B案、C案とかと出させますよね。ここまでで数百万円、場合によっては一千万単位のお金を

かけていらっしゃると思います。しかし、大塚の駅前に関しては、住民が勝手に作ってましたから、この部分のお金はかかっておりません。ちなみにこのパース図を作るのに、大塚駅周辺を考える会、これを作ってくれた若い建築家に3万円しか払っておりません。

そして、この構想を豊島区に投げかけます。私たちはこういう構想で広場をつくってほしいのですと。承りましたということで、豊島区が考えてくれて、出してきたのが満額回答でした。すべて私たちの意見を取り入れてくださいました。そうして出来上がった広場です。アイディアは私たちが出しました。都電が走っておりますが、外側にバスターミナルをもっていき、タクシープールをもっていき、一般車はさらに外にもっていくという、駅前の交通体系を抜本的に変えなければいけない。このための調整、警視庁、東京都、場合によってはJRや国との調整を、豊島区の担当の部長の方々が本当に熱心にやってくださいました。それを後押ししたのは、やはり住民の熱意だったと思います。

では、なぜ住民と民間とが、地域とが、信頼感をもったスクラムを組むことができたのか。これは、やはり長い時間をかけてきた信頼感の醸成もありますが、もう一つが、都電を活かしたバラのまちづくりです。大塚は東京で唯一残ったチンチン電車が、唯一山手線の駅とクロスするまちなのですけれども、地域資産とも言うべきこの都電の景観がまったく活かしていない。ごみ溜めにしていました。犯罪の温床でもありました。これを何とかしてバラの散歩道にしていこうと、地域の女性たちが動き始めました。雑木を取り、土壌改良をし、肥料を入れて、水を運び、苗を植えて、バラの活動、バラのまちづくりをするのだと、大変熱意をもって動いてくれました。そして、地域でバラの会の方々に対して商店街等がタッグを組みまして、南大塚都電沿線協議会というものをつくります。商店街というのは、行政から補助金をもらおうとそれを売り出しとかに使ってしまうのですけれども、これをすべてこのバラを支える活動費に投入します。そして、さらにさまざまな方々、行政、東京都、そして本当にいろいろな方々にご協力とご賛同をいただきながら活動を始めました。すると二、三年目に豊島区が『美しい街並みづくり大賞』という賞をくださったのです。褒められると張り合いが出て、地域の人はますますパワーアップいたします。数年後には町中にバラが溢れ、都電の沿線600メートルの間に、1,100株、770種類のバラが咲き誇ります。これは、東京都23区でもっとも多くバラが見られる一大バラゾーンでございます。都電との景観がマッチしているだけでなく、さまざまな循環が地域に起きようになります。今度は国が褒めてくれました。全国花のまちづくりコンクール国土交通大臣賞、全国2,400団体の第一位でございます。これが本当にますます皆さんのやる気に拍車をかけまして、今では毎月一回の全体作業日に大勢集まります。日々の手入れがないとバラは咲かないのですけれども、これも皆さんの力でやっていたいております。



そういった周辺を考える会、また都電沿線協議会、これら地域の人々の力強い地域力と豊島区の行政とがスクラムを組んででき上がったのが、「トランパル大塚」という広場でございまして、一昨年オープンいたしました。名前にどれほど多くの皆さんの思いが込められているかを、あとでご確認いただければと思います。

そして現在、この広場は、大変多様な形で、まさに豊島区が推進する町中が劇場になる、誰もが主役になる広場の中心として活用されております。例えば『おおつか音楽祭』。「まちに音楽が溢れ出す」というコンセプトですが、この音楽祭自体も東京都から大変高い評価を頂戴しております。また、50年の歴史を誇る東京大塚阿波踊り、さらには夏の駅前ビアガーデン。山手線の駅を夏に降りると、ビールを飲んでいます。ビアガーデン、大変盛況でございます。なんといっても入場無料ですから、駅前広場でビールを買って飲んでいただければいいですから、大変賑わいます。そして、これは今週末に第11回目が行われますが、『大塚商人まつり』。広場ができてパワーアップいたしまして、今年は120店舗、数千万円の売上を誇る大きな商業イベントになっております。さらに、青空マルシェ、フリーマーケット、それから夏は『東京フラフェスタ in 池袋』の大塚会場などのイベントも開催されております。春と秋のバラ祭り、冬はいちよう祭り、全国の民俗芸能をお披露目しております。

そして、観光庁のナイトカルチャーエコノミーの推進事業として、去年のクリスマスに『オオツカ・アフター・ダーク』というものを行いました。なかなか力の入ったインバウンドのイベントでしたけれども、お客さん、思ったほど来なかったのです。しかし、今年の夏にやったこれらの事業には、行政は入っていません。まったく純然たる民間イベント、地元の商店街と地元に住んでいる外国人とでコラボして、クラフトビールフェスティバルというものを行いました。二日間で3,500人の外国人が来てくれました。大変盛り上がりました。行政が手を出さないほうが外国人がたくさん来るということです。

それから2週間前文化庁の補助事業ということで、『フェスティバル／トーキョー』というイベントをしました。これは都電が走る駅前広場で、若いパフォーマーたちが大変不思議なパフォーマンスを繰り広げてくださりまして、若い人たちにも大塚を知っていただけたわけでございます。

そして、日々のトランパル広場は、ご覧のように大変穏やかな憩いの場になっております。昼間は、幼稚園、保育園の子どもたちが遊びに来るような場でもあります。そしてこの広場、毎朝、ラジオ体操をやっています。このラジオ体操会、実は体操をする前に、皆でこの広場を清掃しています。体操と清掃、朝のうちに溜まったごみを全部拾い出します。掃除してしまいます。そして参加する方は、身も心も爽やか、健やか、そしてまちの中心になる広場も清潔に、爽やかに一日が始まるわけでございます。ラジオ体操、清掃の会、すかさず豊島区長は表彰していただきまし

た。やはり行政に、民間を時々褒めていただくと頑張るのですね。そして益々力が入りまして、この度、まさに今月、一般社団法人みんなのトランパル大塚という法人が設立されました。設立目的は、官民協働によるより力強い広場運営と管理ということです。

今日の結論、地域力にある程度委ねるということも大事なことだと思います。地域には、必ず自ら動いていこうとする人々の熱意があります。それをどうぞすくって差し上げてください。そして行政は、そこに的確なアドバイスと効率的な補助金の投入等の投資を行うことで、必ずまちにはヒューマニティとダイバーシティに満ちた新しい賑わいと活力が生まれると、実体験として感じています。本日は、私ども大塚のまちの事例をとおして、ささやかですがけれども報告をさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

**綿江氏** ありがとうございます。どれだけ豊島区の区民が元気か。城所さんは地域力を象徴するような方だなと思いました。

豊島区の文化政策は区長の強烈なリーダーシップで進めているところもあるのですが、同時に、仕組の部分でどのように担保しているのかということや、また豊島区職員に戻りまして、政策経営部長をされている金子さんからお話ししたいかと思います。

**金子氏** 皆さん、こんにちは。政策経営部長の金子と申します。政策経営部というのは、皆さんのところにも企画部とか、そういう部署があると思いますけれども、企画であるとか財政であるとかを担当しております。ですが、なぜ私がここにいるかといいますと、私の傘下に国際アート・カルチャー都市推進室がございまして。昨年、文化商工部から移管になりました。一番区長に近いところに国際アート・カルチャーの担当があり、それとは別に文化観光課とか文化デザイン課があるというような形です。

先ほども説明がありましたが、文化担当職員約400人というのは、正規職員だけでなく非常勤職員や外郭団体の方も入っております。それにしても少し多いかなとは思いますが。東京都の生活文化局にご挨拶に行ったときに、この人数の話をしましたら、うちの局よりも多いですねと局長がおっしゃっていました。本区は職員全体で2,000人弱です。そういう自治体としては、全員が区の正規職員ではないとしても、約400人というのは少し多いのかなと。

私も原島さんもここに来て説明しているということで、土木担当部であろうが、政策経営部であろうが、とにかく文化のプロジェクトを実施する、まちの方々と協働で実施するという点に関しては、どの部署でもやるというのが本区のスタイルということがあります。

公民連携と言うと格好良いのですがけれども、本区は本当にお金のない時期がありまして、そのころは本当に民間の方の力をお借りするしかありませんでした。まちの方々にいろいろ委ねるしかなかったというのが実態、という部分

もあったかと思えます。

国際アート・カルチャー都市の推進は「三つの矢」で、と言っています。

第一の矢というのが、相当有名な方々11名にプロデューサーをまずお願いして、この国際アート・カルチャーというものを始めました。それから30人くらい「都市懇話会」という形をとりまして、さらに組織化を進めました。一番大事なのは、第三の矢と書いてありますが、国際アート・カルチャー特命大使です。任命された方々には名刺を持っていただいております。しかも会費をいただいているということでございます。

ずっと文化フォーラムというものをやっています。154回になります。もう何十年もやっています。そういうものにご招待してまず参加していただく。プラスして、後で出てくるような自主事業もやっています。

特命大使の役割としては、都市の魅力を自ら区内外に発信すること。よく何とか観光大使ということで、著名人の方、ご当地出身の芸能人の方とかに頼んだりしますが、うちはそのようなものではなくて、先ほど言いましたプロデューサーの中にはその分野で超一流な有名の方が入っておりますが、決して全員が区内出身者というわけではありません。マンガ分野の第一人者ということでお願いした里中満知子先生ですとか、たまたまこの庁舎建設の関係で縁の深い隈研吾先生に入っていたりしています。

本区は「特命大使」の方々に発信をお願いしているところです。いろいろな知り合いの方に、名刺を配ってくださいとお願いしていきましたら、平成27年の876人から、わずか3年で現在は約1,400名ということになりました。区民の方という限定はなく、外国籍の方も若干いらっしゃいます。学生も何十人か入っています。

特命大使をお願いしていることは、まずこの名刺です。名刺やバッジがありますので、これをお渡しいたします。2番目が、意見交換の場への参加、これも別に強制ではないのですが、皆さん、本当に熱心にご参加いただいています。3番目、これがフォーラムです。154回と続いています。この開催を通じて、いろいろな著名な方々をお呼びして、そこで本区と仲良くなっていただき、そしてまた次のいろいろな機会につながっていきます。このような催しはおそらくいろいろ開催されているとは思いますが、これが人間関係の始まりなので、その縁を大事にされるとよいと思います。うちの区長は芸能人でもありませんし、以前から芸能や文化の世界をよくご存じだったわけでもないようですが、こういうことを通じて、多くの文化人の方々との結びつきを積み上げてきたと思っています。

アトカル大使の活動ということでは、最初はいろいろなものを見せてくれ、区の情報を教えてくれという形でお集まりいただいていたのですが、今は「特命大使通信」というものを年に4回くらい出しています。それから専用のウェブサイトは今月の終わりくらいによく立ち上げました。大使は約1,400人もいらっしゃるの、なかなか

一挙に全員が顔を合わせるといことは難しいので「私、こういうことをやっています」ということを発信し合ってもらえばということで、これを構築中でございます。アトカル大使の中でうまくいったら、今度は外にも公開しようという段取りを考えています。

さらに、「自主企画事業」というものが、2019年から始まりました。これは、私たちがやってくださいと言ったのではなく、いろいろご参画いただいていたアトカル大使の方々から、我々にもやらせてくれという話がありまして、そうであれば、いただいている会費もあるのだからそれを活用してという話になりました。それで、会費の一部を事業への補助として出しつつ。例えば画面にある「前庭コンクール」というのは、日本女子大学の先生、地元の方が自主企画でやっているものです。そのようにいろいろありまして、特に今年は、「東アジア文化都市」の年でありましたので、そこに参画するという形もありました。

このように、2018、2019、2020年というようにオリンピック・パラリンピックに向けて自主企画事業を充実させております。私からは、以上でございます。

**綿江氏** ありがとうございます。いろいろなお話を聞いていただいて、パネルディスカッションに入りたいところなのですが、私から、少し補足をいくつかさせていたいただきたいと思っています。文化政策というのは、一般的には住民の方々に理解されづらいことも多いです。私も豊島区にお仕事で携わるようになる前は、区長が強烈なリーダーシップで推し進め、割と区民は置いてけぼりになっているのではないかという思いをもっていました。豊島区は国からいろいろな補助金をとっていますので、その中で、評価をきちんとせよということを最近強く言われるようになってきました。従来から区民意識調査とか事業の来場者調査とかいろいろなものはやっているのですけれども、最近チャレンジしたこととして、インターネットアンケートを使った評価を行いました。

インターネットアンケートの仕組みというのは、全国の一般の方々がインターネットアンケートの会社にモニターとして登録し、我々がそのアンケート会社にこういう人たちにアンケートを答えてもらいたいだけにと依頼して答えてもらうというものです。2019年の2月に大規模な調査を行いました。三つのカテゴリーの方々にいろいろなことを聞きました。一つ目が豊島区民約700名。二つ目が区民は除いた昼間豊島区で働かれている方213名。そしてもう一つは一都三県の居住者で、池袋を中心として、そこから35キロ圏内に含まれる市区町村に住んでいる方2,000名です。池袋から35キロというのは、横浜が少し入るくらいの距離で、豊島区のことを聞いてもイメージが沸くのではないというエリアです。

勝手にアンケートを撒いてしまうといういろいろな人が答えてきますので、きちんと豊島区民であれば、豊島区の実際の性別・年代の比率ですとか、働いている方・働いていない方の比率ですとか、所得の比率ですとかですとか、実際

に住んでいる方のプロポーショナルに合わせて回収し、先程の三つのカテゴリーの回答が代表性をもつような形で回収しております。

アンケートでは豊島区民の方にまず、「豊島区が文化芸術に力を入れていると思いますか」ということを聞いたのです。そうすると、驚異的ですが、65%が「力を入れている」と答えてくれた。次にその人たちに、では、「それを評価していますか」ということを聞いた。そうすると、この方々の86%、約9割が、「評価している」、つまり豊島区はいいことをやっているよね、と答えてくれました。これを掛け算すると、大体区民の二人に一人は、豊島区の文化政策に力を入れているし、いいことをやっていると感じて得られているということになります。

この割合は年代別で見てもそれほど違いがない。そして男女でみてもそれほど違いはないです。文化というのは、一般的には高齢の方のほうが親しんでいる傾向があるわけですが、おそらく、アート・カルチャー特命大使の仕組みなどを通して、かなり裾野が広く浸透していることが分かりました。

これまで豊島区の話をしてきましたが、実は一都三県の方々、23区の方々にも、「あなたの住んでいる自治体は文化芸術に力を入れていると思いますか」、「それを評価していますか」と同じ質問をしております。

一都三県ではそれぞれの割合が27%、22%でしたので、いかに豊島区の高い割合がわかります。また、豊島区の文化のイメージですが、区民と一都三県の方ともに「サブカルチャー」と「地域の祭り」、「演劇」に力を入れているというイメージを持ってもらっていることがわかりました。

ここまでがいわゆる文化政策の文化の話なのです。しかし、豊島区は必ずしも文化のための文化をやっているわけではなくて、区長がおっしゃったように稼ぐというところ、ある程度お金につながったり、イメージ向上につながる好循環を生み出すためにある種文化を使っているということもあります。そこでアンケートでは、豊島区民と一都三県、23区の方々に、五つのワードを掲げて、それぞれについて23区のなかで、どこを想起しますか、力を入れていると思いますかということを選択してもらっています。「マンガ・アニメの溢れるまち」というキーワードで言えば、豊島区民と一都三県、23区の方々のいずれにおいても豊島区は1位で、「劇場のあるまち」では、区民は1位、一都三県では1位が新宿区で3位が豊島区になります。それから「高齢になっても元気で住み続けられるまち」では区民は1位なのだけれども、一都三県では8位になってしまう。そのほか「子育てしやすいまち」、「安心・安全なまち」というところも、区民ではそこそこ高いのですけれども、一都三県でみると低い。実は、豊島区としては、文化を起点に将来的にこの辺のところのイメージ向上まで波及させたいという思いではあるので、こういう調査をしているということなのです。

それから、例えば「地域の住心地」に関する評価であり

ますと、「文化芸術に力を入れているとと思っている区民」のほうが住み心地が良いと答えてくれていたり、「地域への愛着」、「地域への誇り」、「幸福度」でも、「文化芸術に力を入れているとと思っている区民」のほうが良好な結果となっています。これは、文化の結果でそうになっているか、つまり因果関係があるかは分かりませんが、少なくとも文化に力を入れているとと思っている人たちというのは、住み心地、誇り、幸福度、愛着というものを感じてくれていると、そこに相関はあるということを確認できています。

最後ですけれども、結局のところ、多分、豊島区の職員の方や区長からはなかなか言いづらいと思うのですが、税収、つまり区民税を上げるためには、それなりの所得をもった方に多く住んでもらいたいというのが、ある種の本音ではないのかなと思うのです。アンケートでは、例えば23区の方に「あなたは移り住む気持ちがありますか」ということを聞いています。さらに、気持ちがあるという方に「移り住むのであれば、具体的にどこに住みたいですか」と、自由記述で回答頂いています。世田谷区という回答もあれば、二子玉川という回答もありました。23区全体の回答では、340人中豊島区とか池袋と答えてくれた人が13人で23区のなかでは4番目の人数でした。ですが、「豊島区が文化芸術に力を入れている」と思っている方165人のなかでは、豊島区の人数が12人で、23区中1番となりました。ですので、これも文化というものを推し進めることで移住したい、豊島区に住みたいという人を増やせるかもしれないという思いの一つの裏付けにもなっているということです。本日、区長からお話しいただいたようなことというのは、区民からもサポートされていますし、それがきちんと税収として、もしくは消滅可能都市に対する解決策にもなっている可能性が高いということを少し補足させていただきました。

では、残りの時間、20分くらいですけれども、ディスカッションしようと思っています。まず、金子さんに「文化」というものは豊島区職員のなかでどのような位置になっているのかということをお伺いしてもよろしいですか。

**金子氏** どう思っているのでしょうか。私などは勤続三十何年なので、本区に本当にお金がないときを経験して、これほど楽しい今日を迎えられるなど、当時は思ってもみなかったです。ですから、最近入庁した職員は、これが当たり前だと思って楽しくやっていたら、それはそれでいいのですけれども。少し古い、私どもみたいな者は、やっと本当に楽しくなってきたなという感じです。

いわゆる文化事業、様々なイベント事業とかで褒められたいというよりは、公園なら公園のデザインをきちんとやっていく中で、これはいいと区長からも褒められて、皆が「文化」に染まっていつている気がします。

お金がなかったときでも、明るくやりたいという感じが多分あったのだと思います。そして何とかそこを脱出し

て、ようやくハードにも投資できるまちづくりができるようになった。

区長はよく我慢してくれました。お金がないので「あれが造りたい」「だめです」と。当時、私は財政担当で「だめです」と言う立場でした。全部我慢してもらって。ただ、文化のソフト事業というのは、比較すればそれほどお金はかからない。ですから、ソフトはいいですよと言ってやってきました。

ここにきて集中的な投資をして、赤いKEBUSも走って、ようやく本格的に賑やかになったということですが、文化を大事にする政策は、以前より続けていますから、多分、職員はそれに慣れているのでしょう。また、現在、街中に旗が立っている「東アジア文化都市」という、政令指定都市でないやっとなかったようなことにチャレンジすることで、さらに気合が入っています。

担当課の職員だけでは不足するので、全然関係ない部署の人も手伝って欲しいと言ったら、若手職員30人から自主的に手が挙がって兼務職員になってもらいました。大変ですが、非常に楽しそうにやっています。お答えになっていないかもしれませんが、このような感じです。

**綿江氏** 資料を見ると、先ほどの文化職員となると200名以上となっていますが、私から見ると、豊島区では全員が文化の職員ではないのかなと思ったりもするのですけれども、きちんと文化担当の部署というものもある。おそらく、全国の自治体でそのような名前をつけているところはないと思うのですけれども、「文化デザイン課」という名称をつけてらっしゃいますね。ある種、多くの職員が文化に携わる仕事をやる中で、「文化デザイン課」はどのような役割を担うところと考えて良いのですか。

**金子氏** 現在は、「文化商工部」という部にまでになりましたけれども、最初は、今、「文化デザイン課」がやっているようなところから出発したという記憶です。それが、観光部門にも広げて「文化観光課」ができた、別でやっていた生涯教育などと合体して「学習・スポーツ課」となったり、所帯が段々大きくなってきました。でも、それほどコントロールタワーとして締めたりしていないですよ。自由に楽しくやっているのではないのでしょうか。でも、中心になってやっているのが、文化デザイン課というところですね。

**綿江氏** 文化政策については全部「文化デザイン課」でやりなさいというよりは、全庁的に文化をやっているものの調整役といった役割ということですかね。

**金子氏** いろいろなことを一つだけでやるのは大変だと思います。ただ、豊島区の場合は、横浜のデザイン室のように首長の直下にあって全体をコントロールするという路線ではきていないと思います。様々なものを受け止めて、やっていただいているのが現状だと思います。

**綿江氏** 今日のテーマであります「民間の力を活用した」ということで、基本的には行政と民間の連携ということなのですけれども、区長はお金が潤沢ではないので民間の力をおっしやっています。職員、お二人から見て、民間と連携が進むとか、進ませるために、お仕事の中で気を付けているといいますか、そういう部分というのはどういところなのでしょう。

**金子氏** 区長がご説明したように、貯金がなくても、防災のためには、新庁舎を建てなければいけない。では知恵を使おうということもそうですし、トキワ荘を再現するといったら全国からお金が集まった。これだけファンの方がいるのだ。「トキワ荘」は、いわば区民の無形財産ですから、このようなもともある財産、価値をもっと使えるだろうと思っています。施設を造って単に住民の方に渡すということではなく、熱い思いの籠ったファンのモチベーションが高い価値になっているわけです。そういうことを、多分これからも続けたいと思います。だいぶ人気は出ましたが、これで特別な都市になったとは思っていません。

財政面の話をすれば、普通の市や政令指定都市とは税制、財政の仕組みが違って、東京23区特有の財政調整の仕組みがありまして、どれほど有名な企業が豊島区にきても、直接区に固定資産税・法人税が入るわけではないのです。これからは企業との連携もやっていきたいと思いますが、そういう仕組みなもので、今後もいろいろ考えながら、やっていかなければいけないと思います。

**原島氏** 少し質問と変わってしまうのかもしれませんが、今、土木だけではないのですけれども、3本の矢ということで、放置看板、それからポイ捨て、それから客引き、この三つをまちからなくしていこう。そして、公共の空間、公園ですとか道路、この空間を、その機能に戻していこうということをやっています。これは、行政だけがやってもできるものではありません。警察がいて、そして地元がいて、そして行政がいる。要は、可能であれば区長も自ら出ていくという形でやっています。客引きなどは夜9時からやるわけです。それに職員も行き、地元も出て行き、そして警察も協力してという形でやっています。それによって、非常にきれいになったと。池袋は汚いとか、怖いとか、いろいろ言われ続けてきましたけれども、今、安全になったね、安心して歩けるねというまちがやっとなできたのは、行政だけではなくて地元の方の協力があってこそなのかなと思います。

また、やはり土木、安全なものを造ればいいと言っていたのがひと昔前、今はそれにデザインが入ってきます。人が喜ぶデザイン、橋一つとっても景観が重要ということになってきています。その辺が、やはり行政も変わってきている。そして地元もそういうものを求めています。まちが変わってきて、そして人に喜ばれるまちができたのかなと思っています。

**綿江氏** 豊島区の職員は、ものすごく泥くさい動きをしますよね。あまり庁舎にいないというか、暇があればまちの中に出て行っている。多分、区長がそうだからそうせざるを得ないところもあるのでしょうか。「お前、なぜ（庁舎に）居るのだ」と怒られるのだと思うのです。城所さん、その辺のボトムアップという話ではあるのですが、豊島区の振る舞いが連携につながっている部分などあるのでしょうか。

**城所氏** はい。まさに地域と豊島区の職員の方の距離が近いと思います。例えばこの庁舎、これほど立派な庁舎ができました。2,000人の職員が働いています。でも、職員食堂がないのです。職員は、外に飯を食いに行けです。区民に直に触れ合え。これほど立派な庁舎を造ったら、本当は美味しい職員食堂でご飯を食べたかったと思うのです。

**金子氏** はい、私は、欲しかったです。

**城所氏** というくらい。本当にまちに皆さんが出てくださっている。まちに出れば、どこかに熱をもった人たちがいる。あの人たち、こういうことをしたがつているというアンテナが張れます。そういう意味で、非常に地域に対するアンテナがよく張られているのが、豊島区の職員の皆さんだと思っています。先ほど言いましたけれども、本当に朝から夜中まで働いていますから。もうブラック企業だと思います。でも、そのために区民も信頼感を寄せられると思います。

**綿江氏** 最後に、課題をお伺いしよう思っているのですが、多分、豊島区の職員の方はものすごく大変なんだろうなと思います。職員数が減ってきておりますが、その中で色々な新たなお仕事がどんどん湧いてきてという形になってきて、その辺で、何か効率化はされていますか。

**金子氏** 効率的にやるのに、今、AIやRPAを使うとかということはもちろんやろうとしていますし、以前から、委託や非常勤化など、外部化も相当やってきたので、もう人員は減らせるところは少なくなっています。人口も業務も増えて、職員を減らす計画でいいのか、働き方改革も含めてきちんとやらないといけないと思います。

役所の外の方々と一緒に事業をやるということは、これまで当たり前のようにやってきて、それで慣れていていると思います。ただ、お任せ過ぎは拙いので、本来役所がやらなければいけないようなところをきちんと戻すということも若干出てきています。そのためには人がいるので、定員管理計画などは来年の基本計画の見直しの中で見直すことになっています。

**綿江氏** 今おっしゃったように、豊島区は外部のパートナーづくりが非常にうまく思います。職員数が多いわけではないので、例えば東アジア文化都市という事業をやる

のは大変なのです。ほかの都市は、基本的には職員でチームをつくるのですけれども、豊島区の場合は、はじめの企画の段階から私がコンサルということで関わらせていただいて、それから職員と、アートネットワーク・ジャパンというNPO団体の職員が事務局として一緒に構成されてきました。だから、職員も、ある種外部の人も分け隔てなくパートナーだよねということで体制をつくることになれている部分もある。なるべくほかのパートナーを使って回していく。これが、けっこう豊島区の特徴かもしれないですね。

最後に民間企業のお二方、基本的にはお話しいただいた内容というのは、豊島区と直接一緒に行っている内容ではないかと思うのですが、こういう取り組みを進められるにあたって、豊島区の動き方であったり、そういうもので何か後押しになったりする部分とはどういうところでしょうか。

**上村氏** 先ほど、区長も夢という言葉は何度も出されてきましたけれども、どちらかと言うと面と向かっていろいろな説明を受けて、いろいろなお話をしてということは、あまりスピード感がないし、必要ないと思うのです。ただ、私たちの会社で言うと、半期に1回、経営陣と改装会議をします。そのときに、例えば池袋マルイだったらどういう店にしたいのだということを併せて考えながらつくっていかねばいけません。豊島区がすごいのは、情報の発信力と共有性がすごく高いところなんです。その夢というのはこういうものだということも伝えてくれていますし、その細かいものも、資料も全部見られるということもありますし、改装会議のときに私が使った最初の資料の表紙が、あそこのピンクの旗のアニメの絵なのです。あれを表紙にして、こういうまちだからこういうお店にしたいのだと。要は7階のフロアをもっと栄えさせたいのだということをもって改装会議に入っているんで、一生懸命汗をかき足を運んでということよりも、大きい考え方の夢はこうなのだよというものだけ教えておいてもらい、その情報が細かく自分たちで使えるように、情報公開の発信をしっかりしてもらえると、すごく動きやすいと思います。と私は思います。

**平田氏** まったく同じです。我々も先ほど改装という話をさせていただいて、やはり莫大な費用を経営に説明するという段においては、やはり我々がこの先どうやって勝負していくのかというところが腑に落ちるといのでしょうか、そういう形で説明していかねばいけないというときに、やはり豊島区からいろいろと説明会の連絡が会社にくるわけです。我々、事業戦略という立場で聞きに行くと、すごい資料があり、高野区長が1時間くらい話のです。そうすると、もう圧倒されて、我々も夢に乗っかるみたいなの。やはり、民間企業としては、我々にとって何かチャンスになるようなものがないか、当然アンテナを出していますから、そこにいかに引っかかるかどうかという

ところで、豊島区はすごい発信力があつたのかなと。当然、我々は、この文化事業、アニメ、コラボするだけで企業が成り立つとは当然思っていないのですけれども、ただ、一つ特徴は出せるだろうと。その特徴をいかにほかに転換させるか。先ほど、文化事業からそれ以外の子どもにやさしいまちづくりとか、そこに転嫁していくのだという区のお考えもありましたけれども、企業としてもやはりそういう考え方ですので、そういう意味では、やはりまちとともにないと。特に我々はホテルなので、ホテル来るだけだと何も面白くもない。選ばれるには、やはりまちが面白くなければいけないとか、近くにそういう劇場があるからとか、そういう理由がなければいけないとなると、すごくとんがった理由があつたというところで、大変ありがたくは思っております。

**綿江氏** 行政は言っていることがころころ変わるからと一般的には思われたりもするのですが、多分、高野区長は、その辺、ずっと同じことを言っているということは、企業との連携の中では非常に効果的に機能している部分なのかなと思います。

総括になるか分からないのですが、私は、豊島区の仕事をしています中で、文化政策に力を入れている都市だという言葉に少し違和感を持つことがあります。豊島区は文化のための文化のことをやっているわけではなくて、先ほどおっしゃったようにまちづくりをやったり、福祉であったり、子育てであったり、いろいろなものに波及していて、必ずしも文化系の部署だけがやっているわけではないと。国の法律で、一昨年、文化芸術振興基本法から文化芸術基本法に法律が改正されて、振興が取れました。この趣旨としましては、申し上げたように、教育とか産業とか観光とか福祉とか、いろいろな分野に文化の波及を考えようと、連携を考えようという話なのですけれども、これは多分、皆さん、どの自治体も困られている部分なのではないかなと思います。このミッションを、文化担当の部署が背負われているのが多くの自治体の現状なのではないかと。法律が言っていることというのは、文化を中心にいろいろな政策を展開する、この可能性を探りなさいということでもあるので、そういう意味で言うと、豊島区のあり方はそのその突破口の一つのパターンになるのではないかと思っています。ありがとうございました。

#### ○東アジア文化都市2019豊島の紹介

##### 豊島区国際文化プロジェクト推進担当部長 小澤弘一

**小澤氏** 皆さん、こんにちは。豊島区の小澤と申します。東アジア文化都市の担当をさせていただいております。今、いいパネルディスカッションで、ここで終わればよかったと思ひながら立っておりますが、時間をいただきましたので、今、豊島区が開催しております東アジア文化都市についてお話をしたいと思います。

先ほど来のお話の復習にもなりますけれども、高野区長が区長に当選しましたのが平成11年、1999年でございますし

た。その当時、まだ文化によるまちづくりをするのだという話をされておりました。区長も言っていましたけれども、ハコモノを造る予算が何もなかったので、とにかく人が頑張つて文化を進めていくしかないというのが実情であつたのかもしれませんが、平成15年に、昭和61年くらいにつくつた以前の基本構想が作り直しの時期になりまして、そこで初めて「伝統文化と新たな文化が融合する文化の風薫るまち」というものを基本方針に入れました。それ以来、その前からもそうでしたけれども、文化によるまちづくりを進めてきたということです。

やはりお金がありませんでしたから、とにかく豊島区は、城所さんのような方たちと手を取り合つて文化を進めるしか道はなかったということもあります。また、この当時は人口減少が進んでいて、子どもの数が少なくなったということから、小学校、中学校の統廃合が進んでおりました。今、また逆転現象が起きてどうするのだという話にはなっておりますが、西巣鴨にありました小学校が一つ廃校になって、1年か2年、近所の私立高校に貸したりしたということがあつたのですが、ほかにはなかなか使い道がないところがありました。そこで、先ほどもお話がございましたけれども、アートネットワーク・ジャパンというNPOが、なかなか適当な場所がなかったということから、この小学校をお貸ししてできたのが、にしがも創造舎というわけです。今でこそ廃校を使った文化施設を行うというのは珍しくありませんが、その当時は、まさに走りだったと考えております。

そうしたことや、城所さんのような方たちによる地道な地域での文化活動があつて、また、池袋周辺ではさまざまなお祭りがあつたということで、豊島区は、行政が主導してお金をかけて文化施策をするのではなくて、地域の方やたくさんある大学等と連携をしながら文化施策をします。行政だけではなくて、大学、地域住民との連携による文化活動をしているということで、平成20年度の文化庁長官表彰をもらったということになります。

その後もお金がない中でもやり繰りしながら文化施策を進めてきたのですが、2014年、東京都23区の中では唯一、豊島区が消滅可能性都市の指定を受けてしまった。転んだ時にただで起きないのがうちの区長ですので、どうやって立ち上がるかということで、関係の部課長を集めました。これまで文化を施策の中心としてやってきたのだから、何か新しいキーワードをつくつて文化政策をしようということで決まったのが、2015年に発表した「国際アート・カルチャー都市構想」であつたわけです。

2015年、平成27年6月に「国際アート・カルチャー都市構想」を発表いたしました。2014年に横浜で始まった東アジア文化都市が2年目の新潟市にバトンタッチされていたときだったので、10月に日仏中韓文化都市会合というものがあるもので、そこに行った職員というのが私のことなのですが、ナント市の副市長が来ていました。フランスのナント市というのは、造船業が不況になった経緯で鉄さびで真っ赤になっていたまちが、文化行政を行うこ

とによって一転して、今では文化創造都市の見本のようになっている。その文化担当の副市長が、1年の半分以上は外国に行って講演しているというような状態でした。その副市長が来て言っていましたけれども、先ほどの文化にかける人員と予算の話にも通じるのですが、人員と予算の半分以上を文化にかけていると言うのです。あり得ないだろうと普通は思うのですが、実は、道路もただ単にアスファルトを敷くのではなく、橋もただ単に橋を架けるのではない。それが景観にいかにもマッチして、あるいは美しい道路を造るかということと全部文化にカウントしているのだということです。デザイナーを部署に雇って入れているのだということでした。この話とは関係ないのですが、先ほどの話がありましたので、少し脱線いたしました。

新潟の東アジア文化都市、あるいはこのときの日仏中韓文化対話が、すごく大きなイベントだったのです。その担当者に、なぜこれほどのイベントができるのかと聞きましたら、文化庁が随分支援をしてくれるのだと。今、東アジア文化都市というものをやっているとねという話で、そこから今度は東アジア文化都市とは何ぞやということ調べ始めました。

今まで横浜とか新潟とか京都とか、この段階では次の奈良と京都が決まっていたけれども、そういうところに豊島区ができるのだろうかということで検討いたしました。豊島区は、京都や奈良のような豊富な文化資源を有する都市とは違うのですけれども、豊島区にはここに記載してあるようなさまざまな文化、多様な文化がこの狭い地域にあると。なおかつ、住民と一体となって、一体となつてと言うと少し言い過ぎのところがあるかもしれませんが、多くの住民の方がその地域の文化、あるいは地域のお祭りに一生懸命になっているという特色があることなど、豊島区独自ともいえる特性もあることから、翌年の7月、8月に発表いたしました「豊島区国際アート・カルチャー都市構想 実現戦略」の中で東アジア文化都市というページをつくって、なおかつその段階で2020年のオリンピックの前の年にやることに意義があるのだということに、庁内コンセンサスを得たうえで発表いたしました。そして2017年になって担当課長をつくって、プレゼンをして、応募したということです。

8月に決定をいただきまして、さっそく10月には1,000人を超える参加者を集めて決定報告会を行いました。行政がお金を出して大きなイベントをやるのではなくて、区民が総力を挙げてやっていくというのが豊島区の売りだということと文化庁のプレゼンでもいたしましたので、とにかく区民の方に周知をしようと、そして区民の力を集めるということしか考えていなかったと言ってもいいかもしれません。10月には決定報告会をやり、なおかつロゴの公募も行いました。そして今、東アジア文化都市のロゴがこれですけれども、豊島のTにも見えるし、伝統工芸である組み紐にも見える、日中韓の3か国にもあるし、この結び目は強い絆を表している。また、その結び目をいろいろな色が、多様な人がいて躍動感のあるというような意味合いが

あるということで、このロゴが豊島区の東アジア文化都市のロゴとなっております。

2018年になりまして、実行委員会には区民の方にたくさん入ってもらおうということで、先ほどから出ておりましたアート・カルチャーの特命大使の方たちを土台にしながら推進委員会を組織しました。さらに、マンガ・アニメと、祭芸芸能と舞台芸術をやろうということで、三本の柱といたしました。8月にハルピンで正式に決定いたしました。日本と西安、西安というのは昔の長安です。三千年に渡る、恐らく東アジアの都は俺だと思っているところだと思えますけれども、そこと韓国の仁川広域市（インチョン広域市）という三都市が揃いました。11月には、また1,500人の区民の方を集めまして、東アジア文化都市のシンポジウムを開催いたしました。2018年ですから、まだ2019年で東アジア文化都市は始まっていないのですが、もうこの段階でお祭り気分という形になっております。そして、12月には金沢で引継ぎを受けました。

行政がやるだけではなくて、区民の方に参加してもらおう、自分たちで企画をしてもらおう、その企画に対して行政がお金を出しましょうということで、パートナーシップ事業で発信プログラムと全員参加プログラム、2種類の要件をつけて募集を行いました。発信プログラムは、27の応募をいただいて12の点数を採択いたしました。全員参加プログラムは、65の提案をいただいて、その中から55件を採択いたしました。もう一つ、うちの東アジア文化都市の正規の職員は、私を入れて10人、中国語と韓国語ができる非常勤を入れて二人、そして財団とアートネットワーク・ジャパンを入れて事業体をつくっているのですが、それだけでも足りないし、やはり我々の部署だけでやるではいけませんので、特命チームということで職員の募集を行いました。事業の計画をするだけではなくて、さまざまな事業を自分で実施し、何かのイベントがあるとコスプレまでやってしまうということです。そして2月になって、うちの開幕式があり、1万人で歌う私は未来のプロジェクト等をやりながら、広報、あるいはさまざまな出版物、あるいはまちなかにロゴを溢れさせる。工事現場の仮囲いも有効に使いながら、東アジア文化都市の目標や、記念事業をやるということをアピールいたしました。

さらに3月に西安の開幕式であり、4月には仁川広域市の開幕式がございました。

次、5月には踊るインチョンということで、韓国との交流事業を行い、8月には中国西安での唐詩を書くというイベントを行いました。9月には、仁川広域市の生活文化祭ということで、知久さんに行っていました。9月には、我々行政が文化団体だけを連れて行くのでは交流になりませんから、150人から成る市民の方、区民の方を西安と仁川広域市に行っていていただいて、向こうの方たちとの交流をしてみたい。東アジア文化都市の目的としては、ただ単に文化交流をするだけではなくて、文化、文化関係イベント、あるいは観光、あるいは産業の発展が持続的につながることが最大の目的ですから、それを達

成するためには、やはり区民の方のそうした理解、あるいは他都市への理解がないと進まないということから、市民による訪問団を派遣したわけです。

この後、さまざまな取り組みをさせていただきます。11月の頭には、Hareza池袋を中心に、マンガ・アニメの祭典である池袋アニメタウンフェスティバル、そして11月下旬には、ブリッジズ・トゥ・バビロンというコンドルズのもの、宮城聡さんのマハーバーラタを連続して公演しながら、11月24日には閉幕式典を開催するというでございます。創造都市ネットワークの皆さんには、ご案内を差し上げると思いますので、ぜひご覧いただければと思います。

駆け足で恐縮ですが、以上です。ありがとうございました。



## CCNJ 現代芸術の国際展部会 in 宇部市 担当者ミーティング

日時：令和元年10月17日（木）

会場：宇部市文化会館

### ○挨拶 宇部市長 久保田后子氏

宇部市長の久保田です。皆様、ようこそ宇部市へお越しいただきました。

CCNJ創造都市ネットワーク日本、「現代芸術の国際展部会 in 宇部」及び「中国・四国ブロック分科会」の開催地として宇部市を選定していただき、誠にありがとうございます。

「緑と花と彫刻のまち宇部」、皆様を心から歓迎申し上げます。そしてまた、本日の基調講演をいただきます多摩美術大学の建畠学長先生におかれましては、本市のUBEピエンナーレ選考委員を2007年から7年間お引受けいただいた時期がありまして、大変ご縁をいただいております。本当にありがとうございます。

今日は、市民の皆さんも多数来ていただいておりますが、各地で、特に中国・四国、そして札幌市、埼玉県、神戸市、香川県、それから事務局を担っていただいておりますアーツカウンシル新潟や横浜市の皆様をはじめ、日本各地で現代芸術、アートによるまちづくり、さまざまな取組みをされていらっしゃることに心から敬意を表する次第です。

今日は、地方都市の宇部でこのような会を開催していただきますことを光栄に存じますとともに、ぜひとも宇部が歩んできた芸術文化とまちづくり、人々との関係性、そういったものを皆様にぜひ知っていただき、これからの私たちの国が直面する人口減少、少子高齢社会や共生社会の実現など、大変な課題を多く持つ日本ですが、文化や芸術がこのような課題にどのような役割を担うのかといった観点からも、また皆様からのご示唆をいただければと願っています。

この後、担当の部長や担当学芸員が詳しい説明をしますが、本市が歩んできた文化のまちづくりが、まさに原点ではないかとも思っております。

1950年代、私たちの街は公害で大変苦しんでいました。街の復興、心の復興、そこに芸術文化がどれほど大きな役割を果たしてきたか。

それが今日まで続いてきたアートによるまちづくりへの転換でもあったわけですが、最初からアートのまちづくりをやろう、心豊かな芸術で街を満たしていこうといったことが前面に出たわけではありません。

何とかこの煤じんの降る街をきれいにしよう、そして戦後の混乱期の中、街を覆う暴力や少年非行の横行など、人の心も荒廃してしまったこの街を何とかしようという「ふるさと愛」から人々が募金を始め、花や緑を植えていこうとしたのがきっかけとなりました。

人の心がすざんでいるときは、花を植えても街路樹の苗木を植えても、翌日行ってみれば踏まれたり抜かれたり、

なかなかうまくいかない。そういう中で、少し募金に余剰金が出たときに、小さな彫刻のレプリカを購入して、街の中心部にある駅前の噴水の中に飾りました。『ゆあみする女』という本当にしなやかな美しい彫刻です。1950年代、日本人はそういったものを街の中で、特に地方都市で見ることが少なかったわけです。

そういったことから大人気になって、人々がそこに集まり、スケッチをしたり、いろいろな姿が見えてきて、もしかしたらこういうものが街に必要なのではないかという素朴な発見があったわけです。

それならば、もっともっとたくさん、街のあちこちにこういった美しいものを飾れないだろうか。しかし、宇部の街にこういうものを作る人もいない、買ってくるお金もない。どうしようかと。そこで、みんなにお金を少し寄附してもらって、募金してもらってそのお金で買うことができないだろうかと考えたわけです。

そして、展覧会をやれば作品を出してくれる人もいるのではないか、作品は展覧会をやれば集まる、少し必要なお金は募金でと。本当に素朴な文化によるまちづくりのスタートです。そして大変良い結果を得たわけです。

これが、1961年に初めて開催した「現代日本彫刻展」です。

会場のときわ公園では、今、UBEピエンナーレ（現代日本彫刻展）第28回展が開催中です。大変素晴らしい作品が並んでおりますが、第1回目の公募展のときは公園の斜面にブロックを並べて作品を飾るといった写真も残っておりますが、それが最初の彫刻の公募展でした。

まちづくりに芸術や文化、人の心の復興、あるいは街の再生に文化というものがどれほど大事なのかということが少しずつじわじわと広がっていき、街を彫刻で飾ろう、緑や花で埋めていこう、そういった運動に発展していくわけです。

『本市は「緑と花と彫刻のまち」がキャッチフレーズです。』と聞くと、とても平凡に思われるかもしれませんが、今、どこの都市でも緑があり花があり、街にたくさんのアート作品のある時代になったと思いますが、宇部はそういったまちづくりの本家本元と自負しております。しかも、戦後の非常に困難な時代に芸術文化から道を開いていった都市です。

今、賑わいのために、街の活性化のために、いろいろな目的で各地にあるいは世界に芸術文化祭があります。本市の彫刻展も間もなく60周年になるわけですが、その間にはやはり停滞期があったことも否めません。そしてこの10年は変革期として新たな取組みに着手しています。長ければ良いというものではなくて、長い間にいろいろな社会の変化、市民の価値観の多様化などの中で、今日まで続いているUBEピエンナーレ（現代日本彫刻展）は、文化芸術や市民社会の進展の歩みであり、宇部の道のりでもあると、そのように考えているところです。

2019年度CCNJ「現代芸術の国際展部会 in 宇部」また、「中国・四国ブロック分科会」を宇部で開催していただき

ますことで、皆様とこうした宇部の歴史を共有していただき、これからどういふことが必要なのかを考える機会になればと思います。

今日、明日、どうぞ皆様にとりまして有意義な2日間になり、そしてまた、日本全国で創造都市のネットワークが広がり、人口減少社会への対応や産業経済と文化芸術との融合が日本各地で進んでいくことを心から祈念申し上げ、歓迎のごあいさつといたします。

本当に皆様、ようこそお越しいただきました。ありがとうございます。

#### ○挨拶 文化庁地域文化創生本部 調査役 後藤幸宏氏

皆さん、こんにちは。文化庁地域文化創生本部の後藤でございます。本日は、宇部の皆様、また全国各地からお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。現代芸術の国際展部会の開催に当たりまして、一言ごあいさつ申し上げます。

まず、このたび、台風19号で被災された地域の皆様に対しましてお見舞いを申し上げますとともに、1日も早い復旧復興を心よりお祈り申し上げたいと思います。

本国際展部会の開催に多大なご尽力をいただきました、開催地である久保田市長をはじめとして宇部の皆様、そして本日で講演をいただきます建畠哲先生、創造都市ネットワーク日本の顧問であります佐々木雅幸先生、そして関係する皆様に、まずは感謝を申し上げたいと思っております。

さて、現在、ここ宇部で開催されておりますUBEビエンナーレは、今年で第28回を迎えられまして、国内では最も歴史ある大規模な彫刻展です。また、早くから芸術が人々の豊かな心を涵養するという、本質的あるいは社会的な価値に着目されまして、まちづくりにアートを取り入れた先駆的な取り組みとして高く評価されてきているところです。また、彫刻家の登竜門として国際的にも知られておりまして、最先端の作品がそろそろ、国内最大級のコンクールとしても注目されているところです。

さて、文化庁では、一昨年平成29年6月に施行しました文化芸術基本法及び昨年3月に策定しました文化芸術推進基本計画において、これまでの文化芸術政策をさらに一層充実しまして、それからまた観光やまちづくり、国際交流、産業等の関連分野における施策を十分に取込みながら、民間等との協働によりまして、文化芸術により生み出された価値を承継、発展、それから創造に活用しているところです。また、去る8月末に提出しました国の概算要求においても、文化芸術推進基本計画に基づいて、文化芸術の創造活動や、あるいは人材育成の推進、また、子どもたちが文化芸術に触れる機会の充実、それから障がい者芸術の推進を図る取り組みなど、文化芸術の多様な価値を生かしまして、地域あるいは日本の文化芸術の振興を図るための必要な経費を計上しておりまして、前年度から約208億円増の1,275億円を現在要求しているところです。

そしてまた、2020年の東京オリンピック・パラリンピッ

クにおきましては、東京都におけるスポーツの祭典ということではなく、日本人が自国の文化の素晴らしさを再発見しまして、また日本文化の魅力を世界に発信する貴重な文化の祭典でもあります。日本全国で開催される文化プログラムを通じまして、2020年以降につなぐレガシーを創出しまして、文化芸術立国の実現を文化庁として補助しているところです。また、文化庁は2021年度中に関西、京都へ移転することを予定しております。これを機に、新文化庁としてさらに地域の皆様にとって身近に感じていただけるように努めてまいりたいと考えているところです。

最後になりましたが、本部会の開催について、新たためて感謝申し上げますとともに、皆様方の取組みの一層の発展を祈念いたしまして、私からのごあいさつとさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

#### ○挨拶 CCNJ顧問 佐々木雅幸氏

皆さん、こんにちは。佐々木でございます。

10月に入りまして、山形市に招かれました。山形市は2017年の暮れにユネスコ創造都市ネットワークの認定を受けたところです。その認定の分野が映画というジャンルです。というのは、山形市の国際ドキュメンタリー映画祭が今年で30周年なのです。それで、認定後初めての映画祭ということで、大変力が入っております。

そもそも、ユネスコはどのような観点から創造都市ネットワークを世界的に呼びかけたのかをふり返ってみますと、21世紀の初頭、グローバル化が急に進んだときに、文化が多様化しないでむしろ画一化するのではないかと危惧されたことがあります。それは特に映画の分野で、例えば、ハリウッドが一人勝ちをしましてシネマコンプレックスが全世界に広がる。そうするとフランスやイタリアの映画産業が潰れてしまい、ヨーロッパの映画が見られなくなってしまいます。これは人類にとっても不幸だと。つまり、文化的表現の多様性をなくす、あるいは画一化する方向ではなく、むしろユネスコはグローバル化の中にあっても文化的表現を豊かにすると。そういう観点から、世界の各都市に創造都市のネットワークをやっていただきました。

そのときに、国ではなく都市に呼びかけたことが新しいところです。都市こそ文化の個性的な表現の一番基礎的な単位です。ですから、都市の文化というのは、都市にとってとても大事な本質的な要素です。その文化の創造性というものがあって初めて市民のプライドに、最近、シビックプライドと呼んでいますが、結びついていくということで、ユネスコがそれを呼びかけました。

日本では（ユネスコの創造都市ネットワークに加盟している都市が）8都市ありまして、今、世界で180都市です。ぜひ、この流れを日本国内でも広げたいと思ひまして、当時の文化庁長官であった近藤誠一先生に相談しまして、2013年1月13日に横浜で創造都市ネットワーク日本の設立を迎えたことになっております。それから6年たち、創造都市ネットワーク日本の加盟都市数は111市町村まで来て

おります。宇部も早い段階から参画いただいておりますので、できればユネスコにもチャレンジしていただきたいと思っていますところでは。

さて、山形から帰ってまいりまして、今度は金沢に行つてまいりました。金沢市は、今から10年前にユネスコのクラフト&フォークアーツという分野で認定を受けました。実は、クラフトの分野では世界初の認定を金沢が受けております。それから10年経ちまして10周年記念ということで、世界180の内の37都市がクラフト&フォークアーツに属しているということですので、その記念のシンポジウムを開催することになりました。たくさん市の市長が参加を予定されておりました。例えば、フランスは有名なリモージュという陶器で有名なところがあります。それから製紙で有名なイタリアのファブリアーノ、それからアメリカではサンタフェです。こういう欧米の都市が、ちょうど台風19号がもろに移動日に当たりましたので、ほとんどキャンセルになってしまいました。それで、当初の予定の半数しか集まらなかったのですが、こぢんまりと、しかし中身の濃い会議が行われました。今、国連がSDGsという17の目標を掲げて、2030年まで、地球が持続的に存続するようというので、全人類に向けて共通の目標を提唱しております。市長の胸にバッジがありますが、このSDGsというものをユネスコも文化芸術の側面からアプローチすることを考えております。日本の創造都市ネットワークにもSDGsに向けた文化政策を今後より強めていかなければいけません。

台風19号、去年は台風21号だったと思いますが、昨年、西日本が壊滅的な大きな被害を受けまして、京都ではたくさんの文化財が壊れました。今年は東日本がまた壊滅的なダメージを受けております。これは地球温暖化がもたらした、非常にコントロールが利かなくなっている自然の猛威です。これによって我々の生活がますます脅かされようとしているときに、文化芸術の側面から一体どういうことがアプローチできるかということを我々は考えざるをえない。改めて、会議参加者が半減する中で、身につまされて感じたことです。

そして、東京都豊島区で行われている創造都市政策セミナーにも駆けつけてきました。こちらは、東京オリンピック・パラリンピックの前年ということで、相当な勢いで劇場都市豊島、国際アート・カルチャー都市ということで取組みをさらにやっております。実は、現在の高野豊島区長が就任したときは大変な財政赤字でした。その財政赤字を再建する、特に文化で都市を再生すると決められて、それから20年近くの間大きな実績を残されました。豊島区長が就任されたとき、文化担当職員はわずか2名しかいなかったのです。全体の職員数を減らしながら文化担当職員を100名近く増やしたという素晴らしい実績があるのです。そして宇部。宇部は、今、改めて歴史を伺って、私ども感銘深かったのですが、約60年にわたる芸術文化による地域づくりというものを営々としてやってこられました。そんなにきらびやかではないけれども、着実に市民に支えられ

て持続してきたのは、まさに継続性、持続性ということでは日本の中で最も優れた実績の一つではないかと改めて感じているところでは。これから創造都市ネットワーク日本がさらに大きく飛躍することを考えたときに、大都市、あるいは歴史文化都市のみならず、さまざまなタイプの都市や農村で新しい、あるいは興味深い、あるいは先駆的なモデルを作っていく必要があるのだと思ひまして、ぜひ、今日明日、こちらでこの宇部モデルの持続的な発展の成功の成否は何かを一緒に考えてみたいと思ひます。

今日は、どうもありがとうございました。

#### ○事例紹介 UBEビエンナーレについて

**宇部市観光・シティプロモーション推進部 部長 庄賀美和子氏**

皆さん、こんにちは。CCNJ現代芸術の国際展部会の開催に当たり、全国からたくさんの方に宇部にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。ただいまご紹介いただきました、宇部市観光・シティプロモーション推進部の庄賀と申します。私の所属する観光・シティプロモーション推進部が担当しておりますのは、観光都市としてのプロモーションだけではなく、文化・スポーツ、そしてUBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）があります。

その関係もありまして、今日はUBEビエンナーレについて、そして宇部のアートによるまちづくりについて、短い時間ではありますが、説明させていただきます。

皆さん、この会場に来られるまでに市内に彫刻が展示してあったのをご覧になったでしょうか。

宇部にはたくさんの彫刻がまちなかに設置されています。その中の一つですが、これは市役所の近くにありまして、『SEED増殖』という大きなステンレスの作品になります。伊藤憲太郎さんという彫刻家の方の作品で、こういった大きな彫刻から少し小ぶりな作品まで、市内には彫刻がたくさんあります。

これは、市中心部の宇部新川駅の近くに展示してあります。多田美波さんという女性の彫刻家の作品です。

こうした野外彫刻が全部で200点、市内に展示してあります。その内の半分くらいがときわ公園に設置してあり、約100点については主として市の中心部に多く展示してあります。

先ほどからUBEビエンナーレという言葉 皆さんからたくさんおっしゃっていただいておりますが、UBEビエンナーレは、野外彫刻の国際コンクールで、入賞作品の一部を宇部市が買い上げるなどして、それをまちなかに設置することにしてあります。

UBEビエンナーレについては1961年から始まっておりますので、そのころからまちなかに少しずつ設置を始めてあります。そういったことから、アートによるまちづくりの先進地、先駆けの地と自負しております。

では、なぜ宇部で野外彫刻の国際コンクールが始まったか、そしてそれを設置するようになったか、そういった歴史について説明させていただきます。

宇部は明治以降、石炭産業で発展しました。しかしながら、第2次世界大戦で街のほとんどが焼け野原となりました。

これは当時の罹災状況を記したものです。市街地を中心に多くの建物が被災しましたが、幸いにも沿岸の工場地帯は被害が少なかったということもありましたし、何よりも街を再び復興させようと、再建にかける市民の熱意、努力がありました。

そしてまた、戦後の復興景気もありましたので、宇部はそういったことから順調な復興を遂げております。

こちらは宇部市の戦災復興計画図です。大きな道路を整備しまして、街は戦災から立ち直って大きく変わろうとしているところがよく分かると思います。戦後の建築やインフラ整備のラッシュ景気にも支えられまして、宇部の工業地帯は本当に急速に発展しました。

その代わりに、降下煤じんなどの公害問題が発生してまいりました。この写真から、もくもくと上がる煙をご覧になっていただけたと思います。工場から排出される煤じんの公害に悩まされていました。

1951年、降下煤じんの量が55.86トン、これは1平方キロメートルに一月に降る数字ですが、それほど多くの煤じんが降りまして、街は灰に覆い尽くされているようなことになりました。

これは当時世界一といわれた、英国のマンチェスターをしのぐほどでした。

この煤じんをどうにかしないといけないということで、企業、行政、大学、そして市民が一体となって公害克服をしました。これは、今では環境の改善対策として有名となりました「宇部方式」という呼び名ですが、これにより対策に取り組みました。

宇部方式による環境改善と同時に始まったのが花いっぱい運動、そして花壇コンクール、緑化運動などです。

灰だらけの街をきれいに掃除して、自分たちの住む街を自分たちできれいにしようという市民が、新しくできた道路に花を植え始めました。これは先ほど市長があいさつの中で申しましたが、植えては抜かれ、植えては抜かれの繰り返しだったと聞いております。そういった運動を気長にやってきました。

その運動の中で、花をどのように資金調達したかといいますと、市民から募金を集めまして、花の種を買って、それを市民が植えるという花いっぱい運動をやりました。これも先ほど市長が熱く語っておいりましたので、覚えている方もおられると思いますが、募金で余った資金で、写真の中ほどに、こちらに背を向けておりますのが、ファルコネの『ゆあみする女』という彫刻です。ただし、これはコンクリート製のレプリカです。今から言うとうちに粗末なものであったかもしれません。

そして、小学生がこの彫刻をスケッチすることがたびたび見受けられはじめ、これが大きくニュースにも取り上げられたりして、市民の中から街を彫刻で飾ったらどうだろうという声が高まりまして、こういった彫刻を設置する運

動が始まりました。

花いっぱい運動、そして緑化運動からこうした彫刻設置事業が起こることになり、これが後に国内の多くの美術評論家や建築家、彫刻家を巻き込んだ国内初の大規模な野外彫刻展、UBEビエンナーレへとつながっております。

これは第1回の野外彫刻展になりますが、場所はときわ公園です。ときわ公園の一角をブルドーザーで平らにしまして、作品はコンクリートブロックで作られた台座に載せるという、今では少し考えられないような展示をしております。

本日、基調講演に来ていただいている建畠先生のお父様、建畠寛造先生も第1回宇部市野外彫刻展をはじめとした初期のUBEビエンナーレに作品を出展していただいております。

変わりました、これは今年9月29日に開幕しました第28回UBEビエンナーレの様子です。今回は4か国の彫刻家による15点の野外彫刻が宇部市ときわ公園を彩っております。現在では、UBEビエンナーレは世界でも歴史のある野外彫刻展として国内外から高い注目を集めておりまして、前回、来場者も9万人を超えるまでになっております。

さて、UBEビエンナーレ終了後、先ほども申し上げましたけれども、上位入賞作品をはじめとして、市内各所に彫刻が移設されます。この作品は、第26回UBEビエンナーレで市民賞を受賞した浅野芳彦さんの『いしずえ』という作品になります。作家から寄贈していただきまして、市内の中学校に移設されています。

宇部では、このように展覧会としてのUBEビエンナーレ、そしてまちづくりとしての彫刻設置事業を並行して行っております。彫刻を記念碑やモニュメントではなく、まちづくりの一環として設置しました。

これは宇部が最初だと考えております。現在でも国内各所で行われているさまざまなアートによるまちづくり、そういった事業の先駆けになっていると思っております。

さて、ここからは、UBEビエンナーレの関連事業についてお話ししたいと思います。

宇部では、UBEビエンナーレの開催を軸として、さまざまな取り組みを行っております。アーティストによる題材制作の一部をアーティスト・イン・レジデンス方式で、彫刻家が宇部に滞在して制作されています。

そして、市民のボランティアによる彫刻清掃、そして2年に一度開催される本展の前年に行われる模型展の模型を活用して、国内外でUBEビエンナーレのPR展などを開催しております。

また、特に、宇部独自の取り組みとして、彫刻教育の推進を行っております。小学校4年生については全員がUBEビエンナーレの鑑賞や説明を受けたりしております。こういった彫刻を軸にした、多岐にわたる活動を行っているところです。

さて、「改革の10年」です。UBEビエンナーレは2011年に半世紀、50年を迎えることになりました。その前の2009年からなるのですが、やはりUBEビエンナーレを世界に

発信しないといけない、そして国内でも他の地域のビエンナーレ、トリエンナーレに比べてなかなか名前が知られていないということで、積極的にPR展を開催しなければいけないということで、「改革の10年」と名付けまして、さまざまな取組みを行っております。

ここに掲げているものは本当に一部なのですが、市民にUBEビエンナーレというものを考えていただく会を発足させたり、瀬戸内国際芸術祭との連携協定を結んだり、東京の渋谷ヒカリエでPR展を開催したことをはじめとして、今、姉妹都市になっていますが、スペインのカステジョ市でもPR展を開催するなど、さまざまな取組みを行い、国内のみならず、世界各地でPRを進めているところです。

それと併せまして、UBEビエンナーレは公募展としていろいろな取組みを行ってまいりましたが、やはりこのままではいけないということで、アーティスト・イン・レジデンス部門、そしてプロポーザル部門という新しい部門も作っております。これは第28回からの取組みですが、さらなる展開をしようということで、そういった部門を作っております。

アーティスト・イン・レジデンスでは中心市街地、中山間地域、ときわ公園という三つの会場でそれぞれ作家が滞在しまして、市民と交流しながら作品を制作するという取組みです。プロポーザル部門はあらかじめ設置場所を指定しまして、作品を制作する作家を選定し、ときわ公園の近くにある高校に設置するという前提で今回の第28回展で募集いたしました。

昨年実施されました、アーティスト・イン・レジデンス部門についてご紹介します。

まず、中心市街地においては、今まで、UBEビエンナーレは彫刻ということでやってまいりましたが、このアーティスト・イン・レジデンス部門については彫刻以外にも広げようということで、茨城県取手市の「葛谷春光堂」さんによる、まちなかを舞台にした劇を市民と一緒に路上で上演するという新たな取組みをしております。

それから、中山間地域では、千葉県船橋市よりお招きした豊福亮さんによる巨大な迷路、これも彫刻ですが、迷路を制作しております。

そして、ときわ公園ではノルウェーのエレナ・レデリーさんにより、子どもたちと一緒に宇部の海をテーマにした彫刻作品の制作をしております。

いずれの制作もテーマ、そして表現方法もさまざまでしたが、多くの市民が参加しました。特に、ときには制作そのものにも市民が関わりながら活動したということで、これまでのUBEビエンナーレにはなかった多くの交流、そして発見が生まれることになりました。

最後に、UBEビエンナーレ開催期間中に実施している宇部市全体の芸術イベント、UBEアートフェスタについてご説明させていただきます。UBEビエンナーレ開催期間中に中心市街地、そして中山間地域を会場として、彫刻だけでなくさまざまなジャンルや表現の発表を行うイベントを開催しております。そして、宇部市全域でアートを楽しむ取

組みをしているところです。

今回の第28回展では、中心市街地で、宇部市出身でもある庵野秀明さんの作品などの展示会（「アンノヒデアキノセカイ×海洋堂エヴァンゲリオンフィギュアワールド」）を実施したり、中山間地域では、アーティスト・イン・レジデンスで制作された巨大な迷路アート、「UBEラビリンス」を活用したイベントが開催されまして、この期間は宇部市全域がアートで彩られることになっております。

以上、短い時間ではありましたが、宇部の彫刻事業、そしてUBEビエンナーレの概要についてのお話をさせていただきました。UBEビエンナーレは、先ほど申し上げましたが、宇部市民が自ら住んでいる街の環境を改善しようとした「緑と花のまちづくり」からスタートしました。

人が人として生活する上での表現、そして豊かな市民生活にはアートといったものが必要不可欠であるということ、まちづくりに人と都市との関係性、そして人と自然との関係性が重要であるということ、現在の私たちにも教えられていると考えております。

これからもUBEビエンナーレ、世界で最も歴史のある野外彫刻の国際コンクールですが、アートによるまちづくりを行う街としてさらなる発展、そして新しい展開を考えておりますので、これからもどうぞUBEビエンナーレをよろしく願いたします。

どうもありがとうございました。

#### ○基調講演 「地域に受け入れられる アートフェスティバル」 多摩美術大学 学長 建畠哲氏

ご紹介いただきまして、ありがとうございます。今日は、各地で文化行政の中心に携わっていらっしゃる方々、文化庁の後藤さんや顧問の佐々木先生がしたところで、私のような行政の門外漢がお話しさせていただくのは少し面はゆい気もするのですが、これまで、いろいろなアートフェスティバルに芸術担当の一人として携わってきた経験を基に現場のお話しをすることで、多少、皆さんのお役に立てることがあるのではないかと考えています。

今、UBEビエンナーレの詳しいご説明をいただきましたけれども、駅前に作られたささやかなレプリカから出発して、それが市民に彫刻に対する関心を生んで、本当に市民のサポートの基でこういった大きなイベントを展開してきました。これは行政、市民、宇部興産㈱をはじめとする企業のコラボレーションがあって初めてできたと思うのですが、まさに地域に向けられるアートフェスティバルとして最も成功した事例ではないかと思えます。

もう一つ注目すべきなのは、もともと、先ほど現地を見ながら、ときわ公園の学芸員の方にお話を伺ったのですが、土方定一先生という、現代彫刻界の大立者、すさまじいカリスマ性を持つ方がいらっしゃいます。私も晩年近くにお話を聞く機会がありましたが、この人のアドバイス、あるいはリーダーシップでそのひな形ができました。彫刻のあるまちづくりをするために、野外彫刻のフェスティバルを開くときの方針を決められたのです。一過性の

イベントと、その遺産が市内の公共に設置される野外彫刻が結びついて、非常にいいサイクルができ上がって、今日まで作品が増えてきたのです。土方先生の影響を受けて、各地で公共彫刻のプロジェクトが繰り広げられましたけれども、だいたい何年かすると、そのまま、もちろん彫刻は残るのですけれども、イベントとしては終わってしまいます。宇部は国際的に見てもほぼ唯一の例と思われるのですが、第28回、60年間ずっと継続してきたというのは本当に素晴らしいことだと思っています。

私から繰り返すことでもないので、先ほど申し上げましたように、いくつかの国際フェスティバルの現場の体験を基にしてお話ししたいと思います。まず、フェスティバルというのは、宇部もそうですけれども、日本だと横浜、愛知県、あるいは瀬戸内、越後妻有、あるいは札幌市などでやられています。海外で最もよく知られているのはヴェネツィア・ビエンナーレ、それからカッセル・ドクメンタ、これはドイツですけれども、これも5年に1回です。それからサンパウロあるいはシドニー、アジアでは台北とか光州、あるいは釜山等であります。私もそれにいくつかキュレーターや審査員として参加しています。こうした町を並べてみたときに気づかれるのは、最も国際的なフェスティバルがあってもいいと思われるような、ニューヨークやパリやロサンゼルスやロンドン、あるいは東京は入っていないということなのです。これが著しい特徴だと思います。国際現代美術アートフェスティバルというのは、まずニューヨークだろう、パリだろう、あるいは日本なら東京だろうと思われるのです。実際、東京やパリでは、あるいは大阪でも、トリエンナーレ、ビエンナーレが開かれたことはあるのです。しかし、何回か開かれているうちに求心力が失われてしまって持続できなかった。ヴェネツィアは100年を超えるし、カッセルも1950年に始まって今日まで続いています。そうした地方都市で非常に強い求心力を持って営まれています。これはなぜか。

いろいろな理由があると思うのですけれども、先ほど、佐々木先生からお話のあった、文化というのは、特に芸術にかかわるイベントは画一性よりもそれぞれの地域性を持ったユニークな活動のほうが求心力を持つだろうと。そうすると、ニューヨーク、東京、パリ、ロンドンといったところはグローバルな町なのです。インターナショナル・スタンダードみたいなものが表に出てしまいます。そうすると、イベントとしての求心力が維持できないのではないかとといったこと。ほかにもいろいろ考えられるのですけれども、ここはそれを分析する場所ではありませんのでこれ以上申し上げませんが、いずれもそうした地方都市で行われています。もちろん、愛知や横浜は大都市ですけれども、やはり日本の中心になるような東京や大阪ではないということは顕著な特徴だと思います。

そうした中で、私が携わったわけではないですが、芸術監督として町おこし、村おこしの方法を最もダイナミックに進めた北川フラムさんの話をしたいと思います。越後妻有と瀬戸内の国際芸術祭。普通、芸術担当というのは毎回

交替するのですけれども、2001年から今日まで、北川さんはずっと継続してこの二つのイベントをやっていると思います。この方の芸術監督としてのポリシーは、やはり注目されるべきだと思います。端的に言えば、地方都市でもない、いわゆる過疎地です。越後妻有は冬場は雪で覆われてしまうような、交通が遮断されてしまうような場所ですし、瀬戸内は小さな島が分散していて、1日に1回か2回しかないフェリーで回るしかないのです。到底こんなところで国際フェスティバルが成功するわけないだろうと、表面的には思います。

越後妻有と同じ時期に横浜トリエンナーレの1回目のアーティストック・ディレクターでしたので会う機会が多かったのですが、うかつにも北川さんに注意したのです。越後妻有でやるのは無理だろう、と。バスもない、レンタカーを借りて回ろうと思ったら2日も3日もかかってしまう。そんなところで国際展が成功するわけないだろうと言ったのです。ところが、もともと学生運動のオルグの天才だったという経験もありだったと思うのですけれども、彼は超人的な努力で、1年間に2,000回以上のミーティングをやったと言っていますけれども、地域住民と行政と、あるいはそこにいる企業の人たちと無数の会議を重ねて説得して、町や村の人たちを盛り上げて行って、大量のボランティアを動員するのです。それで、地域の人たちと一体化しながら、あるいは東京の若者たちを現地に送り込みながら、奇跡のようにして過疎地での展覧会を成功させてしまう。

瀬戸内をやったときも私は同じ注意をしたのです。越後妻有は陸路だからレンタカーを借りれば何とかなるだろう。しかし、瀬戸内は無理でしょうと。フェリーを増発できない。モーターボートで回らなければならない。こんなところありえないだろうと言ったのです。ところが、うかつな考え、大外れで、数え方にもよりますが100万人くらいの人々が来ているような、非常に成功したイベントを現在も継続中です。

こうした過疎地の振興、村おこし、町おこしに寄与する大規模な国際芸術祭というのは、北川フラム方式ともいべきもので、最近でも非常に海外から注目されています。いろいろな人が成功の秘訣を視察に来たりしています。これはなぜだろうというのはなかなか難しいのですけれども、私が越後妻有を見に行き行って出会ったエピソードをご紹介します。

これは越後妻有の一角にフィリピンのバギオという農村地帯の農民たちが来て、穀物倉を造ったのです。ここにトーテムポールみたいなものを彼らは造りました。彼らはアーティストではなくてクラフトなどを一生懸命やっているような農民の方々です。その人たちがメインのものとしては、こうした高床式の穀物倉を造ったのです。農民が造った、日本の藁葺き屋根に似ているような高床式の建物です。地元のおばさんがやっている農家の一角を借りて農民たちが造っています。2週間くらい滞在して造り上げたようです。越後妻有は点々と離れていますから、来場者も

んな地図を持ちながら宝探しのようにやって来るわけです。おばさんは別にバギオの農民たちと以前から交流があったわけではないのだけれども、そこに来て、同じ農民たちが一生懸命穀物倉を造っている。それを見て非常に意気を感じたらしいのです。そこにいろいろな人たち、若者たちが来ます。そうすると、そのおばさんが解説役を買って若者に説明しているのです。横で聞いていたのですが、とても自慢しているのです。自分で造ったような感じです。すきだろうと言いながら。若者たちは感心していません。若者たちが、ひととおり聞いたので次のスポットに行くのに行き方を教えてくださいと言ったら、行かんでもよろしい、越後妻有はこれだけ見れば十分やと。おばさんは自分がこの祭のシンボルだと思っているのです。こうした、この町と来た農民たちとの交流の中で、農家のおばさんが全く知らなかった異文化に触れて、意味が分かったかどうかは別として、そのことを何か自分自身の喜びとして受け止めて、詳しくなって、見に来る人に吹聴して回っている。こうしたことはしばしば国際展では起きるのです。

私は、ご紹介いただいたように、美術館とは縁が長くて、大学にも務めていますけれども、美術館というのは展覧会をやるのです。作品を借りてくる。もちろん、国際展だろうと国内展だろうと運送会社のトラックで集荷に行って、終わったら返す。皆さん、もちろんご覧になるのは作品だけだからそれで十分なのですけれども、そこに作者を呼んで現場で制作してもらおうという作業は全くないわけではないけれども、それが中心ではないわけです。ところが、こういうフェスティバルの場合は、ほとんどの場合、アーティストを招いてそこに住み込んでもらって制作してもらう。そうすると、都会でやった場合もそうなのですけれども、アーティストと地域住民の間に交流が生じるのです。先端的な現代美術や彫刻というのは（この場合は農民の仕事なので先端的な現代美術とは少し違うのですけれども）、先端的な現代美術はちんぷんかんぷんだけれども、そこに来た若いアーティストたちが悪戦苦闘しながら作品を制作しているところを目の当たりにするわけです。そうすると、やはり周りの人たちが応援しなくなって、近くの喫茶店のマスターがただでちそうしてやったり、ビールを1本つけてやったり、夕方になると一升瓶を持ってきて、頑張りよと言って振る舞ったりして、そうした人に対する関心、人と人の間の心の交流から入って、一過性のフェスティバルを自分自身の町の文化フェスティバルとして一体化して楽しむものになる。そうした不思議な効果を生じます。これは美術館の展覧会では残念ながら期待できないことなのです。これは私が美術館をやりにながら国際展のディレクターをやるときに非常に印象的な、美術館ではありえない、本当に貴重な体験として記憶に刻み込まれています。

それはどういうことかということ、国際展ですから国内外からいろいろなアーティストが来るのだけれども、そこに来るアーティストたちは、地域の住民にとっては他者なのです。地域的に他者ですし、もちろん宗教的、言語的、民

族的な他者でもあります。それから、そもそもアーティストという存在自体がその地域に住んでいる人たちにとっては、それは日本人であっても他者性を持っています。他者というのは相当コミュニケーションが難しい。しかも、その他者はいろいろな国から来ています。アジアからもヨーロッパからもアフリカからも中南米からも来ています。言葉も通じない、生活習慣が違う。そういう人たちと触れ合うことが、難しい言い方をすると文化的なダイバーシティ。多様性というのでしょうか、そういうものに直に触れる。自分たちと違った文化、違った宗教、違った民族、違った言語。それに基づいた、我々とは違った傾向のアートに触れる。しかも、そこに人がいるわけです。アーティストがいるわけですから、ちんぷんかんぷんだった作品が、アーティストとの会話からより身近になる。そうすると、異文化に触れるという、普段なら少しコミュニケーションが難しい、ややこしいとなるはずのものを、何か喜びとして受け入れるというか、一過性の祝祭で集った人たちの間でのコミュニケーション、その結果として出会った作品を自分たちにとって記憶に残る、非常にモニュメンタルなできごととして受け止める。文化的な多様性をマイナスの要素ではなくて喜びとして受け止めるということが、私はその地域にとってのアートの一つの意味ではないかと思っています。

もちろん、アーティストは何も文化的な多様性をその地域の人たちに教えるためにやって来るわけではないのです。自分たちにとってはアートの制作が一義的に重要であって、アーティストとして自己実現しようと思ってやって来るわけです。だから、アートのフェスティバルで純然たるアートとして鑑賞するべきであって、その素晴らしいアーティストがいるならば作品のレベルも非常に高いはずなのです。それはまず原則的にはそういうところにフェスティバルの意味があるのですけれども、それが派生的な効果であれ、そうした文化的多様性を地域に定着させる、喜びを持ってそれを受容できるようになるというのは、もう一つの非常に重要なフェスティバルだと思います。これは、大げさな言い方をすれば、他者に対するコミュニケーションを受け入れることを拡大解釈すれば、何というか、国家的な安全保障というか、どう言うのでしょうか、戦争抑止力というか、そのような一面に寄与したりもできるかもしれません。そうしたことは非常に重要な意味を持つと私は思っています。これは北川フラムさんが越後妻有や瀬戸内で国際展を成功させたことで私に深く印象づけられたことです。もちろん、そこばかり強調すると、アートのフェスティバルとして純粋なアートの解釈はどうなのだということが出てきますけれども、それを両立するのが理想的な国際展のフェスティバルだと思います。

今日、宇部のときわ公園の彫刻を見ましたが、これは一昔前までは招待制と公募制に分かれていたのです。招待制というところほとんどアーティストが固定されてしまうということもあったらしいのですが、今は公募制だけになってい

ます。公募で選考を通った作品を見ていると、やはり作品のレベルが高いです。歴史に残る大天才の作品とは言えないかもしれませんが、やはりきちんとしたレベルの作品が出ています。市民がそれを受け入れられ、それをイベントが終わった後も市内に残そうと思うというのは、やはり作品としての見応えがあるものだという裏づけがなければ、定着しないと思っています。宇部はそういう意味でもうまくいっている気がします。

それで、これから私自身が直接携わった経験を少しお話ししますが、北川フラムさんが、先ほど言ったように過疎地における村おこし、町おこしという、今までになかったような国際展のパターンを大成功させたわけですが、私が手掛けたのは横浜、愛知、京都、海外でもヴェネツィア・ビエンナーレ、光州ビエンナーレ、シドニービエンナーレとか、都会の展覧会で、北川さんとは違うのですが、ビエンナーレが2年に1回、トリエンナーレは3年に1回ですけれども、そういう一過性のイベントだけではなくて、美術館でもそれなりに市民社会に受け入れられる展示を作り出すことができ、その最も成功した例が金沢21世紀美術館だと思うのです。金沢は伝統工芸の町なのですが、普通、そこで美術館を造るとなると、工芸のコレクションがいいのではないかと普通は思うのです。実際、国立近代美術館工芸館が金沢に移転するのも、金沢は工芸の町ということがあったと思うのです。しかし、金沢21世紀美術館は工芸のコレクションもありますけれども、中心はばりばりの現代美術です。これは、金沢の人たちは特に現代美術に、もちろん、金沢美術工芸大学もありますけれども、現代美術のファンが多いような町とは必ずしも思えなかったのです。そこに何か突然、非常に先端的な現代美術の館が出現した。それが受け入れられてきたのは、建物自体が人気者だということが大きい。SANAAという、妹島和世さんと西沢立衛さんの二人が組んだ建築ユニットの建物で、これは大成功したのです。このグループはその後国際的に活躍されるようになってルーブル美術館の分館はSANAAが造りました。私もこのときは二、三年すると人が来なくなってしまうのではないかと考えたのです。ところが、これができてから20年近くたって、相変わらず集客力を増大させ続けていて、去年、一昨年か、200万人を超えたというのです。200万人というのは金沢の兼六園よりも多いのです。大変な観光資産にもなった。これは建物の成功もありますし、作品の見せ方もうまかったのです。もちろんトリエンナーレ、ビエンナーレと違ってアーティストだけでできるわけではないのですが、体験的な性格を持った作品をいくつも配置して、子どもたちや市民がそこに入って遊ぶようにして楽しめるといった雰囲気を出したということがあります。

それで、これは公共投資として考えれば、経済的な投資効果も非常に大きかったと思います。美術館の入場料収入だけでは微々たるものでしょうけれども、その人たちがタクシーに乗ってやって来る、近くの商店街で買い物をしてリレストランに行ったりする、あるいはそこで宿泊すると

いうことを考えると、確かに非常に大きな経済的な利益をもたらしていると思います。そういう意味では、美術館もそうした文化的なダイバーシティを、単に現代美術の鑑賞だけではなく、市民社会全体の活性化に結びつけることに成功している例だと思っています。

文化経済への投資というのはなかなか難しいですよ。金沢21世紀美術館が成功していて近所の商店街が潤っていますけれども、ほかの美術館や商店街のお客さんは減っているのではないかと。一つのパイを分け合っているだけではないか。しかしトータルして見ても実際にはパイは大きくなったと思うし、経済効果もあつたと思います。ただ、その点だけに目を付けてしまうと、単なる経済政策になってしまうので危険なところもあるのですけれども。しかし、そうした地域住民に受け入れられることの中に、経済も含めた町全体の活性化ということが非常に大きな役割を持っていると思います。

これからお話しするのは、では、フェスティバル、アートイベントの場合はどうなのかということなのですが、私が横浜トリエンナーレをやったときもそうなのですが、もちろんトリエンナーレ、ビエンナーレというのは、もちろん美術館をベースにして開かれる場合もありますけれども、一般的に言えば、美術館を利用するにしても美術館ベースではない、非常に広域的な広がりを持つということです。

横浜で第1回目、2001年のときですが、展示スペースの中での展示がメインではあったのだけれども、なるべくまちなか展開をしようとしたのです。横浜なら横浜という町の個性を活かせるような場所になるべく展開したい。そこはもちろん美術館でもないし展示をすることもないし、作品をプロテクトするシステムも監視も非常に難しい。しかし横浜というのはやはり港湾都市ですから、どこか港湾部を使えないかと思って、草間さんに頼んでみなとみらいの運河に2,000個のミラーボールを並べたのです。手前味噌ですけれども、これは非常に成功したのです。横浜でできない光景が出現しましたし、風が吹けばかしゃかしゃボールが触れ合う美しい音が聞こえ、ミラーボールに太陽の光が反射して光るのです。夕方になると夕陽でミラーボールがあかね色に染まるわけです。白い雲が流れてくれぱずと映ります。本当に目が潤むような光景が出現して、こういうことはやはり一過性のフェスティバルならでの状況だったと思っています。まちなか展開です。

いろいろ紹介するのはまた別の機会にしますが、同じことをあいちトリエンナーレ第1回、これは2010年でしたか、ここでもまちなか展開を考えて。このときは、こうした典型的な町の光景も利用したいけれども、本当に町の中に入っていけないかと思ったのです。商店街の中で展覧会ができないかと考えて、名古屋のまちなかを見て歩いたのです。

名古屋は、行った方はお分かりだと思うのですが、戦後の都市計画の中で理想的なプランを実現した町なのです。東京、大阪も戦争の焼け跡で大都市改造をしたけれども、挫折してしまった。あまり道を整理することがで



きなかったのです。東京である程度の整備ができたのは東京オリンピックのときだと聞いていますがけれども、戦後の復興の中では理想的な都市プランができなかったのです。名古屋は、中国から帰ってきた行政の技官の人が全権を持たされて、完璧にやってしまったのです。飛行場でも造るのかと言われたような非常に広い道路がまちなかを全部貫通していて、刑務所があって邪魔だからと刑務所を移転させてしまったという強力な行政力を持った技官がやったようです。

その人の基ででき上がったのだけれども、そうすると、近代都市の偉容を整えたのだけれども、庶民の町という感じがしないのです。何かもっと人の温もりがするような町並みをもって歩いていたら、繊維問屋街の長者町という町が見つかりました。問屋だから、別にシャッター商店街ではないのだけれども、少し元気がないのです。そこに行ってみて、ここはいいなと思ったのです。行き交う人が日常的なあいさつを交わしたりするような町並みで、そこに入って行って展覧会をやらせてくれませんかと言ったのだけれども、商店街の人は何を言っているかわからないのです。あいちトリエンナーレなんてまだ初回だから聞いたことがないと。こういう現代美術の展覧会をやらせてくれと言ったら、お前は何を言っているのだ、みたいな。そんなものやっている暇はないよと言って追い返されるような感じだったのだけれども、けっこう粘り強く交渉して、二人、私の知っている、キュレーターになりたいと思っている行動力のある若い女性に、近くにアパートを借りてそこに住んでもらったのです。何をしますかと言うから、毎日歩いてくださいと。おはようございますと、にこにこしながら。我々が本気だということを見せるためにその人に住んでもらって、私も足繁く通いましたけれど彼女と県庁の担当の方がまちなかをいつもあいさつしながら歩いてまわれているうちに気に入られて、うちの嫁に来てくれないかという会話があったりして、そういういいコミュニケーションができてきて、だんだん親身になってくれたのです。そこで、1軒の人が、1階の店を半分貸してやろうとか、2階が空いているから貸してやるといのは、1軒、2軒、3軒やるとわっと連鎖反応して、次々にお店や事務所が提供されたのです。これは結局、最終的には無償で三十軒ほどの場所を提供していただいて、アーティストにも街中に住み込んでもらったのです。

ちなみに、県庁の担当の方は、その後あいちトリエンナーレの研究で東京芸大の博士号を取得し、今は大阪の大学で「地域とアート」を講じる教授をなさっています。

長者町にはあひす祭りという祭があるので、我々は祭にも参加して、アーティストに頼んで山車も造ってもらったのです。そうしたら、今までは冷ややかだった町内会や自治会の長老たちが全面的に賛同してくれて、最後、非常に盛り上がったのです。大成功したといえば大成功したのですけれども。私は1回目のディレクターだったのですが、2回目、3回目もそこに継承していこうと思ったら、そこに多くの人が押しかけて人気が出てしまって、1回目のト

リエンナーレが終わった後にいろいろなカフェバーとか画廊とか、ファッションブルな店とかがたくさん入ってきて、空き店舗がなくなってしまったのです。2代目の五十嵐太郎さんがディレクターをやったときには、もうそこを借りられなくなっていて、成功したためにアーティストが追い出されてしまうみたいな経験をしました。まちなかで展開してその商店街の人と本当にいいコミュニケーションをとって、残念ながらそれはその後に継続ができない状況になってしまいましたけれども、アートにはそういう力があるのだなということ、本当にまざまざと体験できたような気がします。

もちろん、私たちはアートの専門家だから展示するのは自己目的ですが、地域の人たちに受け入れてもらえるのは本当にやりがいがある仕事です。啓もう普及というのは大変なことなのですが、結果的には現代美術を人々に親しんでもらう役割も果たしていると思います。それと同時に、いいコミュニティを形成するための触媒作用とか、そこでいろいろな海外の人たちと地域住民同士と、あるいは海外のアーティスト同士のいろいろな交流やコミュニケーションができて、そのこと自体の、このお祭りは一過性で終わってしまうのですけれども、そのことの共感をもって次のトリエンナーレが楽しみだという雰囲気になっていけばいいなと思っています。ただ、もちろんなかなか難しいです。異文化の人たちでもあるし、それぞれのアーティストには主義主張もありますし、地域住民との間や行政との間にいろいろな確執が起きることもあります。

皆様ご存じでしょうけれども、あいちトリエンナーレは14日に閉幕しましたが、かなりいろいろな問題が報道されたところです。私も実行委員会のメンバーとして残っておりましたので目の当たりに経験しましたがけれども、そうした、必ずしもすべてオーケーというわけではない、いろいろな経験をする事になると思います。要は、そうした経験を含めて、私たちが地域社会でいろいろなことを考え、普段、非日常的な状況の中でいろいろなことを考える契機になっています。それがいい形で次のイベントにつながっていけばと期待しております。

それからもう一つ、東アジア文化都市ということで、日中韓で、文化庁が最初に音頭を取っていたと聞いております。三つの都市がそれぞれ文化都市を毎年決めるわけです。毎年選んで連携しながら文化イベントを繰り広げようと。その1回目が横浜で2回目が新潟、3回目が京都です。京都のときにディレクターを頼まれて、そのときに、京都の地域、もちろん地域のコミュニティもありますけれども、京都という場所で市民に受け入れられ、また京都の町ならではのイベントができないかと考えていました。そのときに、文化庁でも歴史的な文化遺産の現代的な活用ということを言われていたのです。これは京都でできるかなと。それで、一つは、実際にそのときに京都市美術館、もうすぐリニューアルオープンしますが、工事中で使えなかったのです。大きな施設がない。小学校の跡地を使

おうとかいろいろ考えたけれども、どうも食指が動かない。最終的には、これは無理だと思ったけれども、二条城を会場にしようではないかと思いついたのです。歴史的文化財の現代的な活用というのは二条城しかないのです。京都市はあまり文化財を自分自身では所有していませんが、二条城は珍しく京都市のもので、けれども、普段は使わせてもらえないような文化施設です。何しろ二条城は国宝と重要文化財の固まりですから、現代美術みたいなわけのわからぬものに土足で展示させないといった感じだったのですけれども、たまたま二条城の城主、文化局長という方が、何をやってもいいよと言うのです。ただ、掘らないでくださいと。掘ると何が出てくるか分からないから、地面を掘らなければ大丈夫だと。何でもいっていいと言っても現実的な文化財としての制約は非常に厳しかったのですが、二条城でそれを積極的に活用しようということでいろいろなことを考えました。それで、一つは、冗談が実現したことなのではけれども、蔡國強という、日本に住んだことがあって今はニューヨークにいるアーティストがいます。北京オリンピックのオープニングイベントの巨大な花火を打ち上げる光景を記憶されている方がいるかもしれません。その人は、東アジア文化都市が奈良で開かれたときに、奈良の東大寺の庭に巨大な船を造ったのです。それが分解したまま残っていたので、それを使おうということで、それを京都に持ってこようと。二条城の中庭は普通は指一本触れさせない場所なのですけれども、そこに長さ15メートルくらいある船をもう一回組み直して、そこに土を入れて松の木を5本植えて、高さ5メートルくらいあるのですが、その上に載せて、巨大な盆栽船を造ろうという。これは冗談みたいなもので、こんなものは認められるわけがないと思ったのですが、二条城の人に聞いたら、職員に聞いてみてくれと。そのときは職員に追い返されると思ったのです。二条城の庭職人、植木職人は最高の技術者です。その人たちに説明したのです。そうしたら面白かったのです。手伝ってやるよと言われて、松の木も庭石も彼らが全部手配してくれて、そこにこれを作ってしまったのです。でき上がってから見たら、異様な光景と言えば異様な光景なのだけれども、けっこうなじんでしまうのです。元からここにあったのではないかという話を多くの市民から聞きました。こうした珍妙といえば珍妙だけれども、日中交流、中国から来たものですから、そうした不思議な光景が生まれたのです。

そういえば、あいちトリエンナーレでもそのようなことをやっています。これは池田亮司というパリに住んでいる日本の作家なのではけれども、名古屋城の天守閣の近くに60の航空探照灯を地面に並べました。なかなかきれいなのですが、これも大変だったのです。最初に行ったときに、これをやってくれないかと言ったときに、相手にされなかったのですが、何度も通って説得しているうちに、奇跡的に実現してしまったのです。航空探照灯を上放つのです。そうすると、光が成層圏まで突き抜けるのです。名古屋城という市のシンボルの奥に光の塔がずっと何キロも上

に立ち上がっているのです。これは市の人からどこから見えたか、一番遠い人に記念にあげようと言って公募したら、岐阜県から見えましたと来ました。150キロくらいのところから見えたというのです。人が真下から見上げると、なぜか太陽から光が伸びてくるように見える。非常に美しい光景でした。こうして都会の中に非日常的な光景を創出して、これは3日間でしたか、オールナイトでやりました。そうすると、遠くで見てやって来るわけですが、車で。夜中の2時か3時ころに人がたくさん来たりして、非常に不思議な情景が生まれました。

現代美術のスペクタクルとして蔡國強も池田亮司の光の塔もいい作品だと言えそうですが、やはり、成功した最大のポイントは、そこで市民がそれを受け入れてくれたということです。多くの人がこれを見に来て、いろいろな語らいが起きました。アートを媒介にしたコミュニケーションが起き、その楽しい記憶が残ります。包容力があるというか、普段の日常生活にはない他者的な文化というか、それを受け入れる寛容な社会の形成に寄与するのではないかと、多少お題的に言えばそういう気もします。そうした現代美術の啓もう普及ということは、美術館では一番大事なお題目なのではけれども、地域のフェスティバルというのは市民社会に対して直接働きかけて、そこでその社会を、もちろん楽しんでもらうことを通じて、非常に寛容で包容力のある、他者に対してコミュニケーションを及ぼしてもらえるような。場合によっては、もちろん、金沢21世紀美術館のように投資への効果を期待できるかもしれませんが、そして、美術館的な、あるいは美術の専門的な評論家やキュレータ的な発想とは違った、素人ながら、まさしく文化行政のやっているもう一つの役割、健全なる市民社会の形成に寄与してくれるのではないかというのが、私のアートディレクターとして取組んできた生きがいがありました。もちろん、これは、我々がそう考えているから市民の方も喜んでくださいということではなくて、北川フラムさんもそうでしたし私の長者町での経験もそうでしたけれども、まず、町の人たちにいいものを持ってきたから受け入れてくれということではなくて、まずお互いのコミュニケーションの基盤を作りながら進めていかないと、ある段階で逆転してしまつてということもあるかもしれません。だからなかなか難しいのです。

難しいとは思いますが、市民社会の人とこうしたイベントをやるときに、彼らはこちらを見ているのです。本気で町の中で皆さんと一緒にやろうと思っているのかということ、面白いことをやりたいと言って、奇想天外なものを持ってくるというだけでは絶対に受け入れてくれないので、コミュニケーションを取らないとだめだと思っていますし、それを私たちの生きがいにならなければ、それを方便として言っているだけというのはやはり地域の人たちに見破られてしまいます。自分たちがいかにそのことに情熱を傾けているかということを通じていくのではないかと思います。

文化行政というのは、私は行政マンではないのでそうし

た視点からは言えませんが、現場のキュレーターとして言えば、一番言いたいのは、この社会をダイバーシティ、多様性を持たせるためにというのは、こうしたアートフェスティバルの非常に重要なポイントだと思っています。あるいはそれが一番重要なことだと思っていますし、そのことが地域におけるアートフェスティバルに結びつくと思っています。

体験談ばかりになりましたけれども、以上、ご参考になればと思っています。失礼いたしました。

### 担当者ミーティング

#### テーマ① 長期的なフェスティバル開催手法と日常のメンテナンス

##### 宇部市UBEビエンナーレ推進課 学芸員 山本容資氏

皆さん、こんにちは。私は宇部市UBEビエンナーレ推進課の山本と申します。長期的なフェスティバル開催手法と日常のメンテナンスというテーマを仰せつかりましたので、簡単ではありますがご説明させていただきます。

まず、UBEビエンナーレの継続ということですが、さきの事例発表でもありましたように、宇部では2年に一度、国内で最も古い、世界的に見ても他に類を見ない野外彫刻の国際コンクール、UBEビエンナーレを開催しております。初めて開催されたのは1961年、それから2年に一度のUBEビエンナーレ形式で開催を続け、2011年に開催半世紀を迎えました。これは第28回UBEビエンナーレの会場の一部の写真ですが、今回は4か国15作品が展示されております。

こちらは先ほどの事例発表で表示しましたけれども、第1回宇部市野外彫刻展の写真です。1961年に開催されたのですが、まだ国内で野外彫刻の発表事例というのはほとんどなく、第1回宇部市野外彫刻展もとにかく屋内で展示されていた彫刻を野外に出して展示するという形でした。会場はときわ公園なのですが、当時はまだ野外彫刻展の会場がありませんでしたから、会場は作品を出品する彫刻家自らがブルドーザーを運転して会場を均しました。会場の道に当たる部分はただ砂利を敷いただけのような道です。今、UBEビエンナーレは作品の周辺に青い芝生が植えられているのですが、当時はとにかく早く緑を出さなければいけないということで麦の種が作品にまかれたと聞いております。今は作品を地面の上に直接設置するという手法を執っているのですが、この当時はコンクリートブロックの上に作品を載せるという状態で、会期中に倒れて破損したり風で飛ばないように、ひもで作品を縛って四方から引っ張っている状態の作品もあったと聞いております。本当に1961年はかなり実験的な野外彫刻展ということで、何とか開催にこぎつけたという形です。

なぜ宇部で始まった野外彫刻のコンクールが半世紀以上もの間、継続開催を続けることができたのか。いくつか要因はありますが、特に重要な部分についてお話しさせていただきます。五つに絞って話をしたいと

思うのですが、特に、UBEビエンナーレというのがコンクールとしてのシンプルな構造、それから展覧会とまちづくりの連動、それから彫刻庭園としてのときわ公園、あとはUBEビエンナーレの歴史とそれにかかわる人脈と人々の熱意。今回はこの五つに絞って、簡単ではありませんがご説明させていただきます。

まずは、シンプルな構造ということなのですが、UBEビエンナーレは2年に一度開催される野外彫刻の国際コンクールです。最終的には、コンクール開催後、野外彫刻の展覧会として開催されるのですが、基本的な構造としては、作品を募集して審査して展示する、本当にシンプルな運営方法を執っています。シンプルなコンクール形式のメリットは、運営するスタッフの負担が少ないということです。作品を応募する、審査する、展示する。この基本的な部分をおさえれば、少し言い方は悪いかもしれませんが、だれでも実施することが可能です。また、UBEビエンナーレの審査は一次審査が模型もしくは、この第28回展からなのですが、ドローイングでの応募もできるようにしました。二次審査が実物作品の審査となっております。他のコンペ等では、例えば、書類審査が模型審査の前であったり、写真である程度人数を落とすうえで模型による審査であったり、段階を踏んで審査する場合がありますが、UBEビエンナーレでは一次審査の場合も二次審査の場合も基本的には実際の作品を見て審査します。これは、審査時に、例えば、作家の資料をそろえたり写真を準備するといった手間がないために、これもスタッフの負担がかなり少ない部分です。特に、UBEビエンナーレの一次審査は、作家のお名前、それから略歴等はすべて伏せて作品そのもので審査することにしていますので、とにかく作品がそろっていれば審査ができる、それも大きな利点の一つかなと思います。ただし、UBEビエンナーレは、特殊な野外彫刻のコンクールということですので、本展開催時には野外彫刻の設営であったり、これまで宇部で積み重ねられてきた設置のノウハウ、それから市内の職人たちの協力のうで成り立っています。この部分は、やはり宇部が半世紀以上、野外彫刻展を開催してきたノウハウがありますので、これは宇部でなければなかなか難しいところがあるのではないかと思います。

次に、まちづくりとの連動です。UBEビエンナーレは2年に一度のビエンナーレ形式によって開催されておりますが、本展終了後に受賞作品の市内への設置を行っております。最初の事例発表でもありましたように、市民賞を受けた作品が市内の中学校などに設置されているわけです。さきの事例発表でもありましたように、UBEビエンナーレの目的は、展覧会を開催するというよりも宇部市民が自らの住む街をよりよいものにしたいという熱意です。木や花を植えるように街に彫刻を設置して街を飾っていきたい、そういう思いから始まった事業です。なので、もともと展覧会を開催することが目的というよりは、宇部市のまちづくりを目的として始まった取組みになります。なので、作品の設置事業を進めながら次回展の作品の公募を行って

りますので、UBEビエンナーレは2年に一度の展覧会と言いつつ、本展を開催した翌年には作品の設置、その翌年にはまた次の展覧会があって作品が決まる。その翌年にはまた設置するというように、ほとんど毎年彫刻の事業を行っていることとなりますので、途切れがない。これもUBEビエンナーレの継続の一つの要素です。

次に、彫刻庭園としてのときわ公園です。この継続性を考えるうえで最も重要と言えるのが、開催場所のときわ公園です。約100ヘクタールの常盤湖の周辺に広がる豊かな自然、彫刻展の会場であるUBEビエンナーレ彫刻の丘はその湖を見渡せる場所にあります。これは私の個人的な思いなのですが、このUBEビエンナーレの彫刻の丘はときわ公園の恐らく一番いい場所なのではないかと思えます。芝生の丘があって常盤湖を見渡すことができ、私が初めてときわ公園に来たときに、ここは本当に日本なのかと思うくらい感動して、この場所にしばらくいたいなと思いました。

この会場は、1963年に、当時の運営委員のメンバーでもあった建築家の大高正人さんが設計しまして、1993年に大高正人さんによるさらなる改修を得て現在の会場となっております。ここで重要なのは、ときわ公園が広大な敷地を持つ都市公園ということで、展覧会を開催した後の野外彫刻を一時的に展示する巨大な野外の収蔵庫としての役割もあるということです。例えば、まちなかなどの一定の場所で展覧会を開催するとしても、展覧会が終わった後の作品を、必ずしもその翌年にしっかり展示できる保証はありませんので、広大なときわ公園という大きな受け皿があったということが宇部にとってはかなり継続性というものについてはよかった点なのではないかと思えます。

次に、UBEビエンナーレの歴史です。これは先ほどの事例発表にあったとおり、UBEビエンナーレの発端は観光でもなく美術館のコレクションのためでもなく、宇部市民が戦後の急速な復興に伴う公害、環境改善運動の中から、街に木や花を植えるように彫刻で街を飾りたいと願う熱意から誕生した展覧会です。宇部市に設置されている200点の野外彫刻は、現在では開催半世紀を超えて戦後の野外彫刻史を一望できるコレクションとなりました。UBEビエンナーレの歴史がこのUBEの歴史そのものであり、市民自らの運動から始まっているところがとても大きい部分ではないかと思えます。

さらに、UBEビエンナーレの歴史は市民の熱意から始まったのですけれども、人脈と熱意としましたが、これはこれまでUBEにかかわった多くの美術評論家や彫刻家の熱意ということです。1961年に開催された宇部市野外彫刻展、まだ国内では開催されたことのない大規模な野外彫刻展の開催に向けて、当時の運営委員会のメンバーはこう考えたそうです。できるだけお金をかけないでどれだけ宇部市に野外彫刻展で成功を収めてもらうか、それを一番念頭に置いて第1回目の野外彫刻展が開催されたそうです。これは当時、宇部市が彫刻を街に飾りたいということで始めた運動ではあったのですけれども、日本の野外彫刻界に

とっても野外彫刻を発表する場としては大変重要なもので、運営委員長であった美術評論家の土方定一は開催当初から2年に一度、宇部市で大規模な野外彫刻展を開催したいという思いを抱いて、運営にかかわってくださっています。当時、作品を関東から宇部に運んでくるのですけれども、普通にトラックで輸送すると大変なお金がかかりますので、宇部興産のセメントタンカー、宇部では満杯に積んで東京に持って行くのですけれども、東京で全部下ろした後に空っぽで帰ってくるのです。その空っぽになったセメントタンカーに作品を載せて宇部まで運んでくると。運営委員、選考委員の皆さんも普通に移動するとお金がかかりますから、その船に乗って何日かかけて宇部まで来ると。その当時の運営委員の皆さんは、宇部市から謝礼というか謝金もほとんど取らないとしておりますので、現在の運営委員のメンバーは、当時の運営委員会の皆様から引き継いで来られてきているのですけれども、現在の運営委員のメンバーの謝金も驚くほど安くなっておりまして、それも継続の一つの理由かなと思います。

最後に、日常のメンテナンスです。宇部市には、現在、200点の野外彫刻が設置されておりまして、そのすべてを維持管理するには大変な予算が必要となります。メンテナンスについては野外彫刻すべてを完璧な状態に保つ予算はありませんで、今後どうやって多くの野外彫刻を維持管理していくのかが大きな課題となっております。現在は、うべ彫刻ファン倶楽部という市民のボランティア団体がありまして、その方々による彫刻清掃、それに加えて200点の野外彫刻の点検修復、撤去を随時行っているという状態です。これが彫刻清掃の写真になります。

宇部の彫刻清掃は年に2回、春分の日と秋分の日に実施します。この活動は2008年からスタートしておりまして、昨年、10周年を迎えることができました。毎回200人以上が参加する、かなり大規模なイベントのようなものとなっております。この200人の中には宇部市の企業の皆様の参加もありまして、例えば、清掃道具の寄附であったり、大きな作品については高所作業車を使って清掃しますので、その高所作業車の無料提供であったり、コカ・コーラウエスト株式会社も協賛で入っていただいております。参加者に清掃後に配る飲み物の提供などもしていただいております。

次に、野外彫刻の点検修復、撤去です。現在、彫刻設置事業が半世紀を超えておりまして、老朽化してきた作品が目立つようになってまいりました。作品は素材、制作方法、設置された場所等がさまざまですので、修復方法がそれぞれ異なります。すべての作品を完璧な状態に保つことは困難ですので、全体の優先順位等メンテナンス計画が必要でして、これが今後のかなり重要な課題になっているところです。

少し長くなってしまいましたが、まとめです。宇部の彫刻事業はまちづくりと連動していたために長期的な開催につながりました。長期的な開催のためのコンクール形式というシンプルな構造と、まちづくり事業との連帯感のある

事業構成が長期開催にはとても重要だったのではないかと思います。また、長期的な開催を支えた市民、それから彫刻展にかかわった運営委員会、彫刻家といった方々の支えがあって、この展覧会は開催されています。あとは、日常のメンテナンスについては作家とのコミュニケーションが非常に重要で、一つ一つ丁寧に対応しているということです。

以上になります。ありがとうございました。

## テーマ② 都市・公園政策との関係（景観を含む）

### 宇部市ときわ公園課 課長 白井幸雄氏

皆さん、こんにちは。宇部市の観光・シティプロモーション推進部ときわ公園課の課長をしております、白井と申します。短い時間ですけれども、ご説明させていただきます。

都市公園政策との関係（景観を含む）ということでご紹介させていただきます。これは航空写真ですが、ときわ公園は189ヘクタール、東京ドーム40個分あります。ちょうど南から北に向かって約2キロ、それから東西が約1キロあり、ピエンナーレが開催されているのはちょうどこの区域になります。その横に植物館等があって、こちらに動物園などがあります。先ほどありましたけれども、湖が100ヘクタール、約320年前に人工湖として造られた湖で、現在、灌漑用水、それから工業用水としても使われております。

それでは、大きく二つに分けて都市公園の彫刻と現代アートの取組みということでご説明させていただきます。ときわ公園は、市のキャッチフレーズである、緑と花と彫刻のまちのシンボルとしての公園です。公園の整備としては、日本一の自然体感テーマパークを目指しており、平成28年にときわ公園活性化基本計画を改訂しまして、現在も整備を進めているところです。市民の憩いの場とともに貴重な観光資源であり、日本の都市公園100選、さくら名所100選等、文化庁関係でいうと平成29年度ですか、国の登録記念物、名勝地関係ということで認定をいただいております。

ときわ公園の主な施設ですが、先ほどお話ししたUBEピエンナーレ彫刻の丘のほか、ときわ動物園、遊園地、ミュージアム、石炭記念館、花関係ではしょうぶ苑、あじさい苑、ぼたん苑、それから花いっぱい運動記念ガーデンも平成23年に整備しており、先ほどありましたファルコネの『ゆあみする女』のレプリカを設置しています。それから、周遊園路も1周約5.73キロあり、市民の方が毎日ウォーキング等をされている公園です。これが全体の図面です。この赤い部分がUBEピエンナーレ開催地の彫刻の丘になります。

2点目、宇部市の彫刻の設置状況ということで少しご説明いたします。これは2018年8月現在の数字ですが、彫刻設置数は226作品あります。この中を分類していきますと、私の担当している都市公園は、ときわ公園も含めて129作品、それから市道等の歩道に28作品、図書館、学校、空港

等にも彫刻が随時整備されております。これが中心市街地の歩道に設置されている作品です。一番左はANAクラウンプラザホテル宇部の前の交差点にあるもの、それから真ん中が、先ほどもホールで説明がありました、写真の向きが逆ですけれども、『SEED増殖』という作品があります。それから『メッセージ』、これもここから歩いて5分くらいのところ設置されています。

3点目、都市公園にも種類がいろいろありますが、都市公園は都市公園法、それから宇部市都市公園条例に基づいて市が設置した公園で、現在86か所あります。その内、彫刻が設置されている公園が10か所、ときわ公園には常設だけで93基ありますので、それを含めて全部で129基あります。ときわ公園は総合公園で、総合公園は市内に2か所あるのですけれども、ときわ公園のほかに、先ほど部長の説明の中で迷路を設置したアクトビレッジおのがあります。それから多いのが近隣公園で、市役所の横に真綿川公園があり、その両サイドに19基、それからこちらの渡辺翁記念公園、このすぐ横にありますけれども、4基ほど設置してあります。それから恩田運動公園は7基、それから中央公園が1基です。

以前は見る彫刻が多かったのですが、体感、体験できる彫刻がだんだん多くなってきています。これは昔からあるのですけれども『標的と人』というタイトルの作品で、私も「蟻地獄」と呼んでいて、彫刻の内部をぐるぐる子どもが走り回って遊んでいます。右側はときわ湖水ホールの『つなぎ石』という作品なのですが、彫刻の上に乗っていつも遊んでいるような状況です。それからこちらの左の作品が第26回UBEピエンナーレで彫刻の丘に設置されていたときの作品です。それを岩鼻公園という風致公園に移設しました。作品自体は作家からの寄附で、移設費については地元要望がありましたので地元の企業から寄附を出していただき、市が設置をしました。この設置に関しては、彫刻の設置委員、それから学芸員等、現地に立ち会って景観等も配慮しながらこの場所に決めていると聞いております。

それから、都市公園の整備の際には必ずと言っていいほど彫刻を設置するようにしています。左は、平成23年に山口国民体育大会があったのですが、テニスコートのある中央公園に彫刻を1基、それから右は恩田運動公園の野球場の改修に合わせて彫刻を設置しております。これは石の作品で、風車も石で、風が吹くとぐるぐる回るような作品です。

この彫刻マップに大体入っているのですが、それとは別に、スマートフォンをお持ちの方は、「うべ観光ナビゲーター」をダウンロードしていただければ彫刻の設置場所や作品について説明されているものがあります。すべてではないですけれども、こちらのほうがたくさん彫刻が載っています。

課題ですけれども、彫刻設置自体は公園部局では設置してなくて、先ほど話のあったUBEピエンナーレ推進課が設置しております。先ほども言いましたけれども、見て

触って遊べる彫刻が増えつつあります。もう1点は、やはり長年彫刻が設置されていますので、彫刻の老朽化、それから部材の特性などで夏になると触ると熱いという問題点も聞いております。ただ、先ほども説明がありましたけれども、年に2回ほど日常点検はされています。都市公園、市道も含めてすべてされているようなので、今のところ彫刻に関して大きな事故があったということは聞いておりませんが、その辺を少し懸念しております。

現代アートの取組みということで、文化庁もチームラボとコラボレーションされているようです。ときわ公園でも人材育成、地元の定着を図る目的として、2016年からときわ公園の桜山で2年間、現在は植物館でチームラボの作品展示をしております。昼間は植物等を観賞していただき、夜になるとデジタルアート作品を鑑賞することができます。

〈紹介映像〉

以上で説明を終わります。ありがとうございました。

### テーマ③ 宇部市の現代アートの取組（民間団体の取組を中心として）

宇部フロンティア大学短期大学部 准教授 原井輝明氏

地元でアート活動をしながらか学校で教員をしております、原井です。よろしくお願ひします。地元での活動の中でメインになっているのが、FCAという活動団体なのですが、主な活動としてシャッター壁画の取組みをしている団体です。その活動を紹介したいと思います。

当時、私が学生の間は東京に出ていたのですが、帰ってきて地元がシャッター街とテレビで報道されたりして少し寂しい思いもし、シャッターの壁をキャンパスに見立てて何かできないかということで始めたものでした。宇部市は南の港から北の山間部へと、南北に長く、市街地は南のほうに集まっています。山の中に国道や新幹線、本線が走っていて、宇部線が市街地を回り込んでいるのですが、先ほどストロ一現象みたいな話がありましたが、高速道路などを造るとみんな通過していくような。宇部はまさに昔からそういう地形かなと思っています。宇部は観光資源もありませんし、今でこそ彫刻を中心に観光を盛り上げていくような機運は感じられるのですが、工業都市ということで昔は人が集まってきていたものの寂れる一方という空気を感じていて、それで画家として何か出来ないかと思いシャッター壁画プロジェクトに取組み始めました。制作ではなくプロジェクトとしたのは、制作をしながら、その周辺でいろいろな催しを展開しているということで、プロジェクトとしています。

私自身は作業的な工程は支援するのですが、描くことはほとんどなくて、アーティストとか、表現したい人を募り、発表の場にするという形でやっています。後付けなのですが、募金や助成金が頼りなので、一応、中心市街地を彩るという言い方をし、市民のボランティアも同時に募り一緒に制作しているという形です。

2004年に、アーティスト、画家になるにはどうしたらいい

ですかという相談を地元の若い人から受けて、人前で発表すればアーティストではないかということとを告げ、また一方で、シャッター街は錆を取るだけできれいに見えるのになぜそんなことすらしなのかなという思いもあり、そういうタイミングで、そのような相談を受けたので、では一緒にやろうと言って最初の壁画制作の準備に取り掛かりました。ちょうど『宇部の風景展』を地元の私設美術館が計画してまして、絵描きをはじめ趣味で描いているいろいろな人たちに声をかけたのですが、普通に油絵を描いて展示するのはつまらないので、どうせだったら『宇部の風景展』でシャッターに絵を描きたい、空き店舗のシャッターを提供してくれるところを紹介してもらえないかと相談したところ、「うちに掛け」と言ってくれました。私的には、閉まっているお店がたくさんあるので、閉じているお店で描かせてもらえればと思っていたのですが、とりあえずこのような状況で始めることになりました。それで、描いていたらこちらのほうにも描いてくれという話が来たのです。それでずると、では次、では次みたいな形になって続いていました。宇部の中心市街地は大きく新天町と銀天街という地区で一応分断されているので、新天町地区で始めて8か所描き、銀天街にも移動してやっていました。原画を描く人は一人目立つことができるのですが、その周辺でサポートする人たちはボランティアだけになってしまうので、自分たちも作って発表しましょうと誘い、アトリエでも、展覧会をやっていました。

都会と違って田舎町で現代美術をやる人たちはほとんどいないのですが、皆、よく興味を持ってやってくれたというか、面白がって参加してくれと感謝しています。学生参加のきっかけは、山口大学医学部の美術部の人が見ていたもので、もしよかったら一緒に描きますかと声をかけたら部員も誘ってくれ、交流が始まったという感じです。

発表すればみんな作家というかアーティストだからということで始めたグループ展は、けっこう盛り上がりしました。音というテーマでやってみようと言ったらいろいろな音を連想するような面白い作品を作っていました。あるときは、宇部市内のフリーマーケットの会場に一区画だけブースを出しました。商品を並べるのですが、そんなものは無視して、通りとか空き地とかいろいろなところに作品を忍び込ませて、見に来た人を案内して、作品を見て回るということをやりました。

学生は、卒業したら東京に行くとか実家の町や、県外に帰る人も多くて、今は当時の学生が残っていないのですが、彼らが地元や東京に行ってしまう前、ちょうど秋分の日頃に時間がとれるということで、日が沈んでから夜が明けるまでの展覧会『夜会』という展覧会を急ぎよ行いました。「光」というテーマを設けたのですが、それぞれ時間のないなかよく考えて作品を出してくれました。そういう展覧会を開催しながら壁画制作と並行し、春に新川市まつり、秋に宇部まつりと言うのがありまして、そこのお祭りで主に子どもが対象ですが、毎年いろいろ手を変え品を変え、ワークショップも行っています。

大体壁画は1年に1本くらいです。助成金の準備が遅れて遅くなって申し込むと10月以降の実施対象にしか間に合わなくて、報告書も出さなければいけないので、大体遅くとも2月がリミットで、一番寒いときに屋外制作をしていると言う状況です。また、募金活動などいろいろな願いをして回るのが、商店街のお店に空き缶で作った募金缶を置かせてもらい、完成したらお披露目ということで、最初はクラッカーだけで、完成、おめでとう、ぱちぱちで終わっていたのですけれども、そのうちパフォーマンスをやったりコンサートをやったり、だれでも参加できる写真コンクールをやったり景品をつけたりしていました。また、お手伝いとかそういう参加はできないけれども、聴くだけなら誰でもでき、アート理解にもつながると思い、「アートとまちの恋愛講座」という題名を掲げて講演会の企画をやっているのですが、集まる人は少ないのが現状です。

とは言え、だんだん商店街の人たちの理解が出てきた結果というか、シャッターも閉まっているし路上で座るところもないからちゃぶ台のようなテーブルを出してコーヒーまでいれてくれたり、あまったからと魚屋さんが刺身の盛り合わせの差し入れをしてくれたり、シャッター壁画制作はけっこうパフォーマンス的な要素があって、人前で絵を描いているといろいろな人たちが助けてくれていました。

ある日、ばかどかいシャッターの話が来たのです。商店街の方に「商店街はお金を持っているからここをきれいにしてくれ」と言われて取組むことになったのですけれども、そのときは、大きさに学生たちもびびって、「これは2か月3か月かけて描くのだったらまず体力作りをしましょう」と言って、防府市の右田ヶ岳という手ごろな山があるのですが、そこに登ったこともありました。また、この近辺で言うと北九州市の商店街で展開していた似たような感じでしょうか、シャッター壁画をやったというところの例とかを視察に行くこともしました。

長年やっている、ときわ公園や文化関係の部署ではなくて、土木建築部のようなところからオファーがあり、まちなかアートフェスタをやりたいのだけれども一緒にやってくれないかという話が来たこともあります。山口大学の先生が入ってくださって、展覧会を組んだり、そこに参加したり、ワークショップを頼まれて入れ込んだり。講演会なども企画しました。建物、商店を取り壊して広がる空き地をキャンパスにして、地上絵を描いたのですが、夜、ろうそくで灯すといいと言ってろうそくで火をつけてくれる人がいたり、そういう展開もありました。更に、コンテナハウスを作るのでということで、トイレの外壁に描いてくれないかとか、シャッター壁画を中心にいろいろな話に、広がってきました。

無人駅を舞台に何か展開できないかと、話は、もともとは宇部線100年ということで何かできませんかという市の担当の方から話があり、無人駅には興味があり企画を出しましたが、なかなかJRの了解が得られないのが現状です。今現在、一つの駅しか実現できていないのですが、今後、駅でも様々な展開できたらと思っています。

今後の課題としては、シャッターに執着するつもりはなく、いろいろなところで地元をテーマに展開していきたいなと思っています。

まとめとしては、いろいろあるのですけれども、一つ言いたかったのが、内容を考えていくことです。なぜそこでやっているかという大事な部分を見失わずやらないといけないなと感じています。国際展だろうがローカルだろうが、そう思います。

以上で、発表を終わります。

## 2019年度 創造都市ネットワーク会議（総会）

日時：令和2年2月5日（水）

会場：アクトシティ浜松 コンgressセンター41会議室

**司会** ただいまから「創造都市ネットワーク日本 2019年度創造都市ネットワーク会議 総会」を開催します。

本日の会議の司会進行を務めます、浜松市市民部創造都市・文化振興課創造都市推進担当課長の鈴木と申します。どうぞよろしくお願ひします。

はじめに、本ネットワークを代表して、浜松市長鈴木康友よりご挨拶を申し上げます。

### 鈴木浜松市長

皆さんこんにちは。令和元年度ですね。CCNJの総会開催にあたりまして、中岡司文化庁次長、そして顧問の佐々木雅幸先生、元文化庁長官の青木保顧問、ようこそ浜松へお越しいただきました。また、ご多様な中、多くのCCNJの関係者の皆様にご参加をいただきまして、厚く御礼を申し上げます。

2013年にこのネットワークができたわけですが、浜松市もそのメンバーとして最初から参加をさせていただいておりまして、昨年度と今年度、代表幹事都市を務めさせていただいております。微力ながらこのCCNJの活動の推進に頑張っていきたいと思っております。

この創造都市の考え方、活動というのは、私は今追い風ではないかと、勝手にこのように思っています。というのも、今ご案内のとおり、地方創生ということが国の大きな方向として打ち出されております。令和の時代になりまして、いよいよ人口が減って、本格的な人口減少時代になりましたけれども、大事なことは人口が少々減っても活力ある地域をどう築いていくかということでありまして、私なりの解釈でいきますとこの地方創生というのはそれぞれの地域がもっている資源や特性を活かし、知恵を出し、汗をかいて、それぞれの地域や都市を元気にしていく活動だと思っております。つまりこれは創造都市の考え方とよく似ていると。逆に言えば、この創造都市の考え方や活動で、これから地方創生を行っていけないのではないかと考えるのです。ぜひこの輪をもっと広げていきたいと思ひますし、今年には特に東京オリンピック・パラリンピックが開催されますけれども、国はこれをスポーツの祭典であると同時に文化の祭典にしているわけで、この日本の文化や芸術を大いに発信する、PRするいい機会ではないかと。それぞれの皆さん、ぜひこうした機会を活かしていただければと思っております。

浜松市は、2014年にユネスコの創造都市ネットワークの音楽分野で加盟が承認されました。案内資料での紹介のとおりですが、浜松にはヤマハ、カワイ、ローランドと、世界三大楽器メーカーが集積している。小さなところまで含めると、これだけ楽器メーカーが集積している都

市というのは世界にないということで、こうした特徴を活かして音楽のまち、音楽のまちづくりをこれまで取り組んでまいりまして、それをさらに加速させるためにユネスコのネットワークへの加盟にチャレンジしたところでございます。今、そうしたことをきっかけに、さらに音楽創造都市として歩みを進化させていこうと、市としての取組みをしているところでございます。また、浜松は楽器産業以外にも輸送用機器産業、オートバイとか自動車のまちでございまして、スズキ、ホンダ、ヤマハ発動機も浜松からスタートいたしました。トヨタ自動車も、もともとは隣の湖西市というところが発祥でございまして、いわばこの浜松というのは、自動車産業の発祥の地と言っても過言ではありません。

なぜこういう産業が興ったかということなのですが、一つはこの浜松の郊外、天竜地域の素晴らしい木材が供給できるということ。もう一つは、ここは綿花栽培が盛んなところだということで、綿織物が盛んになりました。ですから、その綿織物を織るための織機、トヨタもともと豊田織機からスタートし、スズキも鈴木織機からスタートいたしました。ヤマハが楽器作りを始めたのも、ここに素晴らしい木材があるからということで、和歌山から来た山葉寅楠（やまはとらくす ※ヤマハの創業者）がここで楽器産業を興したのです。

つまりほとんど創造的活動のなせる業であると。繊維産業、木材を起点にして、これだけの産業が築かれたと。県庁所在地でもない地方都市が、そうした産業の力でここまで発展して80万人の人口を抱える政令指定都市になったということは、これは際立った浜松市の特徴でありまして、こうした自立的発展を遂げてきたというのは、まさにそうした先人の皆さんの創造的活動のなせる業ではないかと思っております。これから地方創生の時代でありますけれども、いよいよこの創造都市の考え方や活動は大事になってくると思っております。そういう意味で、皆様と一緒にこの活動をもっと盛り上げていきたいと思っております。

今日は、この後、浜松科学館というところをご覧いただくわけですが、ここは、今お話し申し上げましたように、浜松の産業の歩みでありますとか、技術、いろいろな仕事をご覧頂ける場所でもございます。名誉館長は、ノーベル物理学賞を受賞されました浜松市出身の天野浩先生で、青色発光ダイオードの研究で受賞されました。浜松出身ということで、今、名誉館長を務めていただいております。ぜひ科学館もお楽しみいただきたいと思います。

本日の総会にご参加の皆様にとって有意義な会となりまして心からご祈念申し上げます、冒頭のご挨拶にかえさせていただきます。本日は、ご参加誠にありがとうございました。

**司会** ありがとうございました。

続きまして、文化庁次長、中岡司様よりご挨拶を頂戴します。中岡様、よろしくお願ひいたします。



### 中岡文化庁次長

こんにちは。ただいま紹介いただきました文化庁次長の  
中岡でございます。

この浜松という土地は、先ほど市長からもご紹介があつたように、ものづくり、あるいは科学技術の伝統があり、素晴らしい都市です。実は二十数年前に、私は有馬文部大臣の秘書官でした。有馬先生は、この浜松一中出身でしたので、浜松一中、今の浜松北高校に寄せていただきました。そういう伝統があるということは聞いていたのですけれども、最近、プラタモリで浜松のことをしっかり勉強させていただきまして、益々浜松のことが好きになったわけです。

本日はCCNJの総会ということで、青木先生、佐々木先生を前に、一言ご挨拶を申し上げます。

本日はご多忙の中、創造都市ネットワーク日本の総会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、本総会の開催にあたりまして、今年度のCCNJ代表幹事団体であり、今回の開催都市でもあり鈴木市長はじめ浜松市の皆様方、感謝申し上げます。

さて、文化庁におきましては、3年前に改正いたしました文化芸術基本法や文化芸術推進基本計画に基づきまして、団体、企業等の民間の方々や協働しながら、観光やまちづくり、国際交流、産業等の関連分野における施策と連携をしつつ、文化芸術により生み出される多様な価値を文化芸術の承継、発展及び創造に活用するためにさまざまな施策を推進しているところでございます。この文化芸術創造都市事業も、文化芸術の創造性を活かして多様な地域課題の解決や地域の活性化を図る取組みでございます。それぞれの地域の方々が、いかに多様な文化資源を活かし、ブラッシュアップいたしまして定着化し、そして長続きするようにしていくということが文化芸術創造都市の根幹でございます。この取組みを推進することが経済的な好循環を生み出すことはもちろんのことでございますけれども、地域の誇りや活力につながって、ひいては少子高齢化などの成熟社会に根差す社会課題の解決、あるいは国際的な貢献にも資するものであると考えております。また、CCNJの取組みを通じまして、文化芸術創造都市に取り組む各地の皆様がそれぞれの地域の成功事例や課題を共有し地域間の人的なつながりを生み、創造都市相互の発展に寄与することを大いに期待しているところでございます。

先ほど市長からもございましたけれども、2020年は東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される年でございます。オリンピック憲章におきましては、オリンピックはスポーツの祭典だけではなく、文化の祭典でもあるということでございます。文化庁におきまして、このオリンピック・パラリンピックを契機といたしまして、日本文化の魅力を国内外に発信するために、国の一大プロジェクトといたしまして「日本博」を全国各地で開催することとしております。この「日本博」は、地域固有の文化資源を最大限活用し、観光やまちづくりといった分野と連携しながら、地域の活性化につなげるための絶好の機会になる

ものと考えております。本日お集まりのCCNJの皆様におかれましては、文化による地方創生に取り組みされてきたトップランナーとして、「日本博」や文化プログラムの各地域における推進役を担っていただきますとともに、この機会を通じて2020年以降のレガシー、そして新たな文化的、社会的、経済的価値を目指していただければと考えております。文化庁におきましては、2020年以降も見据えまして、「日本博」をはじめとするさまざまな施策を通じて我が国の文化の一層の振興に努めてまいりたいと考えております。ご出席の皆様におかれましても、我が国の豊かな文化芸術の創造と発展のために、引き続きご尽力を賜りますことをお願いしたいと思います。

この「日本博」事業なのですけれども、そもそも日本の素晴らしい文化芸術につきましても、個々の団体が各地域で取り組まれております。そういったことにつきまして、SNSを通じて外国人の方々間で情報交換されておりますので、日本の深いところに、各自行かれていらっしゃると思いますけれども、我が国としてどういうものがお勧めできるか、とりわけこの極東の不思議な国であります日本でどのような文化芸術が目指されてきたか、どのような背景、歴史、そういったものがつながっているのだといったところを、大系的に見せていこうというような野心的なものになっております。実は、財源につきましても、これまでの文化庁の財源を使いますとどうしてもさまざまな軋轢が生じますので、国際観光旅客税を今年度は大体520億円、来年度は540億円、そのうちの約100億円を文化庁で執行するということになっておりますけれども、来年度はそのうちの45億円を「日本博」に投入いたします。そして、いろいろな機会を通じて発信する。そういったものを目指して、志の高いインバウンドの方々を日本を知ろうと、理解しようということで国境を越えられる、そのようなコンテンツを取りそろえていきたいと考えています。

結びになりますけれども、本日の総会が皆様にとって多いものとなり、それぞれの文化芸術創造都市の取組みが一層充実したものとなることを祈念いたしまして、開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

**司会** ありがとうございます。ここで、鈴木市長、中岡様は、次の公務のためご退席となりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、議事に入ります前に、議長の選出を行います。事務局案としまして、浜松市民部文化振興担当部長の寺田を指名したいと考えております。ご賛同いただける方は、拍手をもって承認いただければと思います。

(拍手)

ありがとうございます。

それでは、ここからの議事の進行は、寺田部長にお願いしたいと思います。寺田部長、議長席への移動をお願いいたします。

**議長** ただいま議長に指名されました、浜松市市民部文化振興を担当しております寺田でございます。議事の円滑な進行につきまして、皆様方のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最初に、本日の出席会員数について、事務局から報告をお願いいたします。

**事務局** 事務局を担当しております、浜松市市民部創造都市・文化振興課の新山と申します。

本日の会議の自治体・団体・個人会員の出席者数についてご報告します。自治体が36団体、自治体以外の団体が8団体、個人会員1名、計45構成員の参加となっております。以上でございます。

**議長** ありがとうございます。それでは、議案の審議に入りたいと思います。第1号議案「令和元年度事業報告について」、事務局から説明願います。

**事務局** では、第1号議案「令和元年度事業報告について」で説明します。議案書の1ページをご覧ください。また、スクリーンには今年度の事業の様子を投影しますので、併せてご覧ください。

最初に「創造農村ワークショップ in 豊岡市」についてです。9月6日、7日に兵庫県豊岡市で開催しました。基調講演は、劇作家、演出家であり、劇団青年団主宰の平田オリザ様より「この街で世界と出会う」をテーマに、今年度開催された演劇祭や豊岡市での新たな取組みを中心に講演をいただきました。パネルディスカッションでは、「創造農村の創造性と多様性」と題し、豊岡市内のアーティスト・イン・レジデンス施設である城崎国際アートセンターの館長や元地域おこし協力隊の方、2名にパネラーとしてご登壇いただきました。本日は、開催地である豊岡市の方から補足と感想等をいただこうと思いましたが、残念ながら豊岡市の職員の方は本日欠席ということで、代わりにメッセージを預かっておりますので、私が代読させていただきます。

「本来、開催地として総会に出席し、ご挨拶させていただくべきところですが、急遽不参加となりましたことをお詫び申し上げます。昨年の「創造農村ワークショップ in 豊岡市」開催時には、全国からご参加いただきありがとうございました。豊岡市の取組みをご紹介させていただく機会をいただき、佐々木顧問はじめ、事務局の皆様にも感謝いたします。さらに「創造農村ワークショップ」に合わせて第0回豊岡演劇祭にもたくさんご参加いただき、ありがとうございました。当日、平田オリザさんからもお話がありましたとおり、本年3月末に平田オリザさん主宰の劇団青年団の劇場「江原河畔劇場」がプレオープン、9月にはいよいよ第1回豊岡演劇祭を豊岡市内で開催します。第1回豊岡演劇祭は、城崎国際アートセンター、出石永楽館、江原河畔劇場などを会場に2週にわたり開催いたしますので、ぜひ皆さんもお越しください。今後も深さを持った演

劇のまちの実現に向けて取り組んでまいりますので、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。豊岡市環境経済部大交流課より」以上となります。

続きまして、議案書の2ページ「創造都市政策セミナー in 豊岡区」についてご紹介いたします。副題を「民間の力を活用した文化によるまちづくり」として、10月15日、16日に豊岡区で開催いたしました。1日目は、基調講演、パネルディスカッション、庁舎まるごとミュージアムの視察を実施しました。基調講演では、豊岡区長の高野之夫様より「財政再建から文化政策への軌跡」をテーマにお話しいただきました。パネルディスカッションでは、豊岡区のまちづくりの中心を担っている民間企業や地域で精力的に活動している方々など5名をパネリストにお迎えし、「民間の力を活用した文化によるまちづくり」をテーマに、それぞれ取組事例を紹介いただきました。庁舎まるごとミュージアムの視察では、東アジア文化都市2019豊岡関連企画などをご覧いただきました。翌日は、東京建物brillia HallやIKEBUS、東アジア文化都市2019豊岡のスペシャル事業など、豊岡区に新しくオープンした劇場や新たな移動手段、東アジア文化都市事業の視察を実施しました。

それでは、ここで開催地となりました豊岡区の方から補足と感想をいただければと思いますので、豊岡区の方、よろしくをお願いいたします。

**豊岡区** ただいま紹介いただきました、東京都豊岡区文化デザイン課長の渡邊と申します。よろしくをお願いいたします。

はじめに、今回の10月15日、16日のこのセミナーに、多くの皆様からご参加いただきまして、誠にありがとうございました。豊岡区では、文化によるまちづくりをテーマにしまして、これまで区政を進めてまいりました。その一環として、昨年、「東アジア文化都市2019豊岡」を開催いたしまして、その連携企画として今回の創造都市政策セミナーを実施させていただきました。

10月15日、第1日目につきましては、基調講演として高野区長が「民間の力を活用した文化によるまちづくり」というテーマで行いまして、その次に豊岡区のまちづくりの中心になっているキーパーソンをお招きしてパネルディスカッション、また東アジア文化都市2019豊岡の説明を行った次第でございます。高野区長の基調講演では「財政再建から文化政策への軌跡」と題しまして、平成11年には財政破綻のピンチをどのように脱却してきたのか、そしてこれまでの間、豊岡区のまちづくり、文化政策はどのように進められてきたのか、お話をいたしました。区長からは、いかに民間企業や地域の方々を巻き込んで施策を実施してきたかということをご説明させていただきました。また、基調講演のまとめといたしまして、これからの自治体は稼げる自治体、これは今区長が盛んに申しているのですが、儲けるということではなくて、稼げる自治体を目指していく。この稼げる自治体という視点が重要であるということをお話して、ご説明をさせていただいた次第です。

続いてのパネルディスカッションにおきましては、「民間の力を活用した文化によるまちづくり」をテーマに、パネリストとして地域で活躍されている方を中心に、ファシリテーターとして一般社団法人芸術と創造代表理事の綿江様に進行をお願いして、説明をしていただきました。この中で、どのように豊島区と民間が連携して物事を進めているのか、区長のリーダーシップだけではなく、行政がどのように動いていけば民間の方と組みやすいのか、また物事を進めやすいのかというようなことを、皆様にお話ししていただきました。パネルディスカッションのまとめとしましては、豊島区は文化のために文化のことをやっているわけではなく、まちづくりや福祉、子育て等、いろいろなものに文化が波及して、必ずしも文化の部署だけでやっていることではないと。文化を中心にいろいろな施策を展開するというものの、行政の一つのあり方ではないかということと締めくくりをさせていただき、セミナーを終了した次第でございます。

そして、そのセミナーの終了後に、庁舎の中を見させていただきました。庁舎の中は、絵を飾ったり、区民の方の作品を飾ったりという、ミュージアム的な機能もっております。そういったところをご視察いただいたものと、そのほかの3枚のスライドにつきましては、今回の東アジア文化都市の記念事業として新しく建てたホール、そして赤いバスがありますが、これは電気バスでございます、時速は19キロしか出ません。このようなバスを、今、池袋を中心に走らせております。このような紹介をさせていただき、一番下の右側のところには、東アジア文化都市の一つのプロジェクトも紹介させていただいた次第でございます。

参加いただいた方に非常に熱心にご見学いただきまして、また、その後お問い合わせもいただいたということで、非常に皆様、熱心に参加していただき、活発に意見交換をさせていただいたことは、私たちにとっても非常に勉強になったところでありますが、この開催が10月15日、16日ということで、実は東アジア文化都市の閉幕が11月に迫っております、なかなかこちらのセミナーの準備に行き届かなかったところが多くあったかと思っております。ご参加いただいた皆様、そして出席しなかったのになかなか都合がつかなかったという方には、非常にご迷惑をおかけした次第でございますが、今後ともこの文化による力を信じながら、豊島区として政策を進めていきたいと考えております。この度は貴重な機会を頂戴しまして、本当にありがとうございました。報告は以上でございます。

**事務局** 豊島区様、ありがとうございました。

続きまして、議案書の3ページ「現代芸術の国際展部会 in 宇部市」についてご報告いたします。

こちらは、令和元年10月17日、18日に宇部市で開催いたしました。「現代芸術の国際展部会」は、平成27年度に設立され、今回の部会で4回目の実施となります。グループミーティングや視察等を行い、国際展に携わる自治体等の職員が課題やノウハウ等を共有することで、国際展の発展

的な継続開催を目指すことを目的としています。

1日目は、基調講演、担当者ミーティングを行いました。基調講演では、多摩美術大学学長の建島哲様より「地域に受け入れられるアートフェスティバル」をテーマにご講演いただきました。担当者ミーティングでは、三つのテーマを設け、3名の講師にご講演をいただいた後、グループディスカッションを行いました。翌日、18日は、同時期に開催しておりました「第28回UBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）」や山口情報芸術センターの視察を実施しました。

続いて、議案書4ページ、分科会の報告も併せていたします。こちらの分科会は、CCNJのネットワーク拡大と、さらなる連携を目的に、昨年度より各ブロックで実施しており、今年度は中国・四国ブロックのみでの開催となりました。こちらの中国・四国ブロックは、10月17日に「現代芸術の国際展部会 in 宇部市」の開催と併せて実施いたしました。公立文化施設を取り巻く現状とその対応について講演いただいたほか、文化庁より文化庁の機能強化と地方における文化行政の状況をお話しいただきました。自治体職員のほか、公立文化施設の職員などにもご参加いただきました。

それでは、ここで開催地となりました宇部市から、補足とご感想をいただければと思います。よろしく願いいたします。

**宇部市** 山口県宇部市の安光と申します。お世話になります。

それでは、ご報告をさせていただきます。先ほど事務局からご説明をいただきましたとおり、「第28回UBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）」の開催に合わせまして、4回目となります「現代芸術の国際展部会」を、昨年10月17日、18日に宇部市で開催させていただきました。また、国際展部会の開催に合わせまして、1日目の10月17日に「中国・四国ブロック分科会」を開催させていただきました。ただいま豊島区からご報告がございましたように、前日、前々日がちょうど豊島区で開催されました「創造都市政策セミナー」に引き続いての連続開催ということで、非常に日程的にタイトではございましたが、大変多くの方にお越しいただきまして、本当にありがとうございました。

内容につきまして、まず1日目は、基調講演といたしまして、多摩美術大学の建島学長から「地域に受け入れられるアートフェスティバル」と題しまして、これまでさまざまなアートフェスティバルに芸術監督として携わってこられましたご経験をもとに、実際の成功事例等をご紹介いただきながら、アートディレクターのお立場からのご講演をいただきました。その後、担当者ミーティングでは、3人のモデレーターからそれぞれのテーマに沿って発表していただいた後、三つのグループに分かれてグループディスカッションを行っていただきました。この担当者ミーティングと並行して別会場で開催いたしました「中国・四国ブロック分科会」では、文化庁地域文化創生本部の後藤調査役から「最近の国の文化行政の動向について」というテーマで、文化庁の関西・京都移転と機能強化について、また、

日本芸術文化振興会の柴田英杞プログラムディレクターから「指定管理者制度下における近年の劇場・音楽堂の動向と今後の課題」というテーマで、公共施設の適正管理のあり方等について、それぞれ分かりやすくご説明をいただきました。

2日目は、オプションルツアーといたしまして、「第28回UBEビエンナーレ」の会場をご覧いただきました。野外彫刻展ですので天候が心配されましたが、皆様の思いが通じたのか、ちょうど視察のタイミングで雨が上がりまして、実際の彫刻にも触れたりしていただき、「UBEビエンナーレ」の魅力を体感していただけたのではとっております。

ご参加いただきました皆様方には、宇部市が戦後の復興期に直面いたしました公害を克服し、工業都市として発展を遂げていく過程で、これまで60年近くにわたり取り組んでまいりました「緑と花と彫刻によるまちづくり」の歴史と、これからも持続的に発展していこうとしている姿を共有させていただけたのではとっております。この度、「現代芸術の国際展部会」並びに「中国・四国ブロック分科会」の開催都市として、このような貴重な機会をいただきましたことに対しまして、改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

**事務局** 宇部市様、ありがとうございました。

事務局より、第1号議案「令和元年度事業報告について」は、以上となります。

**議長** ありがとうございました。ただいまの事務局の説明につきまして、ご意見、ご質問のある方は挙手をお願いいたします。よろしいですか。

では、本議案の承認についてお諮りしたいと思います。本ネットワークの規約第10条第3項の規定により、総会にご出席の構成員の過半数をもって議決となります。先ほど報告を受けたとおり、本日の出席団体数は45ですので、過半数は23となります。なお、採決の方法については、各団体代表1名及び個人会員の方の挙手にて行わせていただきたいと思いますので、よろしくをお願いいたします。

それでは、第1号議案「令和元年度事業報告について」、議案を承認いただける方は挙手をお願いいたします。

（賛成者挙手）

ありがとうございます。賛成多数ですので、第1号議案は承認とされました。

それでは、引き続き第2号議案「令和2年度事業計画(案)」について、事務局より説明をお願いいたします。

**事務局** それでは、第2号議案「令和2年度事業計画(案)」についてご説明します。議案書5ページをご覧ください。各事業の開催地、日程についてご確認いただければと思います。上から順にご説明いたします。

1番「ネットワーク会議（総会）」は、令和3年の1月から3月頃の開催を予定しております。開催地につきまし

ては、来年度の代表幹事都市で行いたいと思っております。

続いて2番「創造都市政策セミナー」、こちらの開催時期は令和2年11月頃、北九州市で予定しております。こちらは、「東アジア文化都市2020北九州」と連携しての開催予定になります。

続いて3番「創造農村ワークショップ」、こちらの開催時期は令和2年秋頃を予定しております。開催地としましては、熊本県の多良木町を予定しております。

4番「現代芸術の国際展部会」、こちらの開催時期は令和2年秋頃を予定しております、開催地は横浜市を予定しております。こちらは、「ヨコハマトリエンナーレ2020」と連携しての開催予定になります。

5番の「分科会」につきましては、開催を希望するブロックで実施を検討していきたいと思っております。

6番「その他」、こちらはCCNJの規約第4条に掲げる事業として、こちらの規約に関する事業を行ってきたいと思っております。

これらの事業に関しての開催時期は、今のところすべて予定となっております、詳細が決定次第CCNJのホームページ及び皆様にお送りしているメールニュースでご連絡をしていきたいと思っております。

第2号議案「令和2年度事業計画（案）」についての説明は、以上となります。

**議長** ありがとうございます。ただいまの事務局の説明につきまして、ご意見、ご質問のある方は、挙手をお願いいたします。よろしいですか。

それでは、本議案の承認についてお諮りします。第2号議案「令和2年度事業計画（案）」について承認いただける方は、挙手をお願いいたします。

（賛成者挙手）

ありがとうございます。賛成多数ですので、第2号議案は承認されました。

それでは、来年度事業として承認されました各事業の開催自治体より、開催に向けた意気込みなどを一言ずつちょうだいしたいと思います。

まずは、「創造都市政策セミナー」を開催いたします北九州市よりお願いいたします。

**北九州市** 令和2年度に政策セミナーを実施します北九州市です。

北九州市では、今年、「東アジア文化都市2020北九州」を開催いたします。先ほどもご説明がありましたように、政策セミナーもこの東アジア文化都市と関連して行う予定です。

ここで「東アジア文化都市2020北九州」の紹介を簡単にさせていただきたいと思っております。東アジア文化都市は、九州での開催は初になります。韓国の開催都市は順天堂大学の順天と書いて順天市、中国は揚州市です。3月28日の開幕式を皮切りに約1年間、さまざまな文化交流事業を3都

市で行っていきます。現在は、「東アジア文化都市2020北九州」の開幕式に向けて、プレ事業、オープニング事業に取り組んでいる最中でございます。オープニング事業では、和食をテーマとしたシンポジウムや地酒祭りなど食のイベントを中心に実施していく予定です。

また、集中的に文化事業に取り組むコア期間というもの夏と秋に設けて、東アジア文化都市を盛り上げていきたいと思っております。夏のコア期間には、伝統芸能をテーマにしまして、日中韓の伝統楽器や日本舞踊の創作上映など、国境や世代を越えて楽しめる事業を開催いたします。また、海外からの訪問客を日本文化でお出迎えする体験型のプログラムも企画しております。

秋のコア期間には、三つの事業を予定しております。まず一つ目ですが、SDGsをテーマにしたアートフェスティバル、まだ仮称なのですけれども、「ART for SDGs」を開催いたします。アート作品によってSDGsの17のゴールを可視化し、SDGsの理解を深めるとともに、国内外に発信していきたいと思っております。二つ目ですが、漫画やアニメ、映画などのメディア芸術をテーマに取り組んでいきたいと思っております。映画の街北九州として先駆的に取り組んできた北九州フィルムコミッションの実績など、本市の強みを活かした特徴あるイベントを実施していく予定です。三つ目は、文学をテーマに取組みます。本市には、本市に縁のある著名な作家や詩人が多数存在し、松本清張記念館などの施設も充実しております。また、2010年には、日中韓で文学フォーラムを開催した実績もありますので、このような本市のもつ豊かな文芸土壌を活かして、文学による東アジアとの交流を図るとともに、他の芸術分野とも連携した事業を開催していく予定です。そして、閉幕式は11月28日に実施予定です。また、日中韓大臣会合も本市で開催予定です。

なお、政策セミナーは、今のところ11月上旬を予定しております。先ほどご紹介しました秋のコア期間事業の一つである「ART for SDGs」に皆様をご招待できるように調整したいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。以上です。

**議長** ありがとうございます。続きまして、創造農村ワークショップを開催されます多良木町、お願いいたします。

**多良木町** 皆さん、こんにちは。熊本県の多良木町でございます。多良木町は町単独で9,500人くらいの小さな田舎町でございます。平成27年にこのグループに参加させていただきまして、今、頑張っているところでございますが、急遽開催ということで、知恵を出してお迎えしたいと思っております。

まず、多良木町をご紹介します。多良木町は、九州の真ん中の熊本県の南部の町で、人吉と球磨という盆地に囲まれたところです。球磨川という大きな川が流れておりまして、東西に流れているところに、その盆地の地区で10市町村が存在しております。その上流の方にあるのが多良

木町でございます。また、多良木町というのは、その字のとおり、大きい、よい木があるところということで、昔から非常に一次産業が盛んなところでございます。

また、歴史的には、多良木町としましては、平安時代におきまして京都の蓮華王院の小伝がありまして、鎌倉時代に入りました1197年に相良藩という武家が支配するようになりまして。相良藩は、このご当地の静岡県の牧之原市というのでしょうか、そちらから鎌倉幕府の命令で球磨地に行き治めなさいということで来ていただいたのが、私どもの多良木町でございます。一代目の頼景からずっと約700年くらい、明治維新まで相良藩が支配してきたところでございますので、非常に独特の文化が形成されております。長く藩を支配したというのは、鹿児島島の島津家でありまして、壱岐対馬の宗家でありまして、それと匹敵するくらいに、私どもの町を含む球磨の方を相良藩がしております。

特産品とかという話では、海がありませんので、農林業が中心でございますけれども、特徴的なのは、相良藩が治めておりました戦国時代の、記録によりまして1500年頃に、米によりまして焼酎ができたということになっております。なぜ米で作ったかということ、鹿児島県は芋で作っております。大分県は麦で作っております。熊本県の球磨は、当時、米が余ったみたいなのです。隠れて田んぼを作っていたのではないかとということで、米を原料に戦国時代に焼酎が作られて、今もずっとその文化が続いておまして、現在、多良木町は先ほど言いましたように9,500人の町ですけれども、七つの焼酎蔵がありまして、独特の焼酎をそれぞれに作っているところでございます。

それから、先ほど言いましたその盆地に、柳田國男先生が来られまして、日本一豊かな隠れ里という名前と一緒に頑張らして、日本遺産の認定を受けているところでございます。それから、江戸時代の後期から球磨川に水路を2本通しまして、山手の方に新田を開いたということで、世界かんがい遺産にも登録されているところでもあります。そういう地区でございます。

それから、町の方、先ほどお話がありましたように、地方創生に頑張っておまして、平成29年、3年前から取り組んでおります。名も知れぬ町ですので、地元の産品をブランド化しようということで頑張っておまして、成果としましては、地元の野菜を使ったドレッシングを4種類生産販売しております。それからもう一つは、米が美味しいところなのですけれども、米を頑張ろうということで、平成29年に11人の若い青年が集まりまして、旨い米を作ろうということで、平成30年、翌年に九州の食味、米の味コンクールに出品いたしましたところ、初めての出品で、個人賞も含めて150近い九州関係の自治体が参加した中で、優勝してしまいました。これは大変だということで今年もまた出しましたら、2年連続の優勝でございました。そのように地元産品をブランド化したということで、ほかの農家の皆さんとか林業の皆さん、それから町民の皆さんは誇りに思っておられます。

そのようなことで、多良木町も地方創生に取り組んでおりますけれども、今後、また内閣府なども言っておりますけれども、今、田舎町ですけれども、昔言いました交流人口から関係人口を少しずつ増やしていこうということで、今後、また取り組んでいきたいと考えておりますので、この機会もよいチャンスではないかと思っております。

先ほど申しましたように、田舎町でございますので、歓迎はできませんけれども、地産品でおもてなしをいたします。それから、焼酎はどんどん飲んでください。焼酎文化がまだ残っております。小さい町ですけれども、精いっぱい頑張りますのでよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

**議長** ありがとうございます。続きまして、「現代芸術の国際展部会」を開催する横浜市よりお願いいたします。

**横浜市** 横浜市でございます。よろしくお願いいたします。

今年、横浜市では、2001年のスタート以来、7回目の開催となります現代アートの国際展「ヨコハマトリエナーレ2020 Afterglow-光の破片をつかまえる」というタイトルで、7月3日の金曜日から10月11日の日曜日まで、みなとみらい地区にあります、横浜美術館と、プロット48で開催いたします。令和2年度のCCNJ現代芸術の国際展部会は、その開催に合わせまして、横浜で、今、資料では今年の秋頃と表記させていただいておりますが、もう少し早目になりまして、今のところ8月の下旬頃を予定しております。なお、タイトルの「Afterglow」という英語ですけれども、これは残光、光の名残りといった意味でございます。私たちが日常生活の中で知らず知らずのうちに触れていた宇宙誕生の瞬間に発せられた光の破片を指すものということで選ばれた言葉でございます。少し難しいですね。私も、言っていてあまりよく分かっていないところがあります。

今回は、インドを拠点に活動いたします三人組のアーティスト集団「ラクス・メディア・コレクティブ」が、横浜では初の外国人としてのアーティストック・ディレクターを務めます。彼らのディレクションの特徴というのは、テーマというものにあえて示さずに、発想の原点であるソース（source）をアーティストや鑑賞する方、そのほかいろいろなかかわる方々と共有していった思考をともに続けていくという、エピソードという短期間のイベントを断続的に行っていくことで、全体としてのトリエンナーレを形作るという手法でございます。そして、昨年の11月に最初のエピソードとなります「エピソード00 ソースの共有」が行われたところでございまして、このトリエンナーレの期間までに今後も断続的にエピソードを積み重ねていくとされております。

文化芸術創造都市横浜を象徴するプロジェクトとして開催を重ねてまいりましたヨコハマトリエナーレを、ぜひこの機会に皆様にご覧いただきまして、CCNJ参加の自治体の皆様にとって参考になればと考えております。

なお、昨年のラグビーワールドカップ、そして今年の東京オリンピック・パラリンピックということで、横浜では非常に盛り上がっているところでございますが、近年はグローバル企業のオフィスや商業施設の集積がようやく進んでまいりましたみなとみらい地区、それから、今年、いよいよ6月に供用開始となります横浜市役所の新庁舎など、続々と新たな展開を見せます横浜の今のまちの姿も、ぜひ併せてご覧いただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

**議長** ありがとうございます。それでは、進めさせていただきます。議案の審議でございます。第3号議案になります。資料は、6ページになります。「次期幹事団体の改選（案）について」、事務局より説明をお願いいたします。

**事務局** 第3号議案「次期幹事団体の改選（案）について」をご説明いたします。議案書6ページ、裏表紙をご覧ください。CCNJ規約第8条により、幹事団体を本ネットワークに参加する基礎自治体から選出し、基本的運営義務を担う幹事団体代表を置くこととしています。また、幹事団体の任期は、2年となります。今年度が2年目となります。そこで、来年度からの改選（案）につきましては、今年度の当初にCCNJ参加団体の皆様へメールで行った調査をもとに作成いたしました。

こちらが改選（案）になります。上から札幌市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、高岡市、金沢市、可児市、浜松市、京都市、神戸市、丹波篠山市、宇部市、高松市、北九州市、大分市の17自治体になります。任期としましては、令和2年4月1日から令和4年3月31日までとなっております。こちらが、改選（案）になります。また、代表幹事都市を京都市ということで、案として設定しております。

第3号議案「次期幹事団体の改選（案）について」は、説明は以上となります。

**議長** ありがとうございます。ただいまの事務局の説明につきまして、ご意見、ご質問のある方は挙手をお願いいたします。

それでは、本議案の承認についてお諮りいたします。第3号議案「次期幹事団体の改選（案）について」を承認いただける方は、挙手をお願い申し上げます。

（賛成者挙手）

ありがとうございます。賛成多数ですので、第3号議案は承認とされました。

それでは、次期幹事団体の代表である京都市よりご挨拶をちょうだいしたいと思います。お願いいたします。

**京都市** 京都市の文化芸術政策監の北村と申します。

ただいま、第3号議案で次期幹事都市にご選定いただきまして、また代表幹事として重責を承りました。ありがとうございます。本来であれば、門川大作京都市長がご挨拶

に寄せていただきたいと申ししていたのですが、3日前が選挙でして、終わったところでその整理で忙しくて、とても時間がとれませんでしたので、代わって私からご挨拶を申し上げます。

もう間もなく、4年前になるのですが、平成28年の3月に文化庁が京都に全面移転するという決定をいただきました。佐々木先生にも多大なご支援をいただいて、ようやく実現するという運びになりました。それから遡ること平成25年に、私ども京都市は創造都市の仲間に入れていただきまして、2017年には東アジア文化都市に選定され、今も中国、韓国との文化交流が続いています。今や京都市政の最重要方針に、文化を基軸としてあらゆる施策と融合しているということが示されておりまして。それから、先ほど鈴木市長がおっしゃっていたように、非常に文化にとって追い風であるということで、非常に私どもにとっても有難いと思っています。

いくつかキーワードがあるのですが、先ほど文化と経済の関係、やはり文化が経済を支え、経済が文化を支えるという関係は、ややもするとあまり直視されてきませんでした。そういう部分をしっかり見つめていこう。また、生活文化、暮らしの文化というものが、なかなか便利さや快適さを追求する中で、四季折々の日本にあって、いろいろな宗教的なことも含め、目の前の生活から遠ざかっている。そういったことをしっかり生活の中に取り入れよう。それから、文化財の保存と活用については、私は二条城の所長もしているのですが、しっかり保存しながら活用していくということをテーマに進めております。

いよいよ2020年、まだ先かなと思ったら、年が明けて2020年になりました。先ほど来お話が出ています日本の美を発信する「日本博」。私どもも京都市京セラ美術館を3月にオープンするのですが、美術館でも「日本博」を開催いたします。

引き続き私どもとしても、文化庁が移転して来られる京都において、文化を中心に進んでいきたい。これが市長の方針でもございます。創造都市の中では後輩にあたりますので、先輩都市の皆さんのご指導をいただきながら、また引き続き佐々木先生のご指導も賜りながら、創造都市代表幹事都市としての責任を果たしていきたいと考えておりますので、ご指導いただきますようお願い申し上げます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

**議長** ありがとうございます。

以上をもちまして、予定してましたすべての議案審議を終わります。皆様方には、議事の円滑な運営に格別のご協力を賜りまして、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。ここからは、事務局にマイクをお返しします。よろしく申し上げます。

**事務局** 続きまして、次第の4になりますが、CCNJ新規加盟団体の紹介を行います。昨年度の総会より新規に加盟

いただいた団体が6団体、個人の方が1名ございますので、本日ご出席いただいている新規加盟団体、個人の会員をご紹介しますと思います。時間の都合上、お名前のみお呼びしますが、恐れ入りますが、その場でご起立をお願いいたします。

まず、北海道旭川市。菊池歩様。株式会社ダン計画研究所。そのほか、本日は残念ながら欠席となっております4団体、お名前のみご紹介いたします。神奈川県茅ヶ崎市、一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン、茨城県水戸市、神奈川県鎌倉市でございます。ありがとうございました。

それでは、CCNJ新規加盟団体を代表いたしまして、旭川市よりご挨拶をいただきたいと思います。ステージ上にてお願いいたします。

**旭川市** 皆様、こんにちは。旭川市経済部産業振興課の杉山と申します。

今回、新規加盟団体6団体と個人1名、大変僥越でございますが、代表してご挨拶させていただきたいと思っております。

この度はCCNJの加盟を認めていただきまして、誠にありがとうございます。このCCNJは、全国各地の地方公共団体ですとか、民間の団体ですとか、そういった方々が集いまして150を超える加盟をしております。日本全国にまたがるたいへん広域的な組織だと思ひまして、今後、こういった方々といろいろな連携事業を行う機会を得たということ非常に嬉しく思っております。また、今後の展開に非常に期待を寄せております。

せっかくの機会ですので、旭川市を少しご紹介させていただきますと、北海道のほぼ中央に位置しておりまして、人口が約33万人の中核中核都市でございます。産業といたしましては、大雪山連峰など豊かな自然資源を背景に、古くから農業ですとか木工業が盛んでございます。特に木工業は、豊富な森林資源を材料に、加工技術も優れておりまして、木製家具の産地として、100年ほどかけて形成してまいりました。最初は、花嫁箆箆ですとか、そういった婚礼の家具を中心としておりましたが、消費者の生活スタイルが変わりまして、そのことへの対応をするために、1970年代頃から海外のデザイナーを招へいし、世界のそういった先進的なデザイン思想を地域に取り入れる活動を進めてまいりました。1990年から国際家具デザインフェアという、3年に一度家具のデザインのコンベンションを実施しております。今年がちょうど11回目の開催となりますが、30年以上にわたりこの活動を続けてまいりました。2015年から、こういったデザインの活動を市民にも広げたいということで、旭川デザインウィークという事業を、これは毎年開催しております。

こういった活動が評価されまして、昨年、ユネスコ創造都市ネットワークにデザイン分野で加盟いたしました。今後は、そういった国際的な交流ですとか、またこのCCNJのネットワークを活用しながら皆様との交流を進めて、さ

さまざまな知識ですとか、知見の共有をしまして、CCNJの目的でもあります日本社会の創造的な発展に貢献してまいりたいと考えておりますので、よろしく願います。はなはだ簡単ではございますが、ご挨拶させていただきました。どうぞよろしく願います。

**事務局** ありがとうございます。

続いて、5「その他」として、せつかくの機会ですので、何かここでご意見、あるいはご報告事項等がございましたら、挙手にてご発言をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。それでは、本日は意見交換の場もでございますので、その折に改めてお話ししていただければと思います。

それでは最後に、全体を通じましてCCNJ顧問の青木保様と佐々木雅幸様より、それぞれ総括をいただきしたいと思います。まずは青木様、よろしく願います。

**青木顧問** 皆さん、こんにちは。本日は、創造都市ネットワークの今年度の事業報告、大変感慨深く拝聴いたしました。豊岡市の創造農村とか、豊島区の取り組み方、それから宇部市の国際展、それぞれ素晴らしい取り組みだと思います。また、来年度の素晴らしい計画も拝聴いたしました。創造都市ネットワークというのは、本当によく続いていると思って感激しておりますが、もともとは文化庁におりましたときに、文化芸術創造都市表彰というものの言い出しっぺなのです。それから始まりまして、今日、これだけ続いて、しかも大変熱心に取り組んでいただきまして、心から感謝し、また感激しております。

ただ、そのときに言われたのですけれども、文化では食っていけないとか、文化では生活できないとか、あるいは都市も成り立たないという意見も多いですね。ですけれども、実際に世界の都市を見てみると、文化がなければやっていけないところがたくさんあるのです。例えば有名なニューヨークに行っても、ニューヨークも、もちろん金融の中心地であり、政治経済、社会問題、大学や教育の中心ですが、同時にメトロポリタン・ミュージアムとか、そういう文化施設がなかったらあれほど人は行きません。頻りにいろいろなコンサートや展覧会やいろいろな文化行事をやっている。ニューヨークを取り上げたけれども、もっと小さな都市であっても、そういう文化がなければもちろんどこでも創造都市は成り立たないわけですから、実は文化を非常に豊かに創っていくということは、その都市の生命だと思います。

以前、観光庁ができるときの何とか委員にさせられていたのですが、当時は年間500万人、600万人しか来なくて、何とか800万人までいけないだろうかというようなご意見が多かったのですけれども、今や3,000万人を超して4,000万人の時代に入りました。観光公害とかいろいろなことと言われてはいますが、やはり世界から人が集まるということは、日本の発展、繁栄に結びつきますから、特に都

市はさまざまな文化的な目玉をつくって、世界から人を呼び、インバウンドとかアウトバウンドとか、とにかくいつも人がたくさん来たり往ったりしているというのは、繁栄の象徴ですね。

日本は、10年くらい前に500万人などと言っていた。そのときもうすでに、シンガポールで2,000万人とか、中国など5千万台の単位の都市がアジアでもありました。それが、いまや日本もこうなってきたわけですから、そのために行政的にもいろいろな不備があるとは思いますが、それに積極的に取り組んで、そして都市が活性化して、それから都市に人が集まる。都市に魅力があるということが、国全体を活性化し、また、世界の中でも大きな位置づけになります。先ほど市長がおっしゃったように、浜松は産業都市、もちろん楽器、それから自動車がありますし、また、すばらしい観光名所もたくさんありますが、私にとっての浜松というのは、何と言ってもウナギなのです（笑）。今日も、途中で逃げてウナギを食べて帰りたいと思っているのですが（笑）。そういう何か昔から続く素晴らしいものがあって、しかも美術館もある科学館もあるということになりますと、うなぎを食べる楽しみがまったく何倍にもなって、今度は逆に科学館に行く。いろいろな相乗効果があると思いますので、皆様にはぜひこうした面も含めて頑張ってくださいと思います。

去年はアイコムという国際博物館会議を京都でやらせていただきまして、私は日本の委員長なのですけれども、全世界から120か国参加して4,570人の参加者があり、前回のミラノなどと較べてもめっちゃめっちゃ多いのです。驚きました。一方、都市というものは小さければ小さいだけ魅力が出ることもある。大きなところは大きな利点があるのですけれども、いろいろなサイズに合った素晴らしいところ、きれいなまちづくりをする。やはり住民が自らきれいにし、どこに行っても緑があり、道路はいつもきれいに掃いてあるとか、そういうことが魅力でもあります。また行ってみようと、そのようになります。ウナギだけではありません。そういう創造都市づくりを私はお願いしたいと思います。

もう一つだけ申し上げたいのですけれども、先ほど東アジア文化都市会議が北九州市で今年行われるとのことでしたが、これも私、最初の第1回に出ているのです。これは、中国政府がもともと言い出したことです。今、国家間というのは、世界でどこに行っても関係がぎくしゃくしているのです。EUでもイギリスが離脱したり、東アジアも中国、韓国、北朝鮮、日本、東南アジアも国家間の関係は、今、非常に難しくなっている。それはいろいろな原因があるので、それが悪いとかいいとかいう判断ではなくて、なかなか意思の疎通がうまくいかない。だから、その場合に都市間というのは、これは民間と国の中間にあって非常にやりやすいですね。都市間の交流というものが、むしろ東アジアに限っても、平和を形成する土台になる。そういう都市と都市の関係というのは、非常にいろいろな意味で重要です。特に文化交流を中心にですね。



去年の3月まで六本木の国立新美術館というところの館長をやっていたのですけれども、そこで数年前に日本と韓国の現代芸術の合同展覧会を催しました。韓国から現代アーティストを6人、日本からも6人選びまして、両国の、韓国の現代美術館がソウルにありますから、そこと国立新美術館とで行いました。まず東京で開催し、それからソウルで開催しました。韓国の文化大臣が美術館にいらして、これはぜひやってくださいと言われましたし、それから、ソウルでも、私も開会式に出てあいさつもしましたけれども、満場の拍手で非常に温かく迎えられたので、国家間、政治的には非常に対立が激しくても、文化交流というのは、これは大きな可能性をもっていることを実感として思いました。

そういうわけで、東アジアの情勢も今非常に難しい時ですから、こういうときに、むしろ都市が自覚的にネットワークを広げていって、そして民間の外交を展開する、文化外交を展開して、そしてお互いの相互理解につなげるといような、非常に大きな任務が現代都市の義務としてあると思います。これからの一つの大きな課題ではないかと思っています。

皆さん、今後ともよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

**司会** 青木様、ありがとうございました。

続きまして、佐々木様、よろしくお願いいたします。

**佐々木顧問** 予定の時間がだいぶあるので、総括を長くやってもいいということのかなと思いつつ準備しておりました。

文化庁の京都移転という折に、私がたまたま文化庁の京都分室の室長を承っており、その最中に移転が決まりましたので、2021年までの移転の先行機関として地域文化創生本部を作り、40数名のメンバーが、いろいろな事業をやっております。去年の夏、あいちトリエンナーレで騒ぎがありましたね。あの助成金も地域文化創生本部が扱っております。そのときはいろいろございましたが、例えばさまざまな地域の文化拠点を推進するとかという助成金事業を扱っているのは、東京ではなくて今は京都で扱っております。皆さん方に関係するようなものを地域文化創生本部が段々増やしていくということをやっています。

そのうちの一つで、そもそも文化庁というのは非常に小さくて、予算の規模もマンパワーも小さいので、文化政策の面でもっとしっかりした研究やデータの蓄積をしなければいけないと思っていたので、今日、中岡次長も言いましたけれども、3年前、文化芸術振興基本法を文化芸術基本法に改正しましたが、その中で政策研究の強化することを書き加えているのですけれども、京都移転と合わせて本格的にやりたいということがあって、その前段として、例えば創造都市の政策評価の評価指標を研究してみたらどうかという提案をいたしました。これは、文化庁だけではできないので、6年前に京都の同志社大学に創造経済研究セン

ターをつくってもらって、そこに何人かの教員がいますので文化庁の共同研究という形で3年間やってきました。その最終のまとめを2月19日にやります。本来なら、この総会に付属したシンポジウムでやってもよかったのですが、2月19日に別建てで開催いたしますので、こちらにもぜひ皆さんにご参加いただきたい。

時間の制約もあるので、事例発表としては横浜市、京都市、高松市、鶴岡市、4市にお願いしますが、私が記念講演で金沢市の取り組みについても触れますし、基調報告をする大分の三浦さんが大分市と別府市の取り組みについてもお話しします。できる限りさまざまな実践的な経験の中からよりよい方向を生み出すという形にしていきたい。そういう思いでこのシンポジウムを計画しております。私は同志社大学は今年の3月末で最後なので、同志社で私が主催する最後のシンポジウムになるというつもりであります。どうぞよろしくお願いいたします。

それから、青木先生が今言われたように、創造都市ネットワークをつくるきっかけを文化庁が作っていただきました。青木先生が長官のときに「創造都市を応援したいけれども、文化庁はあまりお金がないのでどうしたらいいか」と聞かれて、では表彰状でも出してもらいましょうかというようなところから始めまして、最初の年には、当時横浜市が創造都市担当の事業本部を立ち上げて活動しており、そして金沢市は創造都市会議を始めていました。この二つの都市と、それから地域バランスもあるので、沖縄県から沖縄市ですね。それから、文化芸術の創造性というジャンルだけではなくて、文化景観というものもこれからの都市には大事だろうということで、近江八幡市、この4つを選んだのです。そこからスタートしまして約10年、表彰都市が広がってきました。その広がりをベースにして、創造都市のネットワークをつくるというところにきまして、2013年に横浜の創造都市センターにおいて立ち上げの会議をやらせていただきました。先ほど鈴木市長が言われたように、浜松市も最初からメンバーとして入っておられました。

この創造都市のネットワークを立ち上げる際に、私どもが当初参考にしたのは、カナダに創造都市ネットワークカナダというものがある、調査した時点でカナダでは約130くらいの自治体が入っておりまして、当時、私どもは22からスタートし、いずれ100を超えるネットワークに発展していきたいと思っておりましたが、現在のところ、先ほど数字が出ていましたが、府県15、自治体が99、計114ということで、数日のうちにまたいくつか増えるので、自治体100を超えるところまでできました。

2020年までに170自治体という目標を立てていますが、これは近藤誠一さんが長官をされたときに目標は少し大きいほうがいいだろうということで、全自治体1,700の1割ということから170を決めまして、これは引き続き追及する課題ではありますが、やはり我々としては、量も追及するけれども、内容が大事になってきますので、そういった意味ではネットワークによって何かそれぞれの自治体が創造都市として前進できるのか、中身をどのように充実させ

ていくか。そして、最終的には日本全体の再生をめざしていくことを確認したいと思います。まだ日本経済はデフレから脱却できないで、本当に情けない話ですけども、創造的な日本再生ということを目標にしていきたいと思っています。

このネットワークをつくるなかで、最初にどういう仕事をするかということ話し合っ、やはり一つはグローバルな流れを確認して、そしてその中で日本のネットワークの役割みたいなものを考えましょうと位置づけました。今日、旭川市がお話しになったように、旭川市が日本で9番目か10番目にユネスコ創造都市ネットワークに入られました。今、世界では246都市、84か国まで発展してきました。私は、この10年近くは、毎年ユネスコネットワーク総会に出ていまして、昨年の6月はイタリアのファブリアーノという、多分普通の観光案内には出てこない都市があるのです。これは、ファブリックという言葉がありますが製紙業で有名なまちですけども、その小さなまちで行われたのですが、そこに世界中の都市の代表者が集まり、イタリアの大統領もオープニングには参加するという、非常に格式高い会議になりました。

今、ユネスコの創造都市ネットワークで何が中心テーマとして語られているかと言いますと、ユネスコというのは、国連の教育、文化、科学の専門機関なのです。国連の大テーマというのはSDGsです。昨年の総会においても、鈴木浜松市長が冒頭のあいさつで、「創造都市というのはSDGsの流れと整合性がいい」と、非常に率直に感想で漏らされたのですけれども、文字通り文化芸術の面からSDGsに接近する、SDGsに近づく、それを創造都市が大きいテーマとして掲げるということになっています。恐らく自治体に戻られると、SDGsの担当課は、きっと別にあるでしょう。環境系かあるいは企画系でしょうか。おおよそ文化芸術を担当しているところでは自分のところはSDGsは無関係だと思っていると思うのだけれども、そうではなくて、むしろ文化政策面からもSDGsにアプローチしていくことが重要です。17の目標がありますね。そのうちの11番目、これは後で見てもらいたいののですけれども、そこには都市と人間居住地域が安全でインクルーシブで、レジリエントな地域であるようにと書いてあるのです。ここに文化の力をどのように活かしていくか。例えば、インクルーシブという言葉は、我々は、文化政策と社会包摂ということ、数年前から文化庁でも強調するようになりました。「社会包摂」ではなかなか分かりにくいので、最近は「誰ひとりも取り残さない」という言葉になったりしていますけれども。

先週、岐阜の可児市文化創造センターに行きました。ここは、館長の衛さんが5年ほどずっと「文化創造と社会包摂」ということで、社会包摂型劇場ということをしてテーマにしてシンポジウムを重ねてきています。そこでは、劇場の近くの高校生、非常に非行が多くて荒れている高校生、この中には放っておくと仕事にも就けない場合が出て、福祉経費の対象になるわけです。実際にそれは行政上の負担だ

から、そうではなくて、きちんと社会の中に戻ってきて、インクルージョンですね、そしてしっかりした仕事に就いてもらいたいということで、演劇ワークショップを高校生にやるようになったのです。そうしたら、非行のケースがずっと減るということが報告されています。例えばこういったことが、「芸術による社会包摂」ということになります。

それから、レジリエントという言葉あります。これは、震災後、非常によく使われるようになったことです。大震災とか台風とか、あるいは今回は恐らくパンデミックになると思うのです。外的な環境変化によってもものすごく大きなショックがあったときに、そのショックから社会が立ち直ると言うことがレジリエントということです。実は、日本では、堤防を高くすればいいという工学的レジリエンスだけが先行して、そして一面的にレジリエンスを考えるのですけれども、ヨーロッパや世界全般の流れの中ではそれだけではなくて、社会生態的なレジリエンス、社会が芸術文化の力で外的ショックから立ち直っていくことが求められています。これは、実は東北の大震災の後、文化庁は文化財レスキューをやりまして、失われた文化財を集めて修復して、そして地域の祭りや伝統的なさまざまなつながりというものを、芸術文化の力で再生してきましたけれども、そういうことですね。これがSDGsにつながっていくのです。つまりコミュニティの再生を、文化芸術でやることですね。

この点から考えると、阪神淡路大震災から25年経ちました。神戸市が大震災から10年で物理的復旧を成し遂げましたけれども、市民の中には心の傷が残っている。だから「心の復興」が大事だということで神戸ビエンナーレを始め、そして神戸がユネスコ創造都市にアプライしていくということで、創造都市戦略を震災から10年の節目に開始したのです。これもレジリエントな創造都市なのです。

そう考えていくと、京都市は今ロックフェラー財団のレジリエントシティとって世界100の中に入っています。日本では京都市と富山市の二つですけども、京都市の場合も、単に物理的に災害復旧、災害に対して備えるというだけではなくて、日常的にコミュニティの絆を文化芸術によって強めていく。そして、外的ショックから立ち直る、それを素早く行うということになってくるので、SDGsに向けた文化政策が大事になりますね。という話をしたいと思っていたら、先ほど「ART for SDGs」ですね、これはとてもいいです。北九州市もSDGs環境モデル都市になっていますよね。環境と文化とを全然別だと思わないで、それが一つになっていく方向に進めていってほしいと思います。

ユネスコというのは、実はこれは微妙な話なのですけれども、日本の役所の中では、ユネスコの担当しているユネスコ国内委員会というのは、文化庁ではなく文部科学省にあるのです。そうすると、今、創造都市ネットワークは文化庁が応援しているので、ユネスコの話は文化庁では直接出てこないのです。教育と文化は分けないで一本化してほしいということを書いてきたので、何とかユネスコの創造

都市の集まりと、それからこのCCNJ、国内のネットワーク、この接点をもっと強くして、そしてまだユネスコ未加盟の有力な都市も、ぜひユネスコにトライしてほしいと思います。

今、世界の国々の中で一番ユネスコに創造都市として数をもっているのは、中国なのです。中国政府というのは、一帯一路という大きな戦略がありますね。あれは、日本では経済戦略が伴うと思われているけれども、そうではないのです。文化戦略でもあるのです。欧州文化都市とそれから東アジア文化都市をつないでいこうという、非常に大きな世界文化戦略があって進んでいるので、我々もそれにごどのようにかかわるかということを考えながら、日本の世界的な役割を果たしていきたいと思っています。

そのように思っておりますら、世界銀行が創造都市プロジェクトを始めているのです。なぜ創造都市プロジェクトを始めているか不思議に思うかもしれませんが、今、世界銀行の大きなテーマは、途上国の貧困問題です。途上国の貧困問題を解決する一つの方向として、途上国でも創造都市を広げようということに世界銀行が乗り出しています。私のところに相談があって、1月下旬に、京都に60人ほど海外の担当者を集めて研修に行くから、少し手伝ってくれということになりました。具体的には、例えばネパールとかボリビアとか、私も行ったことがないし、全然様子が分からないけれども、とにかく何かアドバイスをしようということになっています。

例えば、そういう世界銀行のプロジェクトがこれから発展していった際に、では日本なら、例えば丹波篠山で研修をしてほしい、受け入れてほしいとか、金沢市で受け入れてほしいとかということになってくる可能性があるということです。ですので、日本で我々がやっている創造都市ネットワークはユネスコや、世界銀行などさまざまな世界的な流れの中で広がってまいりますので、ぜひそのときには協力をしていただきたいと思います。

それから、去年、「創造社会の都市と農村」という本を、私の古希記念で出したのです。これまで創造都市、創造農村という言葉で本を出してきましたけれども、「創造社会」という言葉が多分これから広がってくるかもしれません。その言葉は、どこでどう広がっているかということ、一つは我々のように創造都市と創造農村を含む「創造社会」ですね。もう一つは、経団連が2年ほど前に出したのですけれども、最近「ソサエティ5.0」という言葉が、3年前くらいから科学技術基本計画の中に入ったのです。「ソサエティ1.0」が狩猟社会で農耕社会で、3.0が工業社会、4.0が情報社会、そして5.0というのは創造社会だと書いています。

それは、AIとビッグデータが普及してくると、さまざまな創造的な仕事まで大いにコンピューターに取り込まれていきますから、一方でそれはこれまでの既存の仕事がなくなる。野村総研とイギリスの研究者によると、49パーセントの既存の仕事が2030年までに日本社会でなくなると言っています。一方で新しい仕事をつくらないと、膨大な数の失業者になるわけです。それに対してどう対応するかと言

えば、AIよりビッグデータを使いこなす創造性を持った人たちが現れれば平気なのですね。AIを使い倒さなければいけない。そういうリテラシーです。これを、子どものころから身につけるような、そういう「人間の顔をした創造社会、人間の顔をしたソサエティ5.0」というものを考えるのです。

そうしたら、今日は高松市も来られていると思いますが、高松市が創造都市計画の中で最重要点に置いてきたのが、子ども創造都市で、子どもを対象にしている。そこでモデル事業としてやってきているのが、保育園に芸術士を派遣して、保育士だけではなくて芸術士と一緒に子どもたちとさまざまなアートの遊びをするという事業です。これは、10年ほど前に僅か一つの園から始まったのです。今、60園くらいに広まっています。それは、保護者の受け止めがとていいからです。ですので、一方ではクリエイティブチルドレン計画というものが大事になります。こういう事業は、例えば神戸市ですと、「ちびっこうべ」という面白い事業があります。金沢市は、小中学生を対象にして「ミュージアムクルーズ」、21世紀美術館へ無料招待をやってきたという歴史があります。だから、子どもに向けの創造性ですね。これが一つ。

それからもう一方では、まぎれもなく高齢化社会が進むのです。高齢化して行って、寝たきりになってしまっただけは困るのですね。我々、皆さん方もそうですけれども、恐らく人生百年時代ですから、100歳まで生きるとしたときに、まだまだ長いのです。そこで社会活動が元気にできるような健康寿命や社会活動寿命をどう延ばすか。こちらの面でもクリエイティブエイジングという試みが始まっています。アメリカには10年も前にクリエイティブエイジングセンターができ、そしてイギリスではアートが社会活動寿命を延ばすという研究がありまして、例えば月に何回もライブコンサートに行くと、健康寿命が延びるということです。そういうことが積み重なっていきますと、クリエイティブに歳を重ねる、クリエイティブエイジング、これも創造都市の課題になってくるのです。実は、これは埼玉県がやっておられますね。埼玉芸術劇場で蜷川幸雄さんが始めたゴールドシアターというものがあるって、お年寄りが集まって海外公演もされている。きっとその人たちは、健康で長生きできます。そのデータをきちんととればいいのです。

さまざまな創造都市、創造性をめぐる、あるいは創造社会に向かう、そういった取り組みですね、こういったものを、我々は社会実験しながらデータを集め、そしてそこにきちんと予算付けをし、行政施策として継続性をもたせるということをしていただきたいと思いますので、ぜひ一緒に前進したいと思います。

少し長めになりました。すみません。どうもありがとうございました。

**司会** 佐々木様、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、2019年度創造都市ネットワーク日本総会を終了いたします。ありがとうございました。

発行日 令和2年3月31日  
編集・発行 アーツカウンシル新潟（公益財団法人 新潟市芸術文化振興財団）  
〒951-8131  
新潟市中央区白山浦1丁目613番地69 新潟市開発公社会館3F  
TEL：025-234-4530  
FAX：025-234-4521  
e-mail [artscouncil@niigata.email.ne.jp](mailto:artscouncil@niigata.email.ne.jp)  
主催 文化庁

---

本報告書は、文化庁の委託業務として「アーツカウンシル新潟（公益財団法人 新潟市芸術文化振興財団）」が実施した2019年度文化芸術創造都市推進事業の成果を取りまとめたものです。従って、本報告書の複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。

